
大相撲ショック（職）場所

馬河童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大相撲シヨック（職）場所

【Nコード】

N9935F

【作者名】

馬河童

【あらすじ】

二度目の会社勤めで味わう封建社会。得意の相撲で逆転のうつちやりなるか？某小説賞に投稿してボツになった作品です。評価シートとやらが返送されてくるのを待ってましたが来ないので、しびれを切らして投稿しました。是非とも何が悪いのか、率直な御意見をお聞かせ下さい。また、ちょっとしたHなシーンもあるので、ご注意を。

1話

「えゝ、この度、経理課に配属になった潮田竜司です。あのゝ、よろしく願います」

僕は十数名の人間を前に挨拶していた。こういう状況には慣れていないので、頬が上気して、顔が真っ赤になっているであろう事が想像される。「えゝ」や「あのゝ」が余計である事もよくわかつているのだけど、つつい出してしまうのが、僕が社会人でない証拠だ。僕は二度目の就職をして、今この場に立っている。五年前、一度は働いたものの、自分には向かず一年で会社を辞めたのだ。その後、フリーターを何年か経験したが、孤独と貧困に耐え切れず、結局就職試験を受けてN産業に合格し、現在、この歓迎会の場にいる。

「おい、何か趣味とか特技とかないのか？」

聴衆から声が揚がった。

「趣味……、特技……うゝん、相撲ですかね」

僕がそう答えると、

「何じゃそりや？」

「相撲？」

と訝しがる声が飛んだ。

「あのゝ、一応、高校で相撲部だったので。そこそこ自信はあります。『新潟の千代の富士』というあだ名もあつたくらいで、インターハイにも出たんですよ」

僕は胸を張って言った。これが、おそらくこれまでの人生で一番誇れる事だからだ。しかし、

「潮田関、ごつつあんです」

司会の半ばふざけた感じの締めで僕の挨拶は終わってしまった。バカにされたような気もしたが、まずまず皆の印象には残ったであろう。僕はパラパラとした拍手に送られて、挨拶する前にいた位置に戻った。

「高い所から失礼致します」

不意に声が響いて、僕はその方向を見た。同時に入社した生河君が挨拶を始めようとしていた。

「本日は私共の為に、このような場を設けて頂き、ありがとうございます」

僕は衝撃を受けていた。彼の丁寧さは、僕とは段違いではないか。しかもどう考えても彼の方が印象も良いに決まっている。

生河君の挨拶は続く。

「私、この度本店出納係に配属になりました、なまかわただし生河忠志と申します。微力ではありますが、少しでも皆様のお役に立てるように頑張りたいと思います。今後とも何卒よろしくお願い致します」

僕はひどく恥ずかしくなった。挨拶の上手さに天と地、いや横綱と幕下程の差があり、これでは僕は引き立て役みたいなものだ。気のせい、彼の方が皆の拍手も多いように感じた。

僕達新人二人の挨拶が済むと、まだ名前も知らない本店課長が乾杯の音頭を取り、酒が酌み交わされ始めた。

「おう、頑張れい！」

「ほれ、新人飲め！」

こんな台詞を吐きながら、誰だか知らない先輩方が次々と酒を注いでくる。中には

「俺も相撲好きだぜ。毎場所欠かさず見てるよ」
などと言ってくれる人もいた。

この歓迎会に来ているのはほとんどが男性の諸先輩方だが、中には何人か女性も混じっているのが見えた。特に一人、凄く綺麗な方がいて、生河君に名前だけ聞いたところ、守田さんというらしい。残念ながら、たくさんのおっさんに囲まれて近付く事は出来なかったが、次の機会があれば是非とも話してみたいと思った。

結局、僕は入れ替わり立ち替わり酒を注がれ、神妙な面持ちで「一生懸命頑張ります」

などと心にもない事を言っでは、コップを口に運んだ。気付くと

顔が火照っていて、いつも仲間内で飲んだりする以上に酔っ払ってしまっていた。そこへ、

「おい、大丈夫か？」

と声を掛けてきた巨漢は、僕の直属の上司となる与田さんだった。「大丈夫ですよ！」

いいところを見せたい訳じゃないのだろうか、自分の口から意味のない頑張りが出る。

「じゃあもう一軒行くぞ」

与田さんは僕と肩を組もうとする。酒臭いし、デブ特有の汗っ掻きで肌がぬるぬるしている為、気持ち悪くて嫌なのだが、避ける術はなく、無理矢理引つ張られ、摺り足で歩いた。

「潮田君は彼女とかいるのか？」

「い、いません」

「そうか。俺もだ。三十七歳にもなって独身だ。ガハハハハ」

与田さんは笑っているが、僕はどう反応して良いか、判断がつかなかった。ここは笑うところなんだろうか？社会人一日目にして、早くも難問に出会った気がした。

結局、僕は軽く笑みを浮かべる事で、与田さんの独身話を受けた。「ガッハハハハ。こんな年で独身だと、もう笑うしかなくて、おかしくなってくるよなあ」

牛と豚の合い挽きのような膨らんだ顔をした彼は、自虐的に言っていた豪快に笑う。そして僕の肩を一層強く引つ張ろうとするので、酒臭さと親父臭が混じった変な匂いが、僕の鼻をついた。与田さんはかなり腕力があり、力士のパワーを持ってしても容易に離れられない。これが社会人のしがらみというやつなんだろうか。

「ところで潮田君、江崎って会ったか？」

「江崎さん…ですか？」

僕は先程の一次会の記憶を辿ってみたが、江崎なる人物の事はまるで思い出せなかった。

「守田さんって若い女性がいただろう？彼女と付き合っているとい

う噂があつて腹が立つんだ、あの野郎。仕事でも無愛想だし」

「はあ……」

守田さんと言えば、一次会で見掛けた中でも一番良いと感じた女性だ。確かに若くて綺麗で、こんな人がいれば仕事も楽しくなるかなと思わせてくれるような人だった。与田さんの半ば八つ当りのな怒りはともかく、守田さんと付き合っていると聞き、僕もその江崎という男にはあまり良くない印象を抱いた。

こんな話をしながら与田さんに引き摺られている内に、二次会会場の居酒屋へ辿り着いた。与田さんが店内に入るなりトイレへ行ったので、僕はようやく束縛から解かれ、先に席へ向かった。幹事に案内されて一番奥の空いている席に座ると、左隣に座った同年齢くらいの細身の人から挨拶された。

「潮田さんですよ？本店出納係の江崎です。これからよろしくお願いします」

僕は挨拶を受けて、一気に緊張感が増した。この人が例の江崎さんなのだ。

「う、潮田です。こちらこそよろしくお願いします」

と挨拶を返したものの、不思議と身構える自分がいて、与田さんの話から多大なる影響を受けているのは間違いなかった。

二次会なので、正式な挨拶などではなく、テーブル上の瓶ビールを周りの人に注ぐと、自然とあちこちで会話が弾み出した。真正面に座っている人も、隣の人と熱を帯びた会話を始めており、僕には左隣の人間と話さざるを得ない状況が出来上がっていた。僕は意を決して左側に自分の身体を向けた。

「あのー」「あのー」

二人の喋り出しが被ってしまった。ひょっとして相手も同じ事を考えていたのかもしれない。

「あ、いや、そちらからどうぞ」

「いえ、そちらから」

何を譲り合っているのかと思うと、おかしくなってきた。与田さ

んが言う程、無愛想なイメージは感じられない。僕は主導権を譲られたのを受けて、こちらから会話を始める事にした。

「あの、本店出納係という事は、僕と一緒に入った生河君と同じ仕事をされるんですか？」

「そうです。生河さん、出来が良さそうだから、月曜日からバカにされないか、心配ですね。あれ？今日は彼の方は二次会来なかったんですね」

「そうみたいです。僕は同じ部署の与田さんに引ッ張られてここまで来たもので……」

「与田さんと一緒ということはA町支店勤務ですよ？」

「そうです。経理課としてはかなり人数がいるのに、僕の行く所は十人もいないですよ。皆さんが賑やかで楽しそうで羨ましいですよ」

そうなのだ。僕も経理課配属とはいえ、本店勤務でないため（逆に大半の人が本店勤務なので、皆は面識がある）、この場にいるメンバーでは与田さんしか、直接一緒に働く人がいないのだった。何だか張出大関みたいな感じた。

「A町だつてきつと楽しいですよ」

「ええ、皆さんいい人そうでした」

僕は話していて、この江崎さんも意外といい人に思えてきた。勝手に嫌な人だと思い込んでいたが、よく考えてみたらたかだか数十分前に初めて聞いた話だ。ひょっとして与田さんは自分が独身なので、守田さんとの噂話をひがんでいるだけではないのかとも思えてくる。

気付くと僕達のグラスは両方とも空になっていた。僕がビールを注ぐとすると、

「いや、私はワインで」

と彼は赤ワインを注文した。僕は全く気にならないが、こういう部分が与田さんの気に食わないところなのかもしれない。これは前の職場であつた事だが、「上司の酒が受けられないのか？」という

風潮は未だ根強く、先輩の注ぐビールを飲めない奴は、それだけで低い評価を受けていた。ひよっとすると、この会社でも同じような空気が流れている可能性はある。

しかし、今は僕と話しているので、それは関係ない。このまま会話は弾み、僕の相撲話、フリーター時代の話、お互い一つしか違わない（しかも僕が年上）という年齢の話、海外旅行の話など、いつしか気軽に打ち解けてきた。それこそ友人にでもなれそうな雰囲気だ。僕はこうなったら酔いに任せて噂の真偽を説明してやろうという気になってきた。

「江崎さん、本店に守田さんっていますよね？」

「いますね」

「美人だし、いいですよ。あんな方と一緒に働けたらなあ」

「私なんかいつもウキウキしてますよ」

「おっと！江崎さん、とぼけないで下さいよ」

「は？何を……」

「聞いてますよ。守田さんと付き合っているって」

「へえっつ。そんな噂が」

彼はとぼけたような、そうでもないような、どちらとも判断しがたい表情をする。

「どうなんですか？本当なんですか？」

僕は詰め寄ったが、

「さあ？どうなんですかね」。仮にそうだとしても、答えられませんよ」

というのが江崎の答えだった。それを聞いて僕は悔しくなり、（どちらとも言えないのか、すかしやがって）と瞬間感じたが、よく考えてみたら職場内恋愛が明るみになる事は非常に危険なのかもしれないと思った。僕だってもし同じ職場の女の子と付き合っていたら、誰にも知られたくはないだろう。という事は、違うなら否定すれば良い筈なので、彼らは付き合っているのだらうとも推測される。結局、僕は悔しくならざるを得ない訳だ。

その後も僕は突っ込んで聞いたが、江崎はそれをすかす状態が続
き、会話は平行線を辿った。相撲で言えば、土俵中央で組み合った
まま膠着状態になってしまったような感じだ。これは水入りする他
ない。

そんな内に会も時間一杯になり、僕はまた与田さんに捕まって肩
を組まれ、タクシーの後部座席に乘せられてしまった。

「潮田君、月曜日からよろしく頼むな」

「こちらこそよろしくお願いします」

「さっきの飲みで江崎と話していたみたいだけど、あいつどうだっ
た？」

与田さんは僕達の様子を見ていたようで、やはり聞いてきた。

「いや、やっぱり守田さんと付き合っているみたいですね。悔し
いなあ」

「やっぱりそうなのか。あの野郎！」

それから与田さんは怒って江崎への罵詈雑言を吐きまくっていた。
僕は同調しかねる部分もあったものの、綺麗な守田さんが彼女であ
る羨ましさの方が優先して、汚い言葉が口をついて出た。そんな自
分が嫌だった。

僕は与田さんにお礼を言うと、途中でタクシーを降りて自宅へ帰
った。飲み過ぎで頭痛がする程だったので、風呂にも入らずベッド
に入った。寝ようと思ったら、江崎と守田さんが仲睦まじくしてい
るシーンが頭に浮かんできて、腹立たしくなってきた。僕は想像力
を駆使してイメージ上の江崎を自分だと思い込み、守田さんとうま
くやる妄想を頭に浮かべた。すると、手は自然と下半身へ向かい、
上下に高速で動く。

「うあっ……」

気が付くと僕は白い液体を漏らしていた。正氣に戻ると、凄く虚
しい気分がする。酔っているので拭くのも面倒臭くて、僕はそのま
ま眠った。

2話

金曜日の歓迎会から土日を経て、月曜日を迎えた。僕は今日からA町の支店に出勤する。始業時間は八時半だが、金曜日に与田さんに「八時には行って、皆の机を拭くようにした方がいいぞ」と言われたので、しっかり早起きして八時前に出社した。

支店の入り口に立ち、ドアノブをひねると、既に鍵は開けられていた。僕の前に誰か来ていたらしい。

「おはようございます」

と挨拶しながら中に入ると、僕の直属の係長になる南川さんみなみかわが座っていた。

「おはよう。今日からよろしくな」

横幅があり、ブルドッグに似た風貌の南川さんが言うのと、挨拶もドスが利いた感じで、全然爽やかに聞こえなかったし、

「よ、よろしくお願いします」

と僕もビビって、どもってしまった。

そして僕は最初の疑問にぶち当たった。机を拭くのは良いが、何処に雑巾があるのかすら、全くわかっていなかったのだ。とりあえず、流しの辺りを探るが、布切れ一つ出てこない。

「あの〜」

僕はパソコンの画面に集中している南川さんに尋ねた。

「雑巾って何処に……」

「ん？ 雑巾？ 何すんだ、そんなもん」

「あ、いや、皆さんの机を拭こうかと……」

「いいいいいよ、そんなのは。とりあえず座つてろ」

眼光、そして口調も鋭くそんな事を言われてしまったのは、我を通してまで机を拭く意味はなさそうだった。もともと人の机を拭こうなどという殊勝な気持ちはなかったので、係長の言に従い、僕は自分の座席に腰掛けた。

しばらく二人きりの沈黙の空間が続き、僕にとっては非常に居心地が悪かった。ここへ来て湧いた二番目の疑問は、何もわからないので、人が集まるまで何をすれば良いかだった。することがなく、視線はただ中空をさまようのみ。時々、南川さんの様子をちらりと伺っては視線を元に戻す状態が続いた。

八時十五分を過ぎて、ようやく他の人間がちらほらと出勤してきた。与田さんも来て、

「金曜日はご苦労」

などと声を掛けてくれた。そして、

「おはようございます」

と入って来たのは、尻が太くてプリプリした牛のような初老のオヤジ。この人がA町支店の経理課の長である盛永さんだ。相撲部屋で言えば、親方のような人だ。

「おはようございます」

僕は頭を下げた。

「おつ、潮田君、来たか。今日から頑張ってくれよ」

盛永さんは僕を見てそう言うと、部屋の中央にある、自分の席に腰掛けた。

「金曜日はたくさん飲んだかね？行けなくて悪かったね」

「いえ」

「今度は一緒に飲むからな」

「よろしく願います」

と返事をして、僕はもう一度頭を下げた。少し緊張したが、にこやかに話してくれたので、安心した。

そして八時半が過ぎた。しかし、まだ席は埋まらない。二人程来てない人間がいる。一人は五分後に来たが、もう一人である隣の係長がまだ来ない。僕は与田さんに命じられて会社の概要を読んでいたが、その来ない係長が妙に気になった。

八時四十五分、突然部屋のドアが開いた。

「や、おはようございます」

全く悪びれる事無く入って来たその男こそ、隣の係長・曲瀬^{まかせ}さんだった。僕は常識外れたこの男に驚く他なかった。所業だけでなく顔の崩れ方も半端じゃない。昔テレビで見た事のある、『くしゃおじさん』みたいだった。ダサい黒ぶちメガネを掛け、身長も低い上に短足で、見た目も風采の上がない感じだ。

八時半業務開始のところ、九時前によく全員が揃い、部屋の仕事が始まった。それにしてもタイムカードもなく、平気で八時四十五分に来る奴が容認される環境には驚いた。しかも僕より遥かに給料の高い係長がだ。しかし、当然僕が文句を言える筈もなく、このまま見ているしかない事はよくわかっていた。

僕の配属された部署は、A町支店における一切の経理事務を取り扱っている。僕は高校時代から根っからの文系で、数学と聞いたただけで、アレルギーを起こしかねない体質だった。百点満点のテストでも、平気で一桁台の点数を取る実力の持ち主だ。そんな僕が何故経理事務を担当させられるのか、甚だ疑問に感じていた。この午前中、部屋にあるいろいろな本を読むように命じられたのだが、どれも経済的な解説や数字の羅列で僕の興味を引かず、見ただけで眠りに陥りそうなものばかりだった。皆、忙しくて僕になど構っていないように、ほとんど見向きもされないのもまた辛い。

「午後からは相手するからな。ちよつと我慢してくれよ」

南川さんが気忙しそうに手を動かしながら言うのを、僕は夢見心地で聞いていた。ヤバい。分厚い経済本のページをめくる力も抜けなくて、今にも意識を失いそうだ。しかし、

「もしもしタケチャーン？あ・た・し！」

そんな僕の目を覚ましたのは、オカマ言葉による電話だった。びっくりして声の主を見ると、与田さんだった。この気持ち悪い声を耳にして、僕の目は再びしっかりと見開かれた。

「なんで飲みに誘ってくれなかったの？」

「いっつも放っておくんだから」。ひどいわ」

与田さんは人目をはばかりる事無く、こんな会話を続けた。周囲も

慣れているのか平然としており、驚いているのは僕だけのようだった。巨漢というかデブに近いおっさんの与田さんが、女言葉で勤務中に喋る姿は異様な光景だった。僕は彼に対する認識を新たにしたい。時計は十二時を回り、ようやく昼休みを迎えた。僕は昼飯を用意してこなかったもので、どうしようかとまごついていたところ、

「おい、食堂案内するぞ」

と声が掛かった。曲瀬係長だった。あまり一緒に行きたくない気もしたが、断る訳にもいかない。僕は彼に付いて、まだよくわからない構内を歩いて行った。連れて行ってくれる割には、彼は終始無言で、少し気まずい思いがした。

部屋からの道のりもよく覚えられぬまま、僕達は食堂に着いた。期待はしていなかったが、曲瀬さんがおごってくれる筈もなく、僕は自腹でラーメンを注文した。曲瀬さんはすぐに出てくる定食を頼むと、さつさと席に着き、食べ始めていた。麺類は時間が掛かるらしく、僕はしばらく待たされた。

ラーメンを席に持つて行った頃には、曲瀬さんの膳は空っぽに近くなっていた。僕がスープを啜っている間に、彼は全てを食べ終わった。

ここで僕はまた驚かされた。彼は自分が食べ終わると、僕を置いて去って行ってしまったのだ。なんたる自分勝手さ。本当に『案内』だけしてくれて、こっちは部屋への戻り方もわからないし、いい迷惑だ。

僕は迷いながらも、何とか休み時間中に部屋へ戻る事が出来たが、曲瀬係長は何処吹く風といった感じで一心不乱に鼻毛を抜いていて腹立たしかった。昼からが不安になってきた。やがて時刻は一時になり、業務が再開された。

「ようし、じゃあ業務の説明するから、こつち来い」

と南川さんが僕を呼ぶ。僕達は、盛永さんの真正面にある会議用の円卓に、向かい合わせて座った。南川さんも与田さんや盛永さんに負けず劣らずの体格で、顔の迫力も手伝って、正面にどっしり座

られるとヤクザ同然だった。

「まずはウチの会社の概要だが……」

資料を広げながら南川さんが説明を始める。会社のなりたちから、歴代社長、資本金、昨年度の決算まで、細々と教えてくれた。正直言って、何が必要で何が不要な話なのかは、よくわからなかった。

話は進行し、実際の業務説明へと移った。僕がやる仕事はA町における支払伝票の処理が中心らしい。支払い日付がどうだとか、消費税がどうだとか、この話がまた退屈で、段々と僕の身体に異変が起こってきた。

「こういう時の消費税の計算は……」

南川さんの声が念仏のように聞こえる。いつの間にか僕の両まぶたは今にも塞がりそうな程、くつつこうとしていた。そもそもこの部屋は春だというのに暖房が強過ぎて、暖か過ぎる。

さらに僕にはもともと昼間眠くなる癖がある。フリーター時代など、毎日のように昼寝をしていたし、昼間ドライブをしている時に意識を失いかける事など日常茶飯事だった。こうなってしまうと、南川さんの怖い顔も気にならなくなるくらい、強烈な眠気に支配される。盛永さんをはじめ、部屋の人間の視線を感じるような気もするが、もうどうしようもない。最後の抵抗として、自分の腕や足をつねるが、全く効き目がなく、痛覚すら失われた感じだ。何度か首が折れ曲がりそうになり、ハッと目が覚めた。しかしそれも束の間で、再度眠気は襲い来る。この一番、僕は睡魔に寄り切られ負けた……。

よく覚えていないが、気付いた時には、話が終わっていた。気付かれたのか気付かれていないのか、怒られる事はなかった。時刻は五時を回っており、窓の外の景色も薄暗くなっていた。

「今日はもう帰っていいぞ」

と南川さんが言う。僕はその言に従い、寝てしまった（かもしれない）恥ずかしさを隠すように、そそくさと職場を出たのだった。

3話

A町勤務二日目、僕は少し重い気分で出社した。昨日の居眠りを見られたかどうかが気になり、昨晩はよく眠れなかったのだ。このまま行くと、今日も昼に猛烈な眠気が来る可能性が高く、憂鬱になってきた。今日も僕は南川さんの次に出社し、やはり九時前に曲瀬さんが飄々とやって来た。どうやらこのペースは定番らしい。

午前中は昨日、睡眠学習(?)した、伝票の処理を幾つか行ったり方をよく覚えていないところもあったが、与田さんに聞いて、何とかこなす事が出来た。その与田さんは今日も高音のオカマ電話をしていた。

昼休み、今日は曲瀬係長の下で働いている、内藤さんが誘って来て、外へラーメンを食べに出た。内藤『さん』とは呼んでいるが、年齢は僕より五つも下で、それでもかなりしっかりしているように見える人だ。背の高さがそれ程でもない上に、横幅が広いので、貫禄もある。髪の毛を茶色くして伸ばしている辺りは、若さも見受けられるけれど。僕は昔から年上より、年下の方が気が合うので、彼ともすぐに打ち解けた。

「潮田さん、ウチの部屋、どう思います?」

麵を啜りながら、彼が尋ねてきた。

「どう……って、皆さん優しくいい雰囲気じゃないですか」

僕は必ずしもそうとは思っていないが、まだ人間関係を把握していないので、当たり障りのない答えをした。

「そう見えます?でもね、意外とドロドロしてるんすよ」

「へえ〜っ?どんなところか?」

僕は彼の言葉に興味湧き、一気に話に食い付いた。

「見てたら少しはわかるっしょ?」

「どうやら「……っす」というのが、彼の口癖らしい。」

「え?何が?」

僕の頭にはオカマや遅刻野郎が浮かんだが、それはあえて言わず、聞き返す。

「わかってないんすか？まあ潮田さん、部屋の人をいい人ばかりだと思ってるなら変な事を言うのも何だしなあ……。段々わかってきますよ」

「そんな、隠さないで教えて下さいよ」

僕は食い下がるが、

「いやいやまた今度」

とはぐらかされてしまった。しかも、

「それより潮田さん、凄い度胸あるっすね」

と話題を移されてしまった。

「度胸？何を言うんですか、突然」

「だって昨日、南川さんの話聞きながら寝てたっしょ？」

彼の台詞を聞いて、僕は食べているラーメンを吹き出し、心臓が止まりそうになった。やはり見られていたのだ。

「寝てなんかいませんよ。確かに眠かったけど」

僕はとぼけた。

「いやいや完全に目を閉じてたっすよ。俺と吉見さん、見てて笑いそうになりましたもん」

「吉見さんもそんな事言ってるんですか？困るなあ」

吉見さんとは、内藤さんの直属の上司で主任の女性だ。僕はその二人に、寝ている姿を見られてしまったらしい。

「南川さんや盛永さんも気付いてるんじゃないかな？だから、凄い度胸だと思ったんすが」

「いや、だから寝てないですよ。嫌だなあ、みんなして変な疑いをかけて」

とは言ったものの、僕は内心不安を感じていた。初日の敗北はかなりのマイナス印象を与えてしまった気がする。南川さん、本当は怒っているのかもしれない。

「まあ、潮田さん親しみやすそうな人で良かったっすよ。週末の旅

行も楽しみだな」

「旅行？」

「経理系総出で金曜泊まって、土曜の早朝に帰るのがあるんすよ」

「初めて聞きましたよ。そんな話は」

僕はその旅行の話を聞き、楽しみのような、不安のような、どっち着かずの印象を抱いた。

4話

僕がA町勤務になってから、一週間が過ぎようとしていた。仕事は二日目から、簡単な伝票処理を任され、それを継続していた。変わった事と言えば、室長の盛永さんから直々に伝票の扱い方について指導されたりしたくらいだ。この人の説明はくどいし、自分の頭でしかわかってないような事を言うので、南川さん以上にわかりにくく、僕を眠りに誘うに十分な実力を備えていた。もちろん、僕も同じ失敗を二度繰り返すつもりはないので、今回は耐えた。

それ以外にも普段眠くなる事はあったが、ブラックコーヒーを飲んだり、椅子に座りながら伸びをしたりして、何とか乗り切る事が出来た。

大変だったのは、電話対応だ。何故かウチの会社は社内で名乗らない人間が多く（事実、同室内の人間も名乗らない奴ばかりだ）、いちいち「どちら様でしょうか？」と聞き返さなければならなかった。その上、僕はまだ入ったばかりで業務に関わる受け答えに慣れていないので、うまく喋れなくて何度も凹んだ。

そんな事を繰り返しながら、金曜日を迎え、時刻は夕方に差し掛かるうとしていた。今日は内藤さんに聞いていたとおり、経理課総出の温泉飲み旅行があり、終業後に大型バスが迎えに来て、温泉地へ向かうとの事だった。

就業時間が終わると、僕は部屋の人間と共にバスに乗り込んだ。ちょうど隣は内藤さんになったので、若者同士、他愛もない会話で目的地まで話を繋いだ。

旅館に到着すると、まずは入浴するように言われ、僕は硫黄臭い温泉にゆつたりと浸かった。こんな所で人の裸体、それも男の裸体を見ても仕方がないのだが、社内人間は誰も皆腹が出ていて、不摂生や酒の飲み過ぎがこんな身体を作るのであると容易に想像された。僕も最近、たるみかけてはいるが、こんな引退寸前の力士み

たいにはなりたくない」と、心底思う。

そして入浴後、宴会会場へ向かった僕は、入り口でくじを引かされた。8番と書かれた膳の前に座ると、僕の隣には綺麗な女性が出て、ドキリとした。あの江崎さんと噂になっている、守田さんだった。

僕は嬉しい反面、緊張もした。改めて近くで見ると、長いまつ毛にきりりとした二重の目、適度な高さの鼻、少し赤みを帯びた口唇が、整った輪郭にうまく配置されて僕には理想的だった。彼女も湯上がり直後のようで、うつすらと頬が赤くなっているのが、色っぽく見えた。

A町支店では「江崎さんの彼女だ」という噂が立っているが、こんな女性を彼女に持てる奴の何と羨ましい事か。自分の今までの女性遍歴を考えると、こんなにいる女と付き合った事はなく、与田さん同様、江崎さんが憎らしく思えてくる程だ。

「潮田さん、もう職場慣れました？」

「えっ？ああ……、まあまあ……です」

彼女から急に話し掛けてきて、僕は驚いて舌が回らなかった。いや、そうでなくてもうまくは喋れなかったかもしれない。

僕は昔から女の子と話すのが苦手で、気の利いた事とか上手に言えない方だった。昔の彼女にも「人の目を見て話して」と注意された経験があるが、うまく出来た事がない。大体、そんな事をしたら緊張して顔が赤くなってしまう。自分の彼女ならいざ知らず、そうでない場合、それを話している相手に悟られるのが凄く嫌だった。

そんな訳で、僕は早く目の前の酒を飲みたかった。酒の力を借りれば、多少なりとも強気で会話出来そうな気がしたからだ。

程なく全員起立して、乾杯の号令が起こり、僕は守田さんに注いでもらったビールを一気飲みした。これで勢いをつけた僕は、手酌でもう一杯注ぐと共に、守田さんに話し掛けた。

「守田さん、結構飲めるんですか？」

「そんなに強くはないです。ビールはあまり得意じゃなくて」

「あ、すいません」

僕は注ごうと思つて構えたビールを慌てて下げた。

「何か他の飲み物にしますか？」

「じゃあワインにします。あそこに赤ワインがあつたみたいだから彼女が指差す方向には、日本酒や焼酎などの瓶が固まっているのが見える。その豊富さは、まるで優勝力士の宴会場のようだ。」

「俺、取ってきますよ」

僕は立ち上がり、瓶の群れへ足を進めた。確かに年代モノらしきワインも幾つか置いてある。僕は銘柄などよくわからないので、立派そうな一本を選んで、手に取った。

席へ戻る最中、僕の脳裏に他の誰かもワインが好きだったような曖昧な記憶が浮かんできた。でも誰かは思い出せず、そのまま守田さんの脇に戻ってしまった。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

守田さんは僕の注いだ赤い液体を、おいしそうに飲んだ。

「強くないって言つてましたけど、おいしそうに飲めますね」

「そうですね？ 強くはないけど、お酒の場の雰囲気は好きなんです」

「じゃあ結構飲み会とか、出るんですか？」

「友達とは週末とかによく……。職場の方では若手でたまにみたいな感じです」

「若手と言つと……」

「江崎さんとか、そちらの内藤さんとか、あと潮田さん知らないかもしれないけど、私の同期とか」

と彼女が言うのを聞いて、僕の中で先程の疑問が氷解した。ワインが好きなのは江崎さんだった。この前の飲みでも、彼は一人でワインを頼んでいた。それも赤を。これは偶然の一致なのか、それともカップルならではの共通の嗜好なのか。妄想力豊かな僕の頭の中には、江崎がワインのおいしさを講釈し、守田さんがそれをうつとりとした目で聞き入っている姿が浮かび、無性に悔しくなってきた。

こんな事で疑心暗鬼になる僕はバカかもしれない。

「いいですね、若手で飲みなんて」

僕はとりあえずそんな言葉しか言えなかった。

「若手がいいなって、潮田さんも十分若手じゃないですか」

「おっと！そ、そうですね。俺も若手が……」

「今度一緒に飲みましょうよ」

「えっ？ああ、お願いします。是非！」

僕は彼女の誘いの言葉を聞いて気分が高揚した。江崎の彼女であろうとなかろうと、こんな子と飲めるのは嬉しい。もっともこの手の社交辞令にはかなり騙されているので、今一つ信用出来ないのも事実だ。だからつい、

「本気で言ってます？」

なんて聞いてしまった。

「本気ですよ。さつき飲み会の雰囲気が好きって言ったじゃないですか。潮田さんや、生河さんとも一緒に飲んでみたいと思いますよ」

「でも、彼氏に怒られたりとかしないんですか？」

僕はもう一丁突っ込んでみる気になった。この際、江崎さんとの関係を暴いてみたくなってきた。

「彼氏いたら、そんなに飲み会なんてしてられませんよ。いれば、彼の方を大切にしたいし」

と彼女は平然とした表情で言う。見る限り、その顔や口振りに嘘はなさそうだ。しかし、女は演じる事に長けた生き物だ。僕はもう一杯、ビールを飲み干すと、悪ノリついでに尋ねた。

「守田さん、ちょっと聞いていいですか？」

「な、何ですか？」

「失礼だったら謝ります。実は江崎さんと付き合っているって噂を聞いたんですが、それって本当なんですか？」

「私が江崎さんと？誰がそんな事を……」

彼女は驚いた顔をしたが、動揺した様子はない。

「それはちよつと言えないですね……」

僕はさすがに与田さんの名を出すのは憚られた。

「それじゃ私もその質問には答えられませんね」

守田さんは軽い笑みを浮かべながら言う。うまく切り返すあたり、こんな応答には慣れているのかもしれない。しかも、この表情がまた魅力的だった。これは僕の負けだ。立ち合いの仕方を誤ったか？

「わかりました。言いますよ。部屋の与田さんから聞きました」

僕は観念して、犯人の名を告白した。

「与田さんが……。ひよつとしてA町支店ではそういう噂になっているのかしら？困るわ」

「俺も聞いただけですから……。何を確証に言ってるのかはわかりませんが……。事実じゃないんですか？」

「確かに江崎さんは本店の中では格好良いし、普段からよく話し掛けてくれるけど、そういう仲ではないです。どうしてそんな噂が立つのかしら？」

「みんな、ひがんでいるんじゃないですかね？俺も守田さんと仲良くしてるなんて聞くと、少し悔しいですから」

言いながら、僕は何をこんな軽口を叩いているのかと思った。江崎さんとの仲が否定されただけで（それも本当かどうかわからないのに）、少し心が浮き立っている自分が間抜けに感じられる。まるで7勝しただけで、勝ち越した気になっている力士みたいだ。

「そうですか？全然、話し掛けてもらっていいんだけどな。私って何だか、話しくい人に見られているみたいですね」

「いえ、そんな事はないでしょ。こうやって俺にもいろいろ話してくれてるし」

とは言いながらも、彼女に話し掛け辛いというのはわかる気がした。

まずその容姿端麗さが、男を卑屈にさせる。美人に対しては、容貌的に自分が劣ると感じる男は弱腰になるものだ。人間としてどれほどの差がある訳でもないだろうに、美しいとか、かわいいとかだ

けで、自分が幕下、相手が横綱であるようにでも感じて、まともに会話すら出来ない。場合によっては、そんな女性と一言二言言葉を交わしただけでも嬉しくなってしまう。僕もこんな風に酒の力でも借りないと、彼女とは気軽に話せないかもしれない。

それに正直言つて、守田さんは活発なタイプには見えないので、どんな会話をして良いかが今一つ困難な感じもする。そんな守田さんと日頃から仲良さそうにしているという、江崎さんはやり手なのかもしれない。

と、こんな話をしている間に、場が急変した。派手な制服を着た女、それも一人として顔を知らない女が十人程、宴会場に入ってきたのだ。

5話

「何なんですかあれ？」

僕は謎の女性集団に驚き、守田さんに尋ねた。

「ああ、あれ。コンパニオンですよ」

「コンパニオン？」

僕はこんな所にコンパニオンが来る事と合わせて、守田さんが平然としている事に驚いた。

「毎年この会では呼ぶんですよ。男性の相手をするために」

「ええ〜っ？それってセクハラじゃ……？」

「私も最初は驚いたんだけど、確かに彼女達が来てくれると、私達が注いで回らなくていいから助かるんですよ。ほら、酔っ払いの相手って大変でしょう？」

「なるほど。一理ありますね」

僕は守田さんの弁に感心させられた。

コンパニオンは各自散らばって行き、何人かの膳の前に座った。

お偉いのおっさん達は急に表情を緩めて、普段見たことがないようなだらしない顔に変貌していた。

とはいえ、彼女達は脱いだり、密着したりのサービスをする訳ではなく、お酌してオヤジ達の話の聞きに回っているだけのようだった。ある意味、大した商売だと思う。

急に場の流れが賑やかに変わった為、僕と守田さんとの会話も停滞気味になってきた。ちょうどそこへ、

「おい潮田君、一番どうだ？」

と声が掛かった。確か本店の出納係長だ。

「一番……とは、当然相撲ですよね？」

「ああ、新潟の千代の富士、一丁胸を貸してくれ」

頬を上気させて喋っている所を見ると、酔って調子に乗っているようだ。

「うん」

僕は今までに酔って取組を行った事などなかったので、少し迷った。それでも素人に負ける筈がないと思い、

「いいでしょう」

と快諾した。

するとものの数分で畳敷きの大部屋の中央部分がスカスカになった。コンパニオンまで興味深そうに、会場設営を手伝っている。

「この畳4枚を土俵として、ここから出たら負けという事でどうだ？」

出納係長が下を指差して提案してきた。

「はい」

「よしっ！決まりだな」

と言つて、係長は自分の頬を叩くと、一気に浴衣を脱いだ。

「キャーッ！」

と女性の悲鳴が揚がる。彼はブリーフ一丁で両手を腰に当て、仁王立ちしていた。そこへ浴衣の帯をまわしのようには締めた。

「これでどうだ？力士として認めてもらえるかな？」

僕は頷いたが、彼のぷよぷよの肉体が電灯で豚のように白く輝き、思わず笑いそうになった。だが、僕も同じようにしないといけないであろうと感じ、仕方なくトランクス一丁になった。

「おおっ」

僕の肉体に、観客が驚いていた。それはそうだ。昔、鍛えに鍛えた身体はそう簡単に衰えはしない。

誰が思いついたのか、塩を山盛りにして持ってきた奴がいた。僕は旅館がOKする筈はないと思いながらも、出納係長に続いてそれを撒いた。インスタント行司が仕切り、僕らは向かい合う。いつの間にか、畳の四方を職員のほとんどが囲んでいた。

「はつけよーい、残ったっっ！」

行司が叫び、僕らはぶつかり合った。

「っっ……」

ぶつかつた衝撃で頭がくらくらとする。普段ならこんな事は考えられないのだが、酔いが回っている為、あり得ない反応が身体に起こるようだ。

「もらった」

出納係長は突つ張ってくる。酔つて足元がふらつく僕は、押されていく。張り手を食らう度に脳が揺らされ、さらに酔いが増す感じだ。しかし、

「うっ」

強烈な張り手が僕の頬に入り、これで正気に返つた。気が付くと僕は畳の端っこギリギリの位置にいた。見ると出納係長は勝ち誇つて、

「へへっ」

とにやけた面をしているではないか。

「ようし」

我に返つた僕は、突き出そうとする張り手を受けながらも、まわしである帯を掴む事に成功した。そして、押して引いてを繰り返して相手のバランスを崩しに掛かつた。

「うおっ」

「すげえっ」

観客が感嘆の声を漏らすのが耳に入る。これも彼らの予想以上に好取組となつた証だろうか。

「くそっ」

出納係長はもがき、暴れるが、まわしを取つた僕には兎戯にも等しい行為だ。いくら酔っているとはいえ、まわしを掴んだ相手を仕留め損なう事などない。

「うりゃっ」

僕は一度相手の身体を引き付けてから、上手投げを繰り出した。ブリッという、何かが破れるような音が響いた後、出納係長の身体を畳に投げ飛ばしていた。

「やるっ」

「やっぱ千代だ」

拍手や歓声が飛び交う。しかし、数秒後には女性陣の「キヤ〜ッ」

という悲鳴がそれを掻き消した。何事かと思い、観客と同じように視線を合わせると、何と出納係長のまわしは取れ、パンツが破れて下半身が完全に露出してしまっていたのだ。僕の握力は90以上ある。投げを繰り出した際、そのパワーでパンツごと引き裂いてしまったようだ。

「す、すみません」

と僕があまり気持ちも籠もらぬ謝罪をすると、観客にはそれがおかしかったのか、すぐに悲鳴は笑い声に変わった。出納係長はバツが悪そうに両手で下半身を押さえ、走り去って行った。

「潮田、強え〜っ」

出納係長が去ると、観衆から改めてそんな声が出て、拍手が僕を包んだ。コンパニオンまでもが、賞賛の声や拍手を送ってくれていた。

「ど、どうも」

土俵となった畳のど真ん中で僕が四方に向かって頭を下げると、もう一度室内は盛り上がった。そしてしばらく何人かにちやほやされたが、数分後には波が静かに引き、皆、各自の楽しむ酒席へ戻って行った。

僕も元いた場所に帰ると、守田さんは別の所へ行ったようで、もういなかった。とりあえずコップに残ったビールを飲んでみると、「さっきは凄かったなあ」

と生河君が近寄って来た。

6話

「大した事ないよ。危なかったし」

「でも素人レベルじゃないよ、あの投げは。感動したよ」

「ありがとう」

「それはそうと上の連中に注ぎに行こうぜ」

と彼が言うので、二人共ビール瓶を持って課長の下へ向かった。

「課長、お疲れ様です」

生河君が声を掛け、お辞儀する。僕も取って付けたようにそれに続いた。

「やあ、新人君達。潮田君だったか？さっきは豪快な一番だったね」
盛永さん等、A町支店の面々とは違い、痩せてすらつとした体格の課長は、力士だったらそれ程強そうには見えないが、とても五十代とは思えない容姿と快活さを持っていた。

「あ、ありがとうございます」

「どうだね経理課は？」

「非常に勉強になっています。毎日が凄く充実した感じです」

生河君はまた優等生な受け答えをする。

「僕もです……」

それに引き替え、僕は言葉が出て来なくて、自分を情けなく感じる。

「まあ課長、一杯どうぞ」

僕達は課長の脇に座り、順にビールを注いだ。

「おう、ありがとう」

課長は僕達の注いだビールをグイグイと飲み干す。

「君達、仕事も大事だけど、若い内はちゃんと遊ばないといかんぞ」

「はい」「はい」

僕は突然変な事を言われて戸惑ったが、生河君と同時に返事をした。

「彼女は？君等くらいの年なら一人や二人いるだろう？」

「私は結婚してますので……」

生河君はそう答えた。

「そうか。それは何よりだ。君は？」

「いません……」

「ふん。それはいかなあ。相撲もいいが、君等くらいの時は、彼女の一人や二人は普通にいなきゃ」

と言う課長は、確かに日焼けした顔にダンディな雰囲気を漂わせていて、浴衣からチラリと見える胸板も、男らしさの象徴のように思えた。

「いや、ごめん。入ったばかりの新人君にこんな事を言うんじゃないかった。まあ仕事の方も頑張ってくれたまえ」

「はい」「はい」

僕達はまた同時に返事をする、礼をして、課長の前から去った。ある程度上の連中に注ぎ終わり、役目を果たしたと判断してから、生河君と二人で会話をした。僕の部屋の奇人の様子を話したら、本店は皆まともで、やりやすい環境であると言うので、少し羨ましくなった。しばらくお互いに状況報告をしていたが、突然、

「潮田く〜ん、ちつとこつち来いや」

と背後から声が掛かった。振り向いて声の主を見ると、盛永さんだった。

僕は盛永さんに手招きされ、彼の脇に腰掛けた。隣にいた生河君はそれを見て、自分の上司に注ぎに行ってしまった。

「まあ、飲んで！」

赤ら顔をした盛永さんは日本酒を注いでくる。

「ありがとうございます」

僕は礼を言いながら、傍らにあった空の杯を手に取り、それを受けた。

「さっきの一番、なかなか魅せたな」

「ありがとうございます」

「俺なら負けんがな」

「は、はあ……」

どういいう根拠があるのかはわからないが、僕は心中ムツとした。

「まあ相撲は置いておいて、潮田君よ、一週間働いてみてどうだ？」

「皆さん、優しくして下さるので、凄く働きやすいです」

僕はとりあえず心にもない事を答えておいた。こんな風に上司と差向いで話をするのは昔から苦手だった。

「そりゃ優しいだろう。だからといって甘えちゃいかんぞ」

「そ、そんなつもりは……」

何だか話が説教めいていて、僕は不安を感じてきた。

「いゝや、甘えてる！俺達が厳しく言わないもんだから、あんたは調子に乗ってる」

「甘えてるつもりはありません。僕は……」

「その『僕は』って言い方も良くない！社会人なんだぞ！」

「はい……」

「あんたは俺が暗に注意しているのも気付かなかっただろう？例えば俺の机の前を通る時、『配線があるから気を付けろ』と言ったのを覚えてるか？」

「は、はい」

僕はとりあえず返事をして、記憶を辿った。

そういえばこんな事があった。確か中央の広い通路が立ち話をしている人で塞がれていて、僕は盛永さんの机のすぐ前にある狭い通路を通ろうとしたのだ。その時、盛永さんは

「配線があるから気を付けろよ」

などと言った気がする。僕は

「はい」

と答えて、普通に通ってしまったけれど。

「あれは俺の前を通るな、という意味だ。言葉の意味を理解しても

「ならないと困るんだよ」

「すみませんでした」

とは言いながら、僕は内心腹が立っていた。そんなの意味わかる訳がないだろう。ダメならダメとはつきり言えばいいじゃないか。

「あと、あんた、よく伸びをしているけれど、ああいうのは見苦しいから止めるんだ。大体、いつも眠そうにしているよな？」

「そんな事はないです！」

僕は必死に否定したが、以前に寝てしまったのがバレた気がして、一気に酔いが覚めた。

「あんたくらいの時は、休み時間も仕事の勉強とかするもんだ。眠そうにしている場合じゃないんだよ」

「はい……」

どうやら寝た事までは指摘されないようだが、僕は気が滅入ってきた。何なんだこれは？泊まり掛けで飲み旅行に来て、説教くらうなんて、本当にバカげている。相撲部屋で言うところの『かわいがり』みたいだ。

そんな中、別な意味での『かわいがり』を行っている奴等がいた。説教をされながら、僕はちらと横を見た。すると内藤さんや江崎さんがコンパニオンと親密そうにくつついて、その髪や足にベタベタと触れているではないか。僕がクソジジイの『かわいがり』を受けているというのに、何たる差だ。本当に頭にきた。

だが、盛永さんの説教は休む事無く続いた。

「そうだ。あんたは電話での話し方も悪いな」

「電話ですか？」

僕は思わず聞き返した。確かに僕は喋り慣れしてないので、どもつたりして問題あるかもしれないが、名乗りもしない奴やオカマを差し置いて注意されるのは納得いかない。

「何だ？何か文句でもあるのか？」

盛永さんは立ち合い時の力士の如く、眼光鋭く僕を睨む。

「い、いえ……」

言い返したいのはやまやまだだったが、また面倒な説教をくらいそうなので、僕は自分を抑えた。

「大体、そういう所が生意気なんだよ。自己主張するのは立派だと思うが、上司の言う事は絶対だし、上の人間は立てなきゃならん」「はい」

僕は返事をしながら、何たる旧態依然とした体質かと思った。これはとんでもない職場に入ってしまった。

僕は尊敬出来る人は上だろうと下だろうと敬意を払うし、上の人間を立てないとは言わない。けれど、どちらかと言うと『いくら上司だろうと間違っている奴は間違っている』という主義だ。

しかし、この盛永のジジイは昔の西洋の絶対王政みたいな事を言っている。こんな考えが今時まかり通るのかと思うと、自分達の生きている世界がまるで十八世紀に戻ったかのように感じられて無性に腹立たしい。じゃあ与田さんが「江崎と守田は付き合っている」と言ったからには、守田さん本人が否定しても絶対なのか？（これは飛躍し過ぎかもしれないが、上司にはオカマや遅刻が容認される以上同じ事だ）。

しかし僕は耐えるしかない事もよくわかっていた。さすがに一週間程度で市民革命を起こす訳にはいかない。悔しいが、ここは我慢した。

それから盛永さんはまだグダグダ言い続けたが、見るに見かねたのか、本店の知らない人が助け船に入ってくれた。

「新人にそんなにキツく言わなくても」とか、

「彼もわかっているから」

などと、横から言ってくれて、非常にありがたかった。これで僕への苦言は数%減の内容で耳に入り、少しは楽になった。

そしてようやく一次会は終了した。盛永さんは

「月曜日から気を付けるんだぞ！」

という捨て台詞を残して去って行った。僕は目の前にいる名も知

らぬ本店の方に礼を言い、気を落ち着ける為、トイレへ向かった。

それにしてもひどい目に遭ったものだ。昔の職場で上司に「飲み会は仕事だ」と言われた事があるが、今日のは仕事以上で、ある種の拷問だった。この飲み旅行には楽しみな気分もあったので、こんな目に遭ってシヨックも大きい。守田さんと話した楽しさなど、何処かへ吹き飛ばされてしまった。

7話

傷心気味の僕はトイレへ入り、浴衣の裾を捲り上げて構えると、小便器に照準を定めた。一次会の間、一度もトイレへ行かなかったのも、なかなか排尿が終わらない。しばらく便器に向かっていると、入り口から人が入って来た。

「おう、こんな所にいたのか。二次会行くぞ」

オカマ、いや与田さんだった。

僕はまた歓迎会の時のように、与田さんに肩を組まれ、二次会へ連れて行かれた。相変わらず酒臭いし、オヤジ臭い。

着いたのはカラオケBOXだった。旅館の中にそういう場所が完備されていたのだ。中には経理課全体の半数くらいの人がいた。例のコンパニオン達も何人かは連れて来られているのが見える。そして彼女達を脇に置いている男は皆、べったりとくっついて、逃げられないように押さえ付けているみたいだった。

「潮田君も、相撲だけじゃなく、皆の前で何か歌えよ」

席に陣取るなり、与田さんが言う。僕は先程の説教でそんな気分ではないのだが、『絶対王政』理論に従うと、歌わざるを得ないのだろう。

既にステージ（という程のものではないが）には生河君が上がっていた。彼も新人の余興で、歌えと命じられたようだ。伴奏が大きな音で鳴り、彼が歌い出す。

「ジン、ジン、ジンギスカン」

生河君の選曲はドイツ人が歌う『ジンギスカン』という突拍子もない曲で、バカ受けだった。

これはまた後に続く僕にプレッシャーとなつてのしかかってきた。彼と同期なのはなかなか厳しいものがある。それにしても、ジンギスカンといい、絶対王政といい、スケールの大きな職場だ。

生河君の歌で盛り上がった後、僕は少し緊張しながらステージに

上がった。結局、僕はアリスの『チャンピオン』を歌った。生河君程ではなかったが、ファイティングポーズやシャドーボクシング、相撲の突っ張りを織り交ぜたらそこそこ受けが良く、とりあえずホツとした。また、大声を出したら、苛立ちも少し消えた気がする。歌い終えた僕は席に戻った。

「なかなか良かったぞ」

与田さんも誉めてくれて、一安心した。

僕は与田さんの隣に座ったが、正面には女性が二人いた。一人は同じA町勤務で内藤さんの上司の吉見さん。もう一人はたぶん本店勤務なんだろうが、知らない人だった。

「あの、A町支店の潮田です。よろしくお願いします」

「生河さんと同期なんですよ？私、本店勤務の塚山です。さっきの相撲、感動しました」

年令は僕と同じくらいか、少し下か。外見はそれ程優れた女性ではなかったが、笑顔が目立つ明るい感じの人だった。

「潮田さん、独身でしたよね。塚山さんもそうよね？お互い仲良くするといいですよ」

吉見さんがからかうように言う。この人は、結構おせっかい焼きのようだ。

「お、お、俺も独身だよ。ガッハハハ」

相変わらず与田さんが自虐的に言う。本当に笑えなくて困る。

四人でテーブルを囲んだ会話は、絶対王政にふさわしく、最年長の与田さんが主導権を握って進んだ。

「このテーブルは吉見さん以外は独身という事ですな。ガッハハハ」「いえいえ、私も気持ちは独身ですけど」

「あはは」

吉見さんの切り返し方が面白く、僕と塚山さんは同時に笑った。

「じゃあ全員独身という事で、それにふさわしい会話をしますかな」下品な笑いこそ出ないが、与田さんは嬉しそうだ。デブに相応し

く、夜でも大汗を掻いている。

「早速聞きますけど、皆さん彼氏・彼女はいるんですか？私はステディな人がいますけど」

吉見さんが皆の顔を見回して尋ねてきた。

「いたら独身生活続けてないですな。ガッハハハ」

と与田さんが笑い、

「いま……せん」

と塚山さんも笑みを浮かべて答えた。そして三人の視線は僕に集中した。

「僕は……」

「いないって言ってたよな。ガッハハハ」

答えようとしたところを、与田さんにかっさらわれてしまった。

確かにその通りではあるが、僕にも喋る権利くらいあるだろうと思いい、少し力チンときた。すると、

「えゝっ！彼女、いないんですか？いそうに見えますけど」

と塚山さんが訝しげな顔をして言う。

「嬉しい事を言ってくれますね。俺の何処が彼女いそうに見えるんですか？」

「いえ、何となくですけど。モテそうですし、彼女くらいちゃんといそうに見えたもので」

「いやゝ、嬉しいなあ。そんな事を言われたのは初めてですよ。まあ結局いないんですけどね」

僕は本当にちよつと嬉しかった。外見に自信がある訳じゃないし、冗談でも「モテそう」なんて言われた事はない。僕はお世辞でもこんな事を言ってくれる塚山さんに、好感を抱いた。

「俺はどうかな？モテそうに見える？」

そこへまた与田さんが口を挟む。

「え、ええ。独身でいらつしやるのが信じられません……」

塚山さんが困惑した様子で答える。楽しみたいだけで悪気はないんだろうが、本当に困った封建社会だ、これは。

それから吉見さんが

「どんなタイプの異性が好みか？」

とまた質問してきて、与田さんは、

「俺の事を好きになってくれれば誰でもウェルカム。ガッハハハ」

塚山さんは、

「明るくて優しい人」

僕は、

「ちゃんと俺に付き合ってくれる感じの良い女性」

などと答えた。

しばらく異性についての話が続いた後、吉見さんが僕に聞いてきた。

「潮田さん、一次会の最後の方で盛永さんに捕まってたでしょ？何か言われたんですか？」

「あらゝ、見られてましたか？恥ずかしいなあ。ちよつと心構えを指導してもらってたというか……」

「盛永さんは厳しいだろうが、言ってる事は正しい筈だ。ちゃんと言われた事は守った方がいいぞ」

与田さんが真顔で言う。やはりこの人も絶対王政の擁護派のようだ。

「そんなに厳しい事を言われたんですか？」

塚山さんが尋ねてくる。

「ええ、まあ。自分の未熟さを悟らされたようで、結構ショックでしたね」

「まあまあ潮田さん、そんなに落ち込まない！」

吉見さんはそう言うと、ビールを注ぎ足してくれた。

「あれで盛永さんは酔うと面白いところがあるんですよ」

「豪快な人だからな。ガッハハハ」

「私なんて『下の毛をくれないか』って言われた事ありますよ」

「えゝっ！吉見さんの！」

僕と塚山さんは驚いて、吉見さんの顔を見た。

「なんか幸運のお守りだとか言つて。酔つてたんで、聞き流したけど、意外と本気だったかもね」

吉見さんはあっけらかんとした顔で言う。この人は気にしないんだろつが（それをわかつていて盛永は言つたのかもしれないが）、相手によつてはセクハラじゃないか。盛永め、とんでもないエロジジイだ。

「まだまだありますよ」。塚山さんもいるし、あまりこんな話はない方がいいのかなあ」

吉見さんはニヤついて、塚山さんの顔を見る。

「いえ、大丈夫です」

と応える塚山さんの表情も心なしに笑みが浮かんでおり、女のスケベな本性見たりという気がした。

「あのね、盛永一族は皆アレの大きさが凄いらしいんだけど、中でも盛永さんは別格らしいのよ」

吉見さんが平然と話すのを聞いて、僕はビールを吹き出しそうになった。横目で塚山さんを見ると、彼女も興味津々の様子だ。

「さらに凄いのは、一晚の回数記録よ！何回くらいだと思つ？」

「お、俺ですか？」

三人が僕を見ている。何故、僕が盛永さんの一晚の回数記録を回答しなくちゃならないのか。確かに笑える話ではあるのだが、僕は吉見さんに圧倒されて笑みも出ない。

「七回くらい……ですかね？」

僕は適当に見当をつけて答えた。確か僕の最高が五回だったので、回数記録という以上、それよりは多いと見て、無難な数字を弾き出した。

「やっぱりそのくらいを考えるわよね。女から考えてもちよつと疲れそうだし」

吉見さんがまた過激な事を言う。考えたくはないが、妄想力豊かな僕は吉見さんのそんな場面を想像してしまった。でもあまり興奮はしなかった。

「一体、何回……なんですか？」

塚山さんが聞く。この人も相当な好き者だ。

「驚かないでよ」

と言つて間を置く吉見さんを皆が見つめる。

「二十三回！本当だったら人間じゃないわよね」

「ぶほっ……」

思わず与田さんがビールを吹き出した。

「嘘ですよ、それ……。ごほっ」

僕もあまりに強烈な話を聞いた衝撃で、食べていたつまみが気管に入つてむせた。

「まあ本人談だからね。知る人は、当人と相手の女性しかない訳だし。でも自慢げに話してたわよ」

「ありえないですよ。それ……」

僕が五回した時ですら精も根も尽き果てたような感じだったのに、二十三回もしたらミイラにでもなってしまうのではないかと思う。はたして相手の女性も大丈夫なものか。常識では考えられない絶倫王で、まるで横綱級のAV男優だ。確かに絶対王政を敷くだけの事はある。五回程度の僕の実力では幕下程度で、王に口答えも出来ないだろう。

冗談はさておき、本人がそう語つたのは紛れもない事実のようで、さも誇らしげに言い触らしていたそうだ。吉見さんを除く三人は皆一様に張り手をモロにくらったような衝撃を受け、しばらく口を開く事が出来なかった。

後日談だが、この話を聞いた生河君は

「確かに凄い回数だが、俺は一回で必ず女性を満足させるから問題ない」

と強気に語つた。何処からその自信が来るのだろうか。僕なんていつも女性の反応を気にして、ビクビクしているというのに。やはり彼もただ者ではない。

皆が衝撃から覚めやらぬ内に、二次会は終わってしまった。与田

さんが汗をダラダラ流しながら虚勢を張るように

「ガッハハハ」

と笑っていたが、心なしか元気がないように見えた。僕はこれを見て、（この人、ひよっとしたら幕下（童貞）なんじゃないか）と思った。塚山さんは苦笑いなのか、本当に楽しいのか、笑みを浮かべていた。僕は彼女に少し好感を抱き、また話してみたいと思った。それから僕は三人におやすみの挨拶をすると、その場を辞して、自分に割り当てられた部屋へと向かった。

8話

扉を開けて、部屋に足を踏み入れて、愕然とした。絶倫王・盛永が大の字になって部屋のだ真ん中に寝ているではないか。

「うわっ！」

僕は思わず悲鳴を上げて、部屋から逃げた。確か盛永さんは同室じゃなかった筈だ。おそらく酔っ払って、空いている部屋で寝てしまったのだろう。僕はとてもじゃないが、ここでは寝る気がないので、他の部屋を当たる事にした。

最初に見た二つの部屋は、酔っ払いが大きなイビキを響かせていて、入るに入れなかったが、三つ目に開けた部屋は、偶然にも誰もいなくて静まり返っていた。これ幸いとばかりに僕は入室した。

しかしよく考えてみると、自分の部屋ではないのに、綺麗に敷かれた布団の上で眠るのは失礼な気もする。そこで僕は押し入れを開けてみた。案の定、余った布団が残って詰められていた。僕はこの押し入れで寝る事に決めた。昔、部活の合宿等で、ドラえもん軍団などと称して、押し入れで寝た経験もあり、こんな事には慣れている。しかも意外と防音効果もあり、寝心地は良い。

そんな訳で、僕は無人部屋の押し入れに入り込んで、眠りに就いた。酔いもいい具合に回って、気持ち良く眠れそうだった。盛永さんの説教でかなり気分が落ち込んだが、守田さんや塚山さんみたいな女性が職場にいる事を考えると、多少相殺される気がした。このまま目をつむると、あっという間に夢の世界へ行けそうだ……

どのくらいの時間が経ったのだろう。夢か現実か、意識朦朧としている僕の耳に声が聞こえてきた。

「なあ、いいだろう？」

「いやだあ、こんな所で？」

「誰もいないし、鍵は締めたよ」

夢ではない。明らかに男女の声だ。この二人は僕が押し入れの中にいる事に全く気付いていない。

「あつ！いやつ……」

女の色っぽい声が響いた。僕は興奮して、そのままでいられなくなってきた。薄く押し入れの戸を開けて、部屋の様子を覗き見た。最小限の薄赤い電灯が、絡み合う男女の姿を照らしている。目を凝らしてよく見ると、男は一次会で酒を注ぎに行った本店の課長だった。課内の旅行で、とんでもない事をする人だ。

そして僕は愛撫されている女の顔を見ようと、こちらの方を向くタイミングを待った。

「気持ちいい……」

と言つて首を振った女の顔を見て、僕は驚いた。二次会で一緒にいた塚山さんだった。

僕はほんの数時間前に会話していた女性が、目の前で痴態を繰り広げている様を見て、衝撃を受けていた。説教よりも、二十三回よりも、この目の前の出来事が一番ショッキングであった。それだけでなく塚山さんの事を「結構いいな」などと思った矢先だ。そんな思いも何処かへ吹っ飛んで行つてしまい、綱取り目前で挫折したかのような気分だ。

それにしても、女はやはり恐ろしい。二次会では平然と「彼氏いません」などと言つていた人間が、五十代の男と裏で密会をしているのだから、信用出来たものじゃない。どう考えても、男より女の方が、演技力は高いと思う。

塚山さんの艶めかしい喘ぎ声が響き、肌が露わになっていく。僕も男だ、この光景を見るのを止める事は出来なかった。若い子が五十代の餌食になっており、腹が立つのだが、それでもいけないものを見ている興奮の方が優先されてしまう。

唯一、目を逸らしたのは課長が全てを脱ぎ去り、彼女に奉仕させようとした場面だ。この時ばかりは、僕も見ることがなくて、何かを吸うような音だけが、しきりに耳に響いた。凄く耳障りだったが、

何故か僕までときどきしてきて、鼓動が胸の中で沸点を越えるように激しく高鳴ってきた。そして悔しいけれど、下半身も反応していた。

「そろそろ……いいかな？」

と課長が甘い声で囁くのが聞こえる。僕もそれを耳にして、（そろそろいいかな）と思って覗き見を再開してしまった。

襖を通した目の前で、二つの身体がぐねりうねり合っていた。僕は悔しくなってきたが、それを凝視し続けた。何故、僕が押し入れで、こいつらは楽しく気持ちの良い思いをしているのか。不公平に思えてくるが、男女の恋愛に公平などないのも事実だ。モテる奴は際限なくモテるし、モテない奴は本当にモテない。恋愛はまさに弱肉強食で、強い奴が勝つのだ。悔しいが、僕はたくさんそれを味わってきた。この課長は五十代にして、勝者なのだ（少なくとも塚山さんを巡っては僕に勝っている）。さすがに僕と生河君に「若い内はちゃんと遊ばないといかん」とか、「君等くらいの時は、彼女の一人や二人は普通にいなきゃ」などと言うだけの事はある。この人は五十を超えてもそれを有言実行しているではないか。

布団では五十代の経験に裏打ちされたテクニクが、塚山さんを狂喜させていた。これには本気で敗北感を覚えた。僕にはこれ程女性を満足させる自信はない。さすが課長、技能賞ものだ。盛永さんといい、偉さとエロさは比例しているのではないかと、実感させられた。

それと眼前の塚山さんのエロい姿には、えもいわれぬ興奮を覚えた。知っている人間が目の前で裸になり、男に抱かれている場面など、なかなか見られるものではない。僕は背徳の気分ですべてを目に焼き付けておこうという思いになっていた。

そしてねつとりとした五十代の愛撫は続いたが、やがて二人は一緒に絶頂を迎えたようだった。塚山さんは大きな声を上げると共に、身体がびくびくと震え、課長の身体にもたれかかった。それがとても美しく見えたのが、また悔しかった。

彼らはそのまま全裸で抱き合って寝てしまったが、僕は興奮して目が冴えて、この後一睡も出来なかった。まさに凄い一番を眼前で見せつけられた心境だ。

9 話

薄く開けている襖の隙間から、光が差し込んでくる。僕はもう寝るのを諦めた。全裸の二人が寝息を立てているのを確認すると、静かに押し入れの戸を開けて、この異空間を脱出した。

一つ心配なのは、僕がこの部屋の鍵を持っていない事だ。従って、今、ここを逃げ去れば、誰かが入り込んで二人の秘密を知ってしまったかもしれない。とはいえ、僕にとって不利益になる事は何一つないし、まさか押し入れに留まる訳にもいかないので、ここは出て行くしかないのだった。

部屋を出て、廊下の壁に掛かった時計を見ると、五時を過ぎていた。確かこの温泉は二十四時間入浴可能の筈だったので、欲情の觀賞に疲れた僕は浴場を目指した。

当たり前だが、早朝の温泉には誰もいなかった。僕は簡単に身体を洗うと、ゆっくりと湯槽に浸かった。

すると頭に浮かぶのは、やはり先程の光景だった。生で他人の行為を見るのは、ビデオを見るのとは全然違った。気持ち悪いくらいの生々しさと、人の秘密を盗み見しているというわくわくするような気分は、なかなか味わえるものではないだろう。考えただけでもお湯の熱さと同じくらい、身体が高揚してくる。僕は湯の中で下半身を太く雄々しくさせてしまっており、今、この場に誰もいなくて良かったと心底思う。結局、僕は三十分以上、大浴場を独占した。

風呂から上がった後、すっきりした僕は浴場から出た。すると、不意に「おはようございます!」

と声が掛かった。僕はその相手を見て、心臓が止まるかと思った。塚山さんだった。

「お……はようございます」

あれを見た後だったので、僕は動揺していた。しかも突然会ってしまい、何と言って良いのかもわからない。もちろん、彼女はそん

な僕の内心など、知る由もないだろう。

「よく眠れました？」

「あ、いや、今一つ寝付けなくて……」

本当はお前達のせいだと言ってやりたいくらいだったが、僕もある意味楽しませてもらった事だし、到底そんな言葉は口に出せない。実際、塚山さんを目の前にしながら、僕の脳裏には彼女の痴態が浮かんでいた。

「昨日は楽しかったです。また今度、一緒に飲んで下さいね」

彼女は昨晚のような色っぽい表情ではなく、明るくにこやかな顔で言う。この感じからすると、他人に発見されるような事はなかったのだろう。

「ええ、是非ともお願いします」

と僕は応えたものの、課長の顔が頭に浮かび、乗り気はしなかった。

塚山さんは、そのまま女湯へ歩いて行った。僕は元々の部屋へ戻ろうと、長い廊下を歩いた。

「おう、おはよう」

「あ、おはようございます。昨日はありがとうございました」

途中で与田さんとすれ違い、僕は頭を下げて、通り過ぎた。彼も朝から汗を掻いている様子からして、風呂へ行くようだ。独身の割には朝が早い人だと思う。意外と育ちの良い人なのかもしれない。

僕は部屋を経由した後、一人で朝食バイキングへ行き、さっぱりとした果物をたくさん食べた。さすがに今朝はこれ以上何も起きず、僕は帰りのバスの中で熟睡した。こうして波乱の温泉旅行は終了したのだった。

10話

温泉旅行から帰った僕は、疲れてしまったのか、土日ともほとんど寝て過ごした。寝ては起きての繰り返しで、あの晩の説教や不倫の夢を何度も見ては、汗びっしょりで目覚める始末だ。サザエさん症候群などと言うらしいが、日曜日の夕方になると、凄く憂鬱になつてきて、明日出社したくない気分になった。特に盛永のエロジジイに会うかと思うと、気が滅入りそうになる。

とはいえ、待たなして月曜日はやつてきた。まさか有給休暇を使つてさぼる訳にもいかず、僕は足取りも重く摺り足気味に出社した。

今日も先週と同じペースで人が集まつてきた。来るなり、皆、一様に温泉旅行の話題を交わしていた。僕は極力、盛永さんと目を合わせないようにして、与田さんか内藤さんと会話した。毎度の如く、曲瀬係長が九時前に来たところで、皆、黙々と業務を開始した。

僕はとりあえず盛永王に言われたとおり、自分を「僕」と言わず、「私」と称するように気を付けた。不意に電話が来た時などは「僕は……いえ、私は……」みたいになつてしまう事もあったが、最初はこんなものだろうと思ひ、あまり気にしないでおいた。午前中は仕事がたまっていて、そこそこ忙しかった。

昼休み、内藤さんと飯を食べに行き、彼が旅行中コンパニオンと電話番号を交換したなどという話を聞いた。僕が説教をされていた時の事で、少々うらやましかった。代わりに僕も、例の盛永王の説教話やエロ話をぶちまけて、多少はすっきりした。

そして昼間の業務が始まった。

「おい、潮田君、ちよつといいかな」

不意に盛永さんが僕を呼んだ。

「は、はい……」

僕は緊張して、身を強張らせた。

「実はね、これをあんたに任せようと思うんだが」

と言って奴が見せてきたのは、某省庁からの補助金業務の処理マニュアルだった。

「ウチの会社も国から大金をもらっているんでな。その処理をあんたに任せる。そのマニュアルをよく読むんだぞ」

「はい」

何をどうすれば良いのか、さっぱりわからないが、僕はマニュアルを預けられ、席へ戻った。先日の説教の続きでもされるかと怯えていただけに、まずは一安心した。例の工口話の件もあり、長く奴の顔を見ていたら思い出し笑いをして吹き出し兼ねなかったので、そういう意味でも助かった。

席に戻って、貰ったマニュアルと、関連する支払い伝票を眺め始めたが、全く意味がわからなかった。何より説明書である筈のマニュアルが、盛永王の話並みにわかりづらい内容だった。説明書の説明書が欲しくなるナンセンスな状況に、僕はまた眠くなってきた。

「おっと、いかん」

僕は慌てて自分の頬を叩き、眠気を覚まそうとした。このままでは寝てしまいそうなので、この業務に手を付けるのを止めて、他の業務に移った。結局、この日再び手を付ける事はなかった。

盛永さんから貰った仕事もそのままに、水曜日を迎えた。昨日も手をつける気になれず、結局放っておいてしまったのだった。

本来ならば、盛永王にやり方を尋ねれば良いのだろうが、「どうせちゃんとマニュアルを読んでないんだろう」などと言われるのは悔しいので、意地でも自力でやるつもりでいた。

で、今日こそは何とかなしようと、マニュアルと格闘を始めたのだが、やっぱり頭に入っていない。おまけに部屋の空気が生暖かくよどんでいるせいか、眠気が増す一方だ。これはマズいと思い、

「すみませうん。ちょっと暑いので、窓を開けていいですか？」

と聞くと、大なり小なり皆頷いた。僕は曲瀬係長の後ろにある窓

を開ける為、立ち上がった動いた。

曲瀬の背後を通りかかり、僕は啞然とした。彼のパソコンのディスプレイには、仕事の画面は写っておらず、女の裸が踊っていた。曲瀬はいかにも仕事をやっている振りをしながら、インターネットでヌード鑑賞して鼻の下を延ばしていたのだ。

（この野郎！）僕は内心後ろからはたきつけてやりたいくらい頭にきたが、この場で皆に知らせる訳にもいかず、窓を開けて、席に戻るしかなかった。

結局、腹が立つし、頭はさっぱり働かず、今日も例の仕事はほとんど手をつけられなかった。

そしてこの日の夕方、僕は再び窓を閉めに動いた。その時、曲瀬はインターネットで将棋をしていた。この様子だと、まともに仕事をしている時間は何分もないのかもしれない。皆はこの事実を知っているのだろうか？この日、僕は内藤さんを誘って一緒に帰り、彼に尋ねてみた。

「知ってたつすよ。あのバカどうしようもないつすから」

彼の返答を聞き、僕は驚いた。

「そんな。あんなの見て、頭に来ないの？」

「腹は立つけど、どうしようもないつすからね」

「内藤さん、それでいいんですか？俺だったら盛永さんにでも言い付けてやりたいところだけど」

「それはどうだろう？潮田さん、この前の旅行で盛永さんに『上司の言う事は絶対だ』みたいに言われたんすよね？たぶん、その場で曲瀬も少しは怒られるかもしれないけど、下手すると訴えた俺達の方が『上司の面子を潰すな』なんて言われて説教されるつすよ」

「それはないでしょ！」

とは憤ったものの、確かに彼の言うとおりのような気がした。盛永王の話し振りを考えると、訴えた方が不利益を被る可能性は高いかもしれない。

「大体、盛永さんだって、仕事中にトランプゲームとかしてるつす

よ」

「何っ！そんなんですか？あんにやろう！」

僕は激怒した。人に偉そうに説教しながら、自分は仕事さぼってゲームをしてるなんて、許しがたい。

「前なんか、自分の年賀状を印刷してたっすよ。あの時はさすがに俺も吉見さんも頭にきたなあ」

「うゝ、腹立つなあ。ウチの職場のモラルってそんなもんなんですか？」

「だから前に言ったじゃないっすか。ウチの部屋の人間関係はドロドロしてるって。今の話は人間関係とは違うけど、段々ひどさが見えてきたっしょ？」

「確かに……」

この後、僕らは上の連中の文句を言いまくって帰った。曲瀬はともかく、偉そうに威張っている盛永王まで、仕事をさぼっている話は衝撃的だった。僕は家に帰っても腹の虫が収まらず、柱に鉄砲して怒りを紛らした。

11話

翌日、始業時間になるなり、盛永王から声が掛かった。

「潮田君、例の件、どうなってるんだ？」

「あ、いや、その……」

僕は突然の呼び出しに、まごついた。

「まあいいからこっちへ来い」

「は、はい」

王の命令は絶対だ。僕は観念して、マニュアルと伝票を携え、御前に立った。

「どうなんだ？全然伝票が回ってこないが、ちゃんと進んでいるのかね？」

「はあ、その……」

僕は正直に答えるかどうか迷った。とはいえ、嘘を吐いてもすぐにバレそうだった。

「何だ。はっきり言わないか！」

盛永の顔が赤く染まってきた。煮え切らない態度の僕に苛ついてるのは明白だ。

「あの、マニュアルを読みました、処理の仕方がよくわかりませんでした」

僕は正直に答えた。

「何いつ？そんな筈があるか。何の為のマニュアルだ。ちゃんと隅まで読んだのか？」

「いや、隅までは……」

「そうだろう。ちゃんと読まずに、わかりませんなんて言うんじゃない！」

「ちよつと待って下さい。確かに隅までは読んでませんが、伝票処理に関する部分は全部読みました！」

僕は頭にきて言い返した。

「どれ、見せてみる」

と盛永が言うので、僕はマニュアルを渡した。奴はマニュアルをめくり始め、そして伝票処理に関するページを開いた。

「ここに書いてあるじゃないか。この通りにやればいいだろう」

「この通りがわからないから、処理できないんです。だったらどの通りにやればいいのか教えて下さい！」

僕は、ロクに教えもせずに頭ごなしにやれと命ずる王の傍若無人振りに、怒りが収まらなくなってきた。

「おい、潮田君、ちよつと落ち着け」

ついには与田さんが止めに入ったが、

「いいえ。これだけは言わせて下さい！」

と僕はそれを退け、言葉を続けた。

「僕が……いや私が頭が悪いからかも知れませんが、そもそも何をすればいいのか、よくわからないんですよ！わかるように説明して下さい」

「何だ、そういう事を言うんだな。だったらいい、その仕事は返せ」

「そんな……。やらないなんて言っていないじゃないですか！」

「口答えはするし、やらないって言ってるのと同じだ。もうこの仕事はやらないでいい」

「うっ、違います」

僕は泣きたい気分になってきた。こんなにも自分の気持ちが通じないのは、告白したのに僕を振る女並みだ。しかも部屋の皆の前でこんな姿を晒し、恥ずかしくてたまらない。

「ほら、寄越すんだ！」

王は再度の返却を求めてくるが、

「す、すみませんでした……。この仕事は私にやらせて下さい」

僕は謝った。こんな屈辱的な思いをしたのは生まれて初めてだった。さすがにこの業務を取り上げられるのは、仕事をする能力がないと見なされるようで、ちっぴけではあるが僕のプライドが許さない。

「やるんか？でもあんた、そのマニュアル読んでもわからないんだろ？どうするんだ？」

「どうする……と言われまして……」

謝ったものの、僕の腸は再度煮えくり返りそうだった。結局、このジジイは何の指針も示さず無策のまま「どうするんだ？」の一点張りなのだ。しかし、ここで言い返しては元の木阿弥だ。

「では、僕も……、いや私もわからない所を具体的に整理します。

それを一緒に検討してもらえないでしょうか？」

「むう。そうだな。それなら……。おい、順ちゃん（与田さんの愛称）、手伝ってやってくれるか？」

ようやく盛永王は納得したようだった。しかし後始末は、与田さんに任せるつもりらしい。

「いいですよ」

と答えた与田さんの表情は、心なしか少し険しく見えた。

「それじゃ順ちゃんも協力してくれると言ったから、しっかりやるんだぞ」

「はい」

僕はようやく席に戻れた。この不毛な議論にはかなりの精神力を消耗した。これじゃまるで新弟子イジメだ。人がいなければ、感情が昂ぶって泣いてしまいそうだった。僕はトイレに駆け込み、一呼吸おいて、自分を落ち着かせた。しばらく動悸が止まらず、臭いトイレで何度も深呼吸をするハメに陥ってしまった。

席に戻った僕は、手元に返った業務のわからない点を整理し始めた。昼前にはある程度、疑問点を整理する事が出来た。与田さんに聞くのは、昼休み明けにしようと決め、僕は内藤さんと食堂へ向かった。

「いやあ潮田さん、凄かったつすね」

飯を頬張りながら、内藤さんが言う。

「そんな風に言わないで下さいよ。皆が見ているかと思うと、凄く恥ずかしかったですよ」

「激しい抵抗振りだったじゃないっすか。共感したっすよ」

「そう言ってくれるのは内藤さんだけです。今日ので相当部屋の人の評判を落としただろうなあ。盛永さんには今後さらに睨まれるんだろうし」

「確かに潮田さん、目を付けられてるっすね。見ててかわいそうになりましたもん」

「やっぱりそうかな？俺だけ特別な感じはしますよ。内藤さんは盛永さんに気に入られているみたいですよ」

「そうなのだ、付き合いの長さもあるのだろうが、盛永王は内藤さんには妙に甘い気がする。」

「いつだったか伝票処理においても、僕のはじっくり見るくせに、内藤さんの処理した伝票は「内藤君なら大丈夫だろう。俺の印鑑押しておいていいぞ」なんて言っつて、見もせずに済ませた事があった。」

「まあ、付き合い長いっすからね。それだけの事っすよ。さあ、行きましょう」

内藤さんはそう言うつと、食べ終わった膳を下げる為立ち上がった。僕もそれに続き、食器を片付けると、共に食堂を出た。

一時になり昼の業務が始まると、僕は早速、午前中に整理した業務の疑問点を与田さんに尋ねた。与田さんは何も言わずに、書類を見る。しばらく沈黙が続き、彼は書類と例のマニュアルを静かに眺めていた。

「おい！」

突然、与田さんが声を荒げた。

「は、はい……」

僕はいつもの彼の調子と違うので、驚いた。

「こんな疑問点の書き方じゃ、こっちもなんだかわからないんだよ！」

与田さんは明らかに怒気を含んだ声で言うつと、僕に書類を投げ返してきた。机の上の書類がぶつかって飛び散り、床に落ちた。

与田さんの豹変に、僕はただ茫然とするしかなかった。自虐才力

マではあるものの、人は良いと思っていた彼の激変振りには驚くばかりだ。明らかに今までの接し方と違う。書類を投げ付けるなど、言語道断だ。これを誰も注意しないのもおかしい職場で、親方の管理不行き届きだ。僕は散らばって落ちた書類を拾い集めて、再度尋ねた。

「まとめて箇条書きにしたつもりですが、何処がわからないんですか？」

「そんなもん、自分で考えろ！」

「なっ……」

僕はカツとして、また言い返そうとしたが、与田さんの迫力ある表情に気後れして、言葉が出てこなかった。確かに図体もデカいし、巨漢力士のような威圧感がある。それに僕は既に盛永王と激しい戦いを繰り広げており、これ以上のバトルを行う気力は湧いてこなかった。

仕方なく僕は再度疑問点を整理し直した。頭に來たので、小学生でもわかるような平易な文章で書いて、マニュアルにも全て関連するページに付箋を付けた。こんな事をしている方が、無駄な仕事だと気付かないのだろうか。やっぱりこいつらは十八世紀の遺物だ。

僕は一時間程で書類を作成し、再度与田に見せた。表面上はともかく、内心ではもう『さん』付けする気も起きなかった。

「ふん！」

と大きな鼻息を吹くと、奴は疑問点の解消法を説明し出した。言葉遣いは相変わらず乱暴で、聞いていて腹立たしかったが、的確に説明してくるので、そこだけは感心せざるを得なかった。

「このくらいは自分で考えてやってもらいたいもんだな！」

奴は最後に捨て台詞を吐いて、またマニュアルを投げて超越した。僕は悔しさで一杯だったが、ここは耐えた。それにしても、この豹変振りは何なんだろう。あまりに急で、僕は戸惑う他なかった。

改めて考えてみると、あれだろう。僕が盛永王に腹が立って言い返し始めた時、与田は一度止めに入った。だが、僕はそれをも無

視して、盛永に突っ掛かっていった。ひょっとして、それが気に食わなかったのだろうか。原因はわからないけれど、思いつくのはそれくらいだった。

こんな状況下に置かれ、僕は気が滅入ってきた。全く口くなし上司がいない職場だ。まだいいのは係長の南川さんだが、この人も結構荒々しく、たまに苛つくと

「潮田、こんなにやろう!」

などとキツイ言い方をする。ただ、

「よく頑張ったな」

「ご苦労様」

とやった事をちゃんと評価してくれるので救いはあった。それでも与田のオカマや横暴は野放しだし、係長としてはどうかと思う。少なくとも僕の心を救済出来るような存在ではなかった。

この日から僕の地獄、そして戦いが始まったのだ。

12話

翌日も与田の態度は変わらなかった。相変わらずオカマ電話はしているものの、僕に接する時だけは無法者に変身した。

「こんな書類は回せないなあ！」

「全然ダメだ、こんなもん！」

などと暴言を吐き、僕の作成した書類や回覧物を投げて寄越すのだ。

他の上司達はそれに無関心を装う。彼ら旧世代は、「俺達も昔こんな目には遭ってきた。だからお前も我慢してそういう経験をしろ」みたいな意識なのかもしれない。どうしようもない兄弟子達だ。

そして与田だけではなく、盛永王も隙を見ては僕のアラを探し、指摘してきた。

「何だ、その電話の出方は！」

「一応って言葉を使うな」

「休み時間に勉強はしてるのか？」

などと言ってきては、僕の神経を逆撫でした。図体に似合わず、チクチクと言ってくるので、聞いている方は苛立ちが募ってくる。その癖、内藤さんを優遇するので、更に腹が立った。

僕は段々、精神的にまいってきた。毎朝、出勤する気が失せてきて、時には胃が痛くなったり、心臓の辺りが重々しく感じられる事もあった。『嫌な上司とうまく付き合うテクニク』などというマニュアル本を読み耽ったりもしたが、良い解決策は見えてこない。こんな時、彼女の一人でもいれば、慰めてもらえるのかもしれないが、そんな宛もなく、今しばらくは苦しみに耐える他なさそうだった。

確かに与田に反抗する手もある。だが現実問題、絶対王政が敷かれているこの部屋では、もし奴に立ち向かえば、同時に盛永王とも戦わねばならないであろう。先日、不毛な争いを経験しているだけ

に、さすがに二大勢力を相手に戦う気力はなかった。

また実際、僕のやっている仕事は与田に尋ねなくてはならないのが痛かった。他の人間は、与田程、僕の業務を把握しておらず、どうしても奴に聞かざるを得ないのであった。

ならばどうするか。一番良いのは、奴に聞かなくても良いくらい、僕が勉強して仕事を覚える事だろう。奴の力を借りなくても済むようになれば、関わる率も減るので、苦難も減るという寸法だ。自分で業務知識の鎧を纏う事で、与田の攻撃を防げるかもしれない。

だが、僕はそこまで一生懸命仕事をする気はしなかった。そもそも今の業務自体、僕のやりたい仕事ではないのだ。それを与田の助けを借りなくても良いくらい、自力で学ぶのは無理がある。やってみたところで、おそらく途中で頓挫してしまうだろう。

だったら目先を変えて彼女でも作る事に一生懸命取り組む方が、よっぽど楽しいし、やり甲斐もあるのではないか。現実逃避ではないが、仕事は仕事だと割り切り、プライベートを充実させる方が近道のような気もした。何より、心も身体も充足させてくれる相手がいればどんなにいいだろう。僕は段々、自分の中でそんな気持ちが強くなっていくのを感じていた。

そんな中、課内の若手で飲もうという誘いがあった。毎日、嫌な思いをして気が滅入っていた僕は、快諾した。実際、急に合コンの誘いが増えるでもなく、特に楽しい事の宛がなかった僕には、久しぶりに待ち遠しい出来事だった。

13話

二週間近く書類を投げられながら働き、疲れ果てた金曜日、駅前で若手の飲み会が開催された。僕は内藤さんと共に職場から会場へ向かった。

店の中に入った時、本店の連中は勢揃いしていた。何人か知らない人間もいたが、生河君、江崎さん、守田さん、塚山さんなど、見知った顔がほとんどだった。座敷になっており、僕は内藤さんと隣に腰掛け、正面には生河君、塚山さんが座っていた。ちなみに江崎さんは守田さんの隣に座しているのが遠目に見えた。

僕は塚山さんが正面にいて、少し緊張した。自分が飲んで変な事を口走らないか、心配にもなった。

「最近はどうよ？」

乾杯が済むと、生河君が聞いてきた。

「どうもこうも、ひどいもんだよ」

僕はこの時とばかりに日頃の鬱憤を吐き出した。塚山さんがいる手前、恥ずかしくもあったが、どうせ彼女とは縁もないだろうし、気にせず吐露した。

「ひどいんですね。与田さんって。この前の旅行で面白い人かと思っただけ、そんな方だったんですね」

心配の必要もなく、塚山さんは僕の話に同調してくれた。こんなにも感じの良い女性が、実は課長の女なのだ。何だか悔しくなってきた。

「あいつはひどいよ。潮田さん、本当にかわいそうだもん」

内藤さんが言う。

「聞いていると、盛永さんも嫌な感じだな。申し訳ないが、俺、本店で良かったよ」

「生河君ならウチの部屋でも大丈夫じゃないか？俺、適応能力ないからさ、生意気だって睨まれるんだよ。たぶん、そっちは盛永にも

気に入られるさ」

「いや、話を聞いていると、自信ないな。俺も年功序列を強調されるのは大嫌いだからね」

「でも内藤さんは気に入られてるよね？」

僕が聞くと、

「そんな事ないっすよ」

と彼は迷惑そうな顔をした。

「でも私、見ましたよ。内藤さんと盛永さん、一緒に電車で帰っていますよね」

突然、塚山さんが言い出した。

「えっ！本当ですか？」

僕は驚いて尋ねた。

「ま、まあ……」

内藤さんは照れ臭そうに白状した。

「俺も聞きましたよ。二人で飲みに行ったりするそうじゃないですか」

生河君が言う。

そういえば、僕も思い出した。いつだったか盛永が帰る時、

「内藤君、先に行つて本屋で待つてるぞ」

などと言っていた事を。

「何だか怪しいですね。ひょっとして二人は恋人関係なんじゃ……」

「冗談はやめて下さいよ。俺は嫌なんすけど、向こうが言ってくるので……。上司だから付き合うしかないじゃないっすか」

「そうか。あいつ、とんでもないエロジジイだから、女だけでなく男が好きって事もありえるかもしれないな。英雄色を好むとも言っし、両刀使いかあ」

もつとも奴は英雄ではないけれど。

「それちよつと聞いた事ありますよ。盛永さんのホモ疑惑……」

と塚山さんが言う。ひょっとしてこれも課長からの情報なのだろうか。

「まさか、内藤さん？」

「そ、それはないっすよ。一緒に帰ったりはしますが、尻を貸したりって事はないっすから！」

内藤さんは必死に否定する。

「でも怪しいですねえ。今のところは何もなくとも盛永さん、内藤さんを狙っているのかも？」

生河君が指摘する。

「本当に勘弁して下さい。洒落にならないっすよ！でも……」

「でも……何ですか？」

皆の視線と聞き耳が内藤さんに集中する。

「実は娘さんを紹介された事はあって……。歳は俺の一個下だったかな？あまり可愛くはなかったっすが」

「へえっつ。男として好かれてるかはともかく、やはり内藤さん気に入られてはいるんですね」

僕は内藤さんの告白で、盛永の贗品の背景がよくわかった気がした。男色か、婿取りか、はつきりとした理由はわからないが、彼がターゲットにされているのは間違いないようだ。

この後も盛永の話をいろいろと聞いたが、奴は若い時から相当な暴れ者だったようだ。酔っ払って町中でヤクザと喧嘩して、職場にその相手から殴り込みを掛けられた事などもあったらしい。職場旅行においてフリチン状態で卓球をしたなどという、エロネタもあった。そういった武勇伝を積み上げて昇進していき、今の暴君の地位を築いたのだろう。これは生半可な相手ではないと、改めて実感した。

そして僕は日頃のストレスを吐き出し尽くし、ようやくせいせいした。すると話は段々と男女関係に移ってきた。まず生河君が自分の妻子の話をすると、そこから塚山さんが聞いてきた。

「生河さんは奥様も子供さんもいますけど、あとのお二方はどうなんでしょうか？」

「俺は一応、彼女いるっすよ。専門学校の時の同級生だから、盛永

さんの娘じゃないっすが」

内藤さんが先に答えた。

「昔の同級生という事は結構長いお付き合いなんですか？」

「いや、最近付き合い始めたばかりっす」

「内藤さん、もうやる事はやったんですか？」

生河君がズバリと聞く。意外と手厳しい男だ。

「まあそれは……。付き合ってればやる事やるっすよね」

僕は内藤さんがそう答えるのを聞き、少々悔しくなった。生河君は妻子、塚山さんは課長、そして内藤さんにも彼女がいる。三人とも、心も身体も充足しているのであろう。現在、この中でそういう心境に至れていないのは僕だけだ。特に若くして小太りで、見た目的にはそれ程でもない（と僕が思っている）内藤さんにまで、彼女がいるのはシヨックだった。

「そっういえば潮田さんはどうなんすか？」

内藤さんが尋ねてきた。

「この前の旅行で塚山さんにも言ったけど、いけませんよ。募集中です」

「私もその時に言いましたが、いけません……」

僕に続いて塚山さんが答えた。（嘘を吐け！課長と付き合っているんじゃないのか？）と言いたい気持ち胸の中をくすぶっていたが、さすがに口には出せなかった。さらにあの時の様子が頭に浮かんできて、彼女の顔を直視する事も出来ない。

僕は横目でちらりと脇を見た。守田さんと江崎さんが仲良さそうに話している。その様子を見てみると、例の噂が本当に思えてきてまた悔しくなった。寂しいのは僕だけなのか？

しばらく昔の彼女の話などが続いた後、生河君は妻子が待っているからと、先に帰って行った。そして内藤さんもトイレに立った。残されたのは僕と塚山さん。不意に彼女が口を開いた。

「あのー、潮田さん、この後二人で飲みに行ったり出来ませんか？」
「えっ？」

僕は戸惑った。何を考えているのかはわからないが、普通ならばこんな風に誘われるのは、とても嬉しい。しかし目の前にいるこの人は、課長と付き合っているのだ。彼女は僕がそれを知っていると夢にも思わないのだろうが、あいにくこちらは現場を目撃してしまっている。この後二人で飲みに行っても、楽しい展開が待ち受けているとは考えにくかった。まるで負け越しが決まってからの取組みたいだ。

しかし審判は迫られていた。これを回答出来るのは、内藤さんがトイレから戻るまでの間だ。僕は考えた。そもそもこれは断る事自体、難しいのではないか？

もちろん「酔ってしまった」とか、何とでも理由は付けられるだろうが、下手すると誘ってきた相手のプライドを傷つけてしまう事にもなりかねない。しかも背後には課長もいるので、何となく怖い。それに僕自身の気持ちはどうなんだろう。確かに課長との情事を目撃するまでは、塚山さんに好印象を抱いてはいたのだ。そう考えると、承諾する方に利があるかもしれない。ここは誘いに乗り、飲みくらいは行くべきだと思えてきた。

「行きますよ。塚山さんさえ良ければ」

僕は答えた。

「本当ですか。嬉しいです」

本気なのかわからないが、確かに彼女は嬉しそうに見えた。僕は心の中で自分に「騙されるな!」と言い聞かせながらも、気分が少し浮ついてくるのを感じた。

程なく内藤さんが戻って来たが、僕達はそ知らぬ振りをして、会話を合わせた。それから三十分もすると一次会は終了した。

僕と塚山さんは二次会に行かない人々の帰りの輪に加わりつつ、闇に紛れて再び二人で合流した。江崎・守田の二人が同じ方向へ歩いて行くのを見て少し気になったが、それをどうこう出来る訳でもなく、僕達は一軒の居酒屋に入った。

14話

「突然誘ってすみませんでした。一度、潮田さんとゆっくり話してみたくて」

「それって本気で言ってます？何でまた……」

「私、職場の年齢が近い人で仲良く出来る方があまりいなくて……。潮田さん、この前の旅行の時とても話しやすかったから、いろいろ相談とか出来るかな……と」

「それは嬉しいですね」

と答えつつも、彼女の『相談』という言葉が気になっていた。ひよつとして課長との件を『相談』するつもりじゃないかと思うと、気が気でなくなってきた。確かに僕は知っているが、そんな事を『相談』されても困る。

「潮田さんはそう言ってくれると思ってましたよ。この前話して、すぐにいい人だってわかりました」

「俺、そんなにいい人に見えるかな？それだったら本店だって、生河君とか、江崎さんとか、いい人いるじゃないですか」

「生河さんは既婚者だから、こんな風に飲めないじゃないですか？

江崎さんは……話し掛け辛くて」

「そう？気さくで話しやすいと思うんだけど」

「潮田さん、知らないんですか？」

突然、塚山さんは質問を投げ掛けてきた。

「は？何を？」

「江崎さんと守田さん、付き合っているっていう噂があるんですよ」

「ああ、それは聞いてますが、本当なんですか？」

「私もわからないんです。でも二人、職場では凄く仲良くして……。そのせいという訳でもないですが、私、守田さんともあまり仲良く出来てないんです」

「なるほど。よくわかりましたよ。それで俺なんか誘ってくれたっ

て訳ですね」

しかしこの塚山さんもしたたかだ。彼女自身、大きな秘め事を持っているのに、守田・江崎の噂をあっさり吹聴する辺り、課長の夜の相手をしているだけあつて結構なやり手に思われた。下手な事を言つと、僕も弱みを握られてしまふかもしれない。

注文した酒が来て、僕らは乾杯した。彼女は自分の頼んだ酎ハイをぐいっと一飲みすると、口を開いた。

「潮田さ〜ん、さっきも言つてましたが、彼女いないって本当なんですか？」

「本当ですよ。そんなの嘘吐いてどうするんですか。逆に塚山さんはどうなんです？そっちこそ彼氏いないっていうの信じがたいんだけど」

言つてから僕は（しまった！）と思った。自分の意志とは裏腹に酒が言わせた言葉だ。決して課長との事を聞きたい訳ではないのになが、

「いませんよ。いるように見えます？」

彼女の答えは心配に及ぶようなものではなかった。ただ「いるように見えます？」という問いはないだろう。こちらは既に「いる場面」を見ているのだから。

「塚山さんくらいの人だったら、普通に彼氏いそうですけどね」

僕はとりあえず無難に答えた。しかしこのセリフとて、言つていて違和感を覚えた。結局、相手の嘘を知りながら喋っている為、不自然な感じがしてくる。だから、

「そう？嬉しいな」

などと彼女が言うのも、嘘臭く聞こえてしまう。

僕は何だか作られた会話を芝居のように話している気がしてきた。どっちも嘘を吐いているのだが、真実を知っており、変だと感じているのは僕だけだ。嘘が混じっているにせよ、彼女は本気で話している。何という妙なシチュエーションであることが。

「どうかしたんですか？」

塚山さんは、考え込んでいた僕を覗き見るようにして、声を掛けてきた。

「いや、何でも……。しかし、こんな風に二人で飲んでいるのがバレルとマズそうですね」

僕は当たり前障りのない事を言っただつたが、

「私は気にしません。潮田さんは困るの？」

と彼女はまるで意に介さない様子だ。この人が何を考えているのか、またわからなくなってきた。

「そりゃ、二人で飲んでいるのを職場の人にバレたりしたら良くないでしょ？」

何より課長に知れたら僕が困る。だが、塚山さんは

「そう？私は潮田さんとならいいわよ」

と言い放つ。

「えっ！」

僕は思わず飲んでいた酒を吹き出しそうになった。

「塚山さん、さっきから変な事ばかり言ってるけど、かなり酔ってるでしょ？」

「酔ってますよ。でなきゃ楽しくないじゃないですか」

見ると彼女のグラスはあつという間に空になっていた。

「大丈夫ですか？無理して飲んじゃダメですよ」

「潮田さんやさしい。大丈夫ですよ。もう一杯頼みましょう」

彼女は呼び出しボタンを連打して店員を招くと、ジントニックを注文した。

僕は押し入れで覗き見た時と同じくらい啞然としていた。こんなに酒乱な女性だとは思わなかった。普段のイメージとは全く違った一面を持つ人だ。

「潮田さん、ひょっとして呆れてます？」

「いや、そんな事はないです……よ」

「ごめんなさい。私、潮田さんと二人で話がしたかったんだけど、いざこんな風に二人になると凄く恥ずかしくて……」

彼女のセリフはまた嘘かと思われたが、表情は真剣だった。それを見た僕は緊張してきて、鼓動が早くなるのを感じた。

「あのー、私、潮田さんの事、好きみたい……なんです」

僕は自分の耳を疑った。しばらくは自分の聞き間違いか、彼女が酔っ払って言い間違えたのだと、思い込もうとした。

「塚山さん冗談だね？」

僕は聞き返した。しかし、突然の事態に平静を保っていらなくなりそうだった。僕はあまりモテル方でもないので、女の方から告白されたりするのに弱い。課長との件を知らなければ、すぐにも陥落してしまいそうだ。

「何でこんな冗談を……。好きだったら好きですよ！」

半分投げ遣りに聞こえるくらい、彼女の語気は強い。

「でも俺達まだ二回しか会ってないし……」

「恋に回数って必要なんですか？」

「いや、必要ない……と思います……」

鋭い指摘に、僕は思わず敬語で答えてしまった。彼女は本気のようだ。じゃあ課長とは何なんだ。あんなに恍惚の表情を浮かべていた情事が嘘とは考えがたい。ひょっとして僕と二股掛けようとしているんじゃないかと思えてきた。

「潮田さん、私に全く興味ないですか？」

「そんな事ないですよ」

事実、最初は好感を抱いたのだ。アレさえ見ていなければ……

「じゃあどうなんですか？私の事、どう思ってますか？」

「その前に教えて下さいよ。一体、俺の何処がいいんですか？」

僕は疑問に疑問を返した。そもそも何をもって僕を好きだと言っているのか、全く理解出来ないからだ。

「最初是一目惚れで……。それからこの前の旅行で話して、いいなあって思ってた。だから今日も一緒に話せないかなあなんて思ってたんです」

「そうか……。ありがとう」

「さっきまだ会って二回目って言ってたけど、こういう機会がある時にどうにかしないと、なかなか潮田さんと会う機会ないから……」
「本当にそう思ってる？」

「何でさっきから疑うような事を言うんです。潮田さん、私がふざけてると思ってるんですか？」

「いや、ふざけているとは思わないけど……」

その先は酔っついていてもやっぱり言えなかった。この話に収集をつけるには、課長の件を持ち出さずに僕が答えを出すしかないようだ。正直に言つと、塚山さんは結構魅力的だし、僕も現在、彼女が欲しくてたまらない。しかし、課長との生々しい場面を見ているだけに、どうしても尻込みしてしまう。盛永王程ではないにせよ、僕だって性欲のある男だ。ここでOKすれば、今晚中に彼女を抱く事まで可能かもしれないと思うと、迷ってしまう。実際に僕は、目の前に当人を置きながら、この間の情事を頭に浮かべて、内心興奮していた。

「潮田さん！」

塚山さんは催促するかのようにもう一度僕の名を呼んだ。これは決断するしかない。今の塚山さんの顔と、情事の時の彼女の顔が、頭を交錯する。

「ごめん！塚山さんの事、嫌いじゃないけど、まだ自信がないよ……」

僕は答えてしまった。課長との事を隠したまま、僕に言い寄ってくる不可解さが、まず精神的に歯止めを掛けた。さらにあの時見た光景、課長の意のままに感じまくる彼女を思い出すと、肉体的にもそれを凌駕する自信がなかった。

「そう……」

塚山さんは淋しそうな表情をした。本気で悲しそうに見えた。

当然この後、会話は弾まなかった。

「また飲みましょう」

などと言つが、お互い気が入ってない感じだ。盛り上がらない状

態が続き、僕達は会計を済ませて店を出た。

家の方向が逆だと言うので、タクシーを二台見つけ、僕は塚山さんを乗せようとした。その時、彼女が口を開いた。

「ひよっとして……潮田さん、知ってたんですか……？」

「な、何を？」

「いえ、何でもない……です。おやすみなさい」

そのまま彼女はタクシーに乗って行ってしまった。

塚山さんが最後に言いたかったのは、やはり課長との事だったのだろうか。彼女は僕がそれを知っているなどとは思っても寄らない筈だ。しかし、僕の態度からそれを察知したのかもしれない。

僕も一人、タクシーに乗り込んだ。するとタクシーメーターやスピードに比例するように、急速に悔しさが膨らんできた。やはり断ったのは失敗だったのではないか。今日彼女を抱いていれば、いやそこまですりかかっても気持ちに応えていれば、日頃のムシヤクシヤした気分も晴れたのではないか。これからすぐに彼女が出来る保証は全くない。そう考えると、一時の迷いや自信の欠乏で、彼女のオフアートを蹴ったのは大間違いだったような気もしてきた。大体、誰が現在の僕の心と身体の苛立ちや興奮を鎮めてくれるというのだ。それは塚山さんだったのではないか……。

この夜、僕は一人ベッドで苦悩した。

15話

僕は土日と、相変わらず寝て過ごして、再び月曜を迎えた。寝たとは言っても、金曜日の夜の判断が間違っていたのではないかと思うと、気分は晴れず、神経は昂ぶってよく眠れず、ベッドで煩悶を繰り返した。

かといって、承諾など出来なかったと思う。やはり課長との一件は衝撃的過ぎた。それを知りながら、塚山さんとうまくやろうなどとは、無理な話だ。そんな度量は、僕にはない。だから仕方がなかったのだ。

この相反する気持ちが入れ替わり立ち替わり、僕の中に芽生えるので、いつまでも深い眠りに入れず、さっぱり寝た気がしなかった。しかも仕事が進むと、盛永の顔など嫌なものばかりが浮かんで、日曜の晩は全く眠れなかった。

だから月曜の朝、僕は頭も気持ちもすっきりせぬまま出勤した。どうにも気が重い。そんな状態で道路を歩いて、職場へ向かう途中、「おい、潮田君！」

と背後から声が掛かった。僕はそれを聞いただけで身震いがした。声の主は盛永王だった。

「お、おはようございます」

僕は挨拶すると、頭を軽く下げた。

「おはよう。何だあ、元気ないな？」

「ちよつと寝不足気味でして……」

答えながら、（半分はお前のせいだろう）と思ったが、当然口に出せる筈はない。

「昨晚、飲みにも行ったんか？」

「いえ、日曜の夜なんてとてもそんな……」

「バツカ！ 若い時には毎日でも飲みに行くもんだ。俺なんて、二十代の時は毎晩飲み歩いたもんだ」

「はあ……」

人が元気ない時に、己れの豪傑振りを誇示する辺り、さすがは王だ。

「そういえばあんた達、金曜日は若いもんで飲んだんだったな？」

「はい」

何で知っているのかはよくわからないが、嫌な予感がしてきた。

「その場には女の子も来てたんだろう？ちゃんと口説いたんか？」

とジジイはエロい顔をして言う。

「そんないきなりは……」

「最近の若いもんはダメなんだなあ。女いたら、誘って口説かなきゃ！」

「はあ」

僕は聞いていて、腹が立ってきた。ちょうど塚山さんの事でムシヤクシヤしていたのに、盛永の奴はその傷口をわざわざえぐるような事を言う。しかも「女がいたら口説け」とは、何たる暴言。どうしようもないエロジジイだ。

「女は誰がいたんだ？」

「守田さんに、塚山さんに……」

「守田さんいたんか！彼女はいいいじゃないか。誰も口説かずか？」

「おそらく……。いや、江崎さんが口説いたかもしれません」

僕は実際の事はよくわからないが、少しは王を喜ばせようと、適当な発言をした。

「そうか、江崎やるじゃないか。それに引き替え、あんた達A町組は悔しくないのか？潮田君も内藤君ももっと女にがめつくならんといかんぞ！」

「は、はい」

僕は（勝手な事を言うなあ）と思ったが、程なく職場に辿り着き、ようやく解放された。

皆が集まり、業務が始まると、盛永王が全員に話し掛け始めた。

「この間の旅行で、本店側の飲み会幹事が終了したんだそうだ。そ

れで今度はこっちの番になる。順ちゃん、よろしく頼むよ」

「はい」

与田は素直に応えたように見えた。だが、この話を終え、仕事を再開すると、奴は僕に言った。

「俺は何もやらねえからな。全部お前が取り仕切ってやれよ！」

「なっ！」

とんでもない事を言い出すので、僕は驚いた。まだ入社したばかりの序二段クラスの人間に、何を言っただこいつは。言い返そうにも、奴は横を向いてしまい、聞く耳持たない様子だ。僕は頭に血が上りそうになった。

だが、（平常心、平常心……）と僕は自分に言い聞かせた。ここでもキレても何一つ得する事はない。午前中、この後己れの業務に集中した為、幸いにも与田と会話をする事はなかった。そのまま昼休みになり、僕は腹に怒りを溜め込んだまま、食堂へ向かった。

内藤さんと昼飯を食べて部屋に戻ると、曲瀬が席で唸っていた。

「うゝ、困った……。あゝ」

「どうかしたんすか？」

内藤さんが尋ねる。

「あゝ、パソコンがちよつとな……」

曲瀬はパソコンを指差して、困った表情を見せた。

「ちよつと見ましようか？」

僕と内藤さんが近付こうとすると、

「あゝ、いやいやいいんだ。情報処理係呼ぶから」

奴は両手で遮る動作をして、僕達を押し戻した。変だと思いつつ、僕も内藤さんも自分の席に戻った。

午後の仕事が始まり、曲瀬が呼んだ情報処理係が来た。太い縁のメガネを掛け、いかにもパソコンに詳しそうな感じの人だった。彼は曲瀬の招きに応じて、奴のディスプレイを覗き込む。

「おゝっと、これは凄いサイトだ！」

彼が突然叫ぶ。

「バ、バカッ、余計な事を言うな！」

曲瀬は明らかに狼狽していた。普段から汚らしい顔が、動揺からか、歪んだようにも見えた。僕と内藤さんは目配せして、二人でニヤツと笑った。どうせいつものようにエロサイトでも見て、画面が暴走したのだろう。情報処理系の彼の反応が面白くて、僕は痛快だった。

しかし曲瀬の蛮行はこれで終わらなかった。結局、奴のパソコンはどうにもならないようで、情報処理係が回収して行ったのだが、その後ぽつりと呟いたセリフが

「あゝあ、これじゃ今日は仕事にならねえな」

だった。これには部屋の皆が呆れたようで、奴への非難がましい空気が流れた気がした。

しかし曲瀬は頭がおかしいのか、それに全く気付かない様子で、盛永王の傍まで行くと、

「盛永さ〜ん、仕事にならないんで有給休暇取って帰っていいですか？」

と言い放ったのだ。これにはさすがの盛永王も怒った。

「何を言っただんだ！」

「いやあ……、パソコン壊れて仕事にならないんで……」

「曲瀬ちゃんよ、あんたの部下が一生懸命仕事をしてるというのに、仕事がないから帰りますってのはねえんじゃないか！」

「はあ……そうですね……」

曲瀬は納得してない様子だが、盛永が激昂しているので、神妙な態度を取り始めた。

「とにかくそんな理由で有給は認めん！バカを言うんじゃないよ」「はい」

子供みたいな返事をする、曲瀬は席に戻った。しかし居心地の悪さを感じたのか、すぐにトイレへ逃げ出て行った。

「アホか、あいつ！」

与田がキレ気味に怒っていた。

「仕事しねえなとは思っていたが、あんな性根とはなあ……」

盛永王も呆れ果てていた。

この時、僕だけが内心喜んでいただろう。曲瀬がバカっぷりを見せてくれたお陰で、僕に集中していた盛永や与田の敵対心・闘争心が分散しようとしているのを感じたからだ。このまま曲瀬が攻撃され続ければ、僕はラクになれる筈だ。

曲瀬への嫌悪感が部屋中に流れたまま、夕方を迎えた。さすがに雰囲気を感じ取ったのか、それとも先程言ったように本当に仕事がないのか、奴は終業時間になるとそそくさと帰って行った。

するとまた皆が文句を言い始めた。

「あれパソコン、絶対エロ画像だよな」

吉見さんが言う。

「普段から仕事してないのに、仕事がないもねえもんだ。バカが！」
与田が僕に言うのと同じような調子で言い放つ。

「今日はさすがに頭にきたな。俺も今まで庇ってきたが、今日のは救いようがない。あれじゃ内藤君や潮田君にも示しがつかないからなあ」

盛永王もため息を吐きながら呟いた。僕は（示しがついてないのはお前もだろう。半分は自分の責任じゃないか）と思ったが、それは胸の内にしまっておく他なかった。

一時間程残業していると、最初に吉見さんが帰り、与田も帰って行った。程なく盛永王も立ち上がり、帰り支度を始めた。そして内藤さんに向かって、

「おい、内藤君、先に行ってるぞ。いつもの本屋で待ってるよ」と言った。しかし、

「俺、今日はもう少し残っていきます」

と内藤さんは誘いを拒絶した。

「そうか……」

僕はその時、盛永が淋しそうな顔をしたのを見た。そしてその後、不快そうにムツとしたのも目に入った。

「すみません」

気を遣っているのか、内藤さんはわざわざ謝っていた。

「じゃあ帰るよ！」

奴は大げさに足を踏み鳴らして、ぶちかましでもしたかのようにドアを激しく開閉させて去って行った。

「何だか盛永さん、不機嫌だったな。まあ曲瀬ちゃんの件があったし、苛ついていたんだろうが……」

黙々と仕事をしていた南川さんが呟いた。そして彼も立ち上がり「俺も帰るぞ。お疲れさま」

と言うと、帰って行った。

部屋に残ったのは僕と内藤さんだけになった。

「内藤さん、いいんですか？ 盛永のジジイ、怒ってたみたいじゃないですか」

「いいんですよ。この前、ホモだとか言われて懲りたつすよ。塚山さんにまで変な目で見られてたじゃないつすか」

「やっぱり？ それで帰らなかったんだ？」

「そうつすよ！ 俺だって、自分の尻は守りたいつすからね」

と言って内藤さんは臀部を押さえる仕草をしながら、大笑いした。僕も一緒になって笑ったが、彼の行く末が心配にもなった。盛永がしつこい男であるのは身に染みてわかつている。内藤さんがあからさまに拒絶するようだと、奴の嫉妬による怒りが火を噴きそうな気がしないでもない。

翌日も内藤さんは残業を理由に、盛永の誘いを断った。そしてこの一週間、一度も盛永と共に帰らなかった。

16話

そのせいか、今週の盛永王はいつも以上に荒々しく、重箱の隅をつつくような事まで指摘してきた。僕もあまりにアホみたいな指摘をされたので、証拠を盾に反論したら、

「確かに潮田君の言うとおりだ……」

と非を認めたものの、後で

「くそっ！ちくしょう！」

と一人叫んでいる荒れっぷりだった。

そして僕以上にネチネチと言われていたのは曲瀬だ。例の『仕事ない発言』以来、奴は完全に目を付けられ、暇そうにしている度に盛永王から小言を言われていた。気のせいか、曲瀬が怒られている時は、張り手でも受けたかのように顔が崩れて見える事もあった。

翌週、明らかに部屋の雰囲気は変わった。まず内藤さんが伝票処理の事で、盛永に呼ばれた。

「内藤君、伝票の処理っていつもこんなやり方をしてたかね？」

「はい？」

「これはちよつとおかしいな。これじゃ整合性が取れないぞ」

「でもいつもこの通りに処理して、盛永さんも承認してくれていましたか」

内藤さんはホモ疑惑を払拭するかの如き勢いで反論する。これはおそらく今まで内藤さんの処理伝票について、盛永王が全く見ずに承認していた事によるのだろう。僕がこんな事を言い返したら、間違いなく「生意気言うな」で終わるのだろうが、果たして内藤さん相手にどういう反応を見せるのか。内藤さんには悪いが、僕は興味津々でこの様子を見つめた。

「内藤君よ、今までは俺がちゃんと見てなかったようで悪かった。だから、これからはちゃんと直してくれや」

やはり盛永の言い方はソフトで、僕に対する態度とは違っていた。
「はあ……。わかりました」

内藤さんは納得いかないようだが、渋々承知した。盛永王から山のような書類の束を受け取り、それを全部修正するらしい。皮肉にも、たくさんの懸賞金を受け取った力士のようにも見えた。

昼休み、食堂で内藤さんは愚痴をこぼした。

「クソジジイ！これまで何も言わなかった癖に、今になってグチャグチャ言ってきて最悪っすよ」

「でも、俺に言うよりは全然甘い感じですよ」

「それはそうっすが、あれだけの伝票を処理し終えた後に全部直せとはひどいっすよ。今まで全部通していたのに……」

「内藤さん、余計なお世話かもしれませんが、今日は一緒に帰った方がいいんじゃないですか？」

「嫌っすよ。下手すると、帰りまでネチネチ言われそうじゃないっすか」

「確かに……それはそうだね」

僕は一理あると思った。しかしこのままだと、さらに盛永王の不快感が増していくようにも思われた。内藤さんが同伴しないと、彼は自分で自分の首を絞める結果になるのではないか。

でも内藤さんの意志も堅いようで、絶対に一緒に帰らないと言う。僕はこの後も愚痴をたくさん聞かされた。それでも、こちらも散々聞いてもらっているのです、お返しとばかりにしつかり話を聞いてあげた。

そして夕方、やはり盛永王は帰り際に内藤さんを誘った。しかしまたも返事はNO。

「そうか。もう、知らんぞ！」

何を知らないのかわからないが、盛永は顔面を真っ赤にして、牛のように吠えて帰って行った。まるで負け越してがっくりと花道を去って行く力士のようで、僕には痛快だったが、明日からの奴の機嫌がどうなるか不安でもあった。

翌日から、盛永王の内藤さんへの接し方が完全に变化した。呼び付けた時は、僕に対する態度と大して変わらなくなった。そして帰りも内藤さんを誘わなくなったのだ。内藤さん自身も、帰りの呪縛から解放された事にはホッとしたみたいだが、執拗なる攻撃に苛立ちを隠せないようだった。

そして、部屋にはもう一つ変化が訪れた。曲瀬が鬱病の診断書を持参して、しばらく病休する事になったのだ。医者は頼まれればすぐに診断書を出すと聞いた事があるので、絶対に嘘だと思ったが、盛永王でも診断書は拒絶出来ず、明日からの休場を認めた。

曲瀬の退場で、部屋は盛永（＋与田）VS僕・内藤さん、という様相を呈してきた。盛永は本格的に内藤さんに冷たく当たるようになり、恋の恨みの恐ろしさ（？）を実感させられた。

また、曲瀬がいなくなったのは意外にも大きな痛手で、一時的に奴が被っていた盛永災害が再度僕や内藤さんに降り掛かって来るようになった。この影響で、被害とほとんど関係ない南川さんや吉見さんも、部屋に居辛そうな感じが見て取れた。

17話

そしてついに二人目の脱落者が出た。南川さんが、胃に悪性の腫瘍が見つかったとの事で入院・手術の為、長期療養休暇に入るというのだ。

「順ちゃん、潮田君、申し訳ないが、南川さんの代わりの人的補償はないそうだ。曲瀬ちゃんが休養になり、ただでさえ人出に困る状況だが、俺が係長の代わりをするし、順ちゃんに全幅の信頼を置いているから、何とかやりくりしてもらいたい。よろしく頼むよ」

と盛永王が、僕と与田に説明した。

「はい」

と返事したものの、冗談じゃない。盛永が係長代わりで、与田が責任者なんて、やってられない。僕は負け越しが決まってしまったような気分で、目の前が真っ暗になりそうだった。案の定、与田は増長した。

「俺は自分の仕事で忙しいんだ。南川さんの分なんか、お前が全部やれよ！」

「そんな。無理を言わないで下さいよ」

さすがに僕は言い返した。

「うるさい。下っ端は文句なんて言えねえんだ。調子に乗るな！」

「くっ……」

僕は次を言い返せなかった。しかし右の拳は固く握られており、次に爆発したら、手が出てしまいそうだった。こんな時、係長代わりである筈の盛永王が黙殺しているのも腹立たしい。口くでもない親方だ。

結局、僕は南川さんがやっていた仕事を全て押しつけられた。この苛立ちを押さえ切れず、僕は昼食時、内藤さんに憤りを吐き出しまくった。

「本当に耐えられませんよ。もうちょっとで与田を殴るところでし

たよ」

「あれはひどかったつすね。盛永・与田は最悪つすよ。曲瀬や南川さんはうまく逃げたつすね」

「殴るのは無理だけど、何かやってやりたいなあ。このままじゃ、本当に気が済まないですよ」

これが僕の偽らざる気持ちだった。何でもいいから、奴らにやり返したくてたまらなかった。

「確かに。椅子に画鋏を置いておくとか、その程度でいいからやりたいつすね。あいつらが『痛てゝっ！』とか叫んで飛び上がったなら最高つすよ」

「そりや最高ですが、俺、それを見たら絶対笑ってしまいますね。バレバレでしょ」

確かに想像しただけで滑稽だった。盛永や与田の尻に画鋏が突き刺さり、それを痛がつてわめき叫んだら、どんなに痛快だろう。

「何かバレずに懲らしめる手段はないつすかね？」

「俺、相撲だったら、奴らにでも勝つ自信あるんだけどなあ」

「そういえば、『新潟の千代の富士』でしたっけ？旅行では凄かったつすよね」

「あんなただの中年メタボデブ共だったら、まわしさえ取れば、土俵に投げ飛ばして転がしますよ」

そのくらいの自信はあった。怪我の為、大学で辞めてしまったけれど、素人相手なら負けない自信がある。

とはいえ、相撲で逆襲するのは無理だろう。怒りが爆発した時は上手投げでも食らわせて退職でもいいが、それは本当の最終手段だ。結局、僕らは無策のまま、愚痴を言うだけ言って、昼食を終えた。

そして部屋にはまた軽い事件が起きた。この日の午後、吉見さんに家から電話があり、子供さんが体調を崩したそうで、彼女は早退したのだ。

部屋に残ったのは陰悪なムードの四名。僕と内藤さん、盛永と与田で口を利く事はあっても、それ以外の組み合わせの会話はほとん

どなかった。お互いに牽制し合っている感じで、抜き差しならぬ雰囲気だ。部屋中に漂っていた。

勤務時間が終わると、僕も内藤さんも、逃げるように部屋から去った。中にいるだけで息が詰まりそうで、いてもたってもいられなかったのだ。明日からもこんな感じだったらどうしようかと不安がよぎった。

そして嫌な予感的中、翌日から吉見さんも休場した。子供の調子が悪いとの事で、しばらく病院に付き添うのだそう。その真偽の程は定かではないが、下ネタも話せる吉見さんがいなくなるのは痛かった。そうでなくても昨日同様の四人状態が続くかと思うと、憂鬱になる。曲瀬ではないが、僕が鬱病になりそう。

さすがに盛永王も王政維持に危機を感じたのか、本店に電話をして、人的補償を求めている。そして電話を終えると、表情をにこやかにして言った。

「おい独身諸君！朗報だ。本店から女性職員が来るぞ」

「うほっ！」

与田は猿みたいに吠えた。

「誰だと思う？」

盛永は周囲に尋ねるが、僕達は関わりたくないで反応しない。しびれを切らして奴は自分で言う。

「守田さんか塚山さんだぞ！」

これには僕も心中、反応した。しかも（頼むから守田さん来てくれ！）と祈った。塚山さんに来られては、気まずい空気がさらに濃くなりそう。何しろこの前の告白から一言も交わしていないのだ。もともと守田さんが女一人でこんな部屋に来るのもかわいそうな気がするけれど。

盛永の話では、夕方にはどちらか決まり、明日からこちらへ来るという。何とも急な話だが、確かにこちらの人数の急激な減り方を考えれば、すぐにでも助けが欲しい状況だ。仕事がたくさんあればある程、与田や盛永の機嫌も悪くなるし、一人でも増えてくれれば

どんなに助かる事か。

仕事というのは恐ろしいもので、平気で人間の仲を結び付けたり、引き裂いたりする。もともと僕がこんな苦況に陥ったのも、業務内容で盛永王と揉めたからだ。仕事内容が複雑怪奇でなければ、こんなにギスギスしなくて済んだかもしれない。たまには仕事で仲が深まるような事件、例えば彼女が出来るような事なんかが起こって欲しいものだ、つくづく思う。

今日もたまりにたまった業務を捌きながら与田に怒鳴られ、鬱屈した気分のまま、夕方を迎えた。突然、電話が鳴り、盛永が出た。

「はい……はい、あゝそうですね。わかりました。よろしく」

「どうなっただんです？」

与田が電話を切った盛永に尋ねる。

「塚山さんが来てくれるそうだ。自分から志願してくれたそうぞ。嬉しいじゃないか」

僕はそれを聞いてがっかりした。守田さんが来るかもしれないという淡い期待を抱きながら今日を耐えてきたのに、望みは叶わなかった。

逆に明日から、塚山さんとどんな顔をして会えば良いのか。旅行の時の事も、この間の事もあり、どう対応するべきか、検討もつかなかった。

18話

「おはようございます!」

翌日、出勤すると、明るい声が出迎えた。何故か僕は自分の顔が熱く赤くなるのを感じた。立って出迎えていた塚山さんの顔を直視する事が出来ず、僕は

「おはようございます」

と呟くと、俯いて席に着いた。

部屋に塚山さんが来て、盛永は相変わらずのエロジジイ振りを發揮して彼女を構っていたし、内藤さんも気晴らしの相手を見つけたかのように楽しそうな顔つきになっていた。だが、何故か与田はあまり面白そうでなく、仏頂面をしていた。もちろん、僕も今までの経緯があるので、彼女と気軽に会話出来ずにいた。

そして与田はいつもと変わらず僕を罵倒した。塚山さんみたいな女性の前で辱めを受け、僕はかなりプライドが傷ついた。女の前で叱られたりするのは、本当に恥ずかしいものだ。そういう気持ちかわからずデリカシーのない与田は、やはりなるべくして独身道を歩んでいるのだろう。

しかしこういう見方は男尊女卑的で良くないのかもしれないが、塚山さんが皆のマイカップを洗ってくれたり、適宜お茶やコーヒーを入れてくれたりするのには、女性のありがたみを感じる。それに一人入ってくれるだけでも、男だけのムサい空間が確実に和む。そういう意味では、彼女の加入は大きかったと思う。

昼休み、僕と内藤さんが昼食へ行こうとしたところ、

「食堂ですか? 私も一緒にいいですか?」

と塚山さんが声を掛けてきた。

「いいですよ。一緒に行きますか!」

と内藤さんは乗り気だったが、僕はやはり気乗りがしなかった。僕とこの間、あんなやり取りがあったというのに、気まずい思いは

しないのだろうか。いずれにしろ、行かない訳にもいけないので、三人で食堂へ向かった。

「いや、塚山さん、よく来てくれたっすよ」

内藤さんは砂漠でオアシスを見つけた旅人みたいに、嬉しさを表わしていた。

「よろしく願いますね。役に立てるかわかりませんが」

「いやいや、本当に助かるって！何となく変な雰囲気わかるっしょ？塚山さん来てくれたお陰で、だいぶ中和されてるっすよ」

「そうですね。与田さんの様子とかびつくりしました。あれじゃ潮田さん、かわいそうですよ」

と塚山さんが言ってくれているが、僕は黙っていた。それに気付いた内藤さんが、

「ちよつと潮田さん、元気ないじゃないっすか！どうかしたんすか？」

と聞いてくる。

「いや、何でもないよ」

とは言ったものの、元気がない様子に見られたのか、

「本当に大丈夫ですか？」

などと塚山さんにも気遣われる始末。あんたと喋るのが気まずいから、こんな思いをしているというのに、彼女は意にも介していない調子で、僕は自分が卑小な存在に感じられてきた。

「大丈夫ですよ。ちよつと与田にやられたもんで気が滅入っていて

……」

「そうだったんですか。本当に嫌な感じだったわ。私も見ていて嫌悪感を覚えたもの」

「あんな所を見られたのが恥ずかしくてね」

「恥ずかしくなんかいいですよ。潮田さんは一生懸命やっているのに、あの態度はおかしいです」

塚山さんは僕を擁護してくれていた。内藤さんではないが、僕も嬉しくなってきた。今までの事はさておき、彼女とは同僚として、

仲良くするべきだと実感した。

午後の業務が始まった。僕はまた与田との戦いを覚悟していたが、昼からは状況が変わった。奴が苦しそうな顔をして、しきりに部屋を出て行くのだ。あまりに何度も出入りするので、盛永王が

「順ちゃん、どうした？何処か体調でも悪いのか？」

と尋ねた。

「ちよつと腹の……調子が……。うおっ！」

と叫ぶと、与田は再び部屋を出て行った。僕は（ざまゝみろ）と内心ほくそ笑んでいた。奴が苦しむ姿を見て、久々にいい気分だった。

与田の腹痛（下痢？）は痛快な出来事で、いつも荒んでいた僕の心を和ませた。

「うおっ」

とか

「ああっ」

とか叫んで、部屋の外へ駆け出して行くので、僕や内藤さんは笑いを隠せない程だった。奴は苦しみに耐えられないようで、珍しく書類も自分の机に放り投げて定時ですぐに帰って行った。

19話

翌日、僕が出勤して、部屋の入り口のドアを開けようとすると、中から大きな声が聞こえた。

「……………だろう！」

「そんな……………ないわ」

話の内容までは聞き取れないが、中にいるのは男女だ。僕は入って良いものかどうか判断がつかなくて、しばらく扉の前で立ち尽くした。声の調子では言い争っている感じで、中に入り辛い。

「……………じゃねえか！」

男の叫ぶ声を聞いて、それが与田だとわかった。となると女は塚山さん以外に考えられないので、中の二人が確定した。一体、何を話しているのか。ひょっとして与田が、無理矢理交際でも迫っているのではないだろうか。そう思うと、塚山さんを助ける為にも、早く中に踏み込んだ方が良い気もしてきた。その時、

「潮田さん、何やっているんですか？」

背後から声が掛かり、振り向くと内藤さんだった。

「ああ内藤さん、ちょうど良かった。早く入りましょう」

僕はドアを開けた。僕の言葉の意味がわからないようで、怪訝そうな顔をして、内藤さんも続いた。

僕達が踏み込んだ途端、部屋は静まり返った。与田と塚山さんは、何事もなかったかのように各々の事をしていた。結局、何を言い争っていたのかは、わからずじまいだった。

ただ、今日も与田はおかしかった。仕事中、地鳴りのような音が隣から響いたので、見ると与田がイビキをかいて眠っているのだった。あまりにあからさまなので、養護派の盛永王までが、

「何をやっとするか！」

とカミナリを落とした。

「うほっ……………す、すみません」

与田は謝ると、部屋の外へ飛び出して行った。トイレに行つて、顔でも洗つてくるつもりなのだろう。

しかし、昨日同様、与田は本当に変で、戻つて来ても目が虚ろで、またすぐに眠りに墜ちそうになっていた。

「ああゝつ、くそっ！」

などと叫んで、ブラックコーヒーをがぶ飲みしていたが、全く効果はないようで、再び寝息を立てていた。

「バカもん！」

ついに盛永王のゲンコツが奴の頭に落ちた。

「うひっ！」

ショックで目を覚ました与田は、慌てて右往左往した。

「順ちゃん、今日はもういいから帰れ！疲れているんだろう。皆の迷惑だ」

「はい……。すみません」

与田は萎れて、逃げるように部屋から去って行った。

僕は二日連続の与田の失態に内心喜ぶと共に、散々偉そうに威張り散らしているくせにこのザマで、腹も立っていた。僕をあれだけ罵倒した男が、仕事中に居眠りをするなんて考えられない（もつとも僕も寝そうになった事はあったが）。盛永がやらなかったら、僕が殴り付けてやりたいくらいだった。

何にしても、奴が帰つてからは天国だった。盛永も塚山さんが来てからはデレデレしていたので、大した被害もなく一日を乗り切れた。困るのは、仕事量が半端じゃない事くらいだ。それも今となつては僕も要領を得てきていたし、与田がいなければ無駄なストレスを感じなくていいので、それ程苦ではなかった。

この日、夕方になると、盛永が帰り、内藤さんもその少し後に帰り、期せずして僕と塚山さんが部屋に残ってしまった。僕は帰りそびれた事を少々後悔した。あの気まずい気分が蘇ってきたのだ。

「あのゝ、潮田……さん」

黙々と残務処理をしている（つморいの）僕に、塚山さんの方から

声を掛けてきた。

「は……はい……」

突然呼ばれた僕は、驚いて間の抜けた反応をしてしまった。

「潮田さん、ひよつとして私を避けてませんか？」

「えっ！ いや……その……」

事実と言えば事実なので、僕は答えようがなかった。

「やっぱりそうなんですね？ この間、二人で飲んだ時の事を……」

「そりゃ気にしないとえば嘘になるでしょ」

僕は多少の反感を込めて言った。彼女の告白で、大いに悩まされ、心を揺さ振られたのだ。気にしない筈がない。逆に平気で尋ねてくる彼女の神経を疑いたくなる。

「そうですね……。潮田さんの気持ちも考えず、軽はずみであんな事を言つてごめんなさい」

塚山さんは謝ってきたが、僕は何とも応えられなかった。無言の僕に、彼女は言葉を続ける。

「あの時、帰り際に『また飲みましょう』って言ってくれたじゃないですか。酔っていたから本気じゃなかったのかもしれないけど、これからそんな気分で接してくれると嬉しいですよ」

「それはまあ……」

勝手な事を言う人だが、確かにその通りだとも思った。別に気まずい状態を続けるのも本意じゃないし、毎日会う以上、気軽に接する事が出来るなら、それに越した事はない。

いや、僕の本心は、まだこの前の後悔を引き摺っているのかもしれない。彼女がこの間の気持ちと変わっていないのなら、たとえ課長の事があっても、自分の気持ちが傾きそうな気がした。結局、僕自身が彼女との取り直しの一番に、消極的になり緊張していただけないかもしれない。

「私、ここへ来て、潮田さんがどんなにひどい目に遭っているか、よくわかりました。本当に盛永さんや与田さんはひどいです」
「わかってもらえて嬉しいですよ」

「だから、私くらいには気を遣わず接して下さい。仕事も多いし、潮田さん、疲れちゃいますよ」

「ありがとうございます。そうさせてもらいますよ」

僕は心配してもらえたようで、少し嬉しくなった。前から塚山さんの言葉には、何となく男心をくすぐられる。こういう所が彼女の魅力なのかもしれない。

「良かった。私、潮田さんに無視されてるのかと思ったから」

「無視は大げさだけど、確かに接し辛い感じはあったよ」

「本当にごめんなさい。一度謝ろうとは思ってたんですけど、なかなか機会がなくて……」

「うん。気持ちはよくわかったから。俺も男らしくなかったです。

ごめん」

僕はとりあえずすっきりした。そうなるに幾つか聞いてみたい事が頭に浮かんできた。

「そういえば盛永さんが、志願して来てくれたって言ってたけれど、こっちへ来たい訳でもあったの？」

「それは……」

彼女は考え込むような仕草を見せたが、

「ちよつと本店で働くのに疲れたというか……。場所が変われば気分も変わるかなと思って」

と言った。

「なるほど。俺も出来るなら本店行きたいもんな。気分変えたいっていうのはよくわかるなあ」

「本店もいろいろあるんですよ」

ちよつと淋しそうな顔で語る塚山さんを見ると、やはり課長との事で悩んでいるのかと感じた。そんな彼女に、僕はもう一つ疑問に思っていた事を尋ねた。

「いろいろあるで思い出したんだけど、今朝、与田と言い争ってたでしょ？何かあったの？」

「嫌だあ、聞いてたんですか？」

「いや、内容までは聞こえなかったけど、結構激しく言い合ってたみたいだから……。ひょっとして、与田の奴に迫られたりした？」

「そ、そうなんですよ！あの人、しつこくて」

彼女はむくれた表情で憤る。与田の奴、やはり危険な男だ。職場で朝から女性職員に迫るとは。あそこまで独身根性が染み付くと、変質的に女性への思いを示すようになってしまうのかもしれない。

「しかし塚山さんモテますね」

「そんな。おじさんばかりですよ。同世代くらいの男の人にモテなきゃ、意味ないですよ」

「そう？恋愛は年齢じゃないと思うけどな」

実際、課長とあれだけ濃密な愛の営みを見せているのだし、彼女の恋愛は年齢じゃないと思う。もっとも愛がなくても行為は可能だから、愛があつたかどうかも定かでないけれど。

「でも与田さんとはあり得ないですよ」

「それはそうだね。ハハハ」

与田が相手にもされず、僕はまた痛快な気分になった。

この後、しばらく塚山さんと話し、彼女は七時前に先に帰って行った。僕は一人残って残業したが、塚山さんと普通の状態に戻れたので悪い気分ではなかった。与田もあのザマだし、久々に嫌な事を忘れて働けた。九時頃まで仕事をしたが、心地好い疲労感で、家に帰ってからもしっかり熟睡出来た。

20話

翌日、出勤すると、来ていたのは塚山さんだけだった。彼女は皆の為にコーヒーを入れてくれていた。皆の机にカップを置くと、最後に僕にも一杯くれた。

「ありがとう」

僕は早速口をつけた。気のせいか、女性に入れてもらうコーヒーは、普通よりおいしい。自分で入れる味気なさに比べて、相手の気持ちが入ったような錯覚を覚えるからかもしれない。

突然、ドアが開いた。挨拶もせず、不機嫌そうに入って来たのは与田だった。目には隈が出来て、ヤケに疲れた顔に見えた。心なしか、巨体が少ししぼんだようにも映った。奴は荷物を置き、踏ん返るように椅子に腰掛けると、塚山さんの置いたコーヒーを一気に啜った。もちろん、礼を言う事などなかった。

その後、内藤さん、盛永王が来て、人間が揃った。盛永王が皆を見回して言う。

「おい、順ちゃん。例の課の幹事の件、考えてくれてるか？夏の旅行について、そろそろ動き出さないと催促来るからな」

「大丈夫ですよ。潮田が考えていますから」

与田の奴はまた勝手な事を言い出す。

「おっつ、そうか。潮田君、頼むぞ」

僕が否定する間もなく、盛永王がハツパを掛けてきた。不本意ながら、この災厄を避けるのは難しそうだ。頭にきて僕は与田を睨みつけた。すると、今日も奴は青白い顔をして、具合が悪そうに見えた。そして、

「うつ……ぶつ」

と口から空気の破裂するような音を漏らすと、奴は部屋を走り出て行った。

「またか……。あいつどうしたんだ？」

盛永が嘆くように呟いた。

与田は戻って来てからも、気持ち悪そうで、

「うぷ……」

「おえっ……」

と汚い音を発していた。隣にいる僕にまで生臭い臭気が漂ってくる。どうやら吐いてきたようだ。

「おい、順ちゃん、いい加減にしろ！この数日、おかしいぞ」

盛永王が苛立ちを隠さずに怒鳴る。

「すみません……。あうっ」

「具合が悪いなら、最初から来るな！」

「朝は別に……うえっ……具合が悪い……おふっ……訳じゃなかったんですが……」

与田は今にも口から何か嘔き出しそうな様子で、必死に答えていた。

「お、おい、部屋で吐くなよ」

「だ、大丈夫……おうえ……」

「一体どうなってるんだ？職場に來ると具合が悪くなるのか？仮病か？」

「いえそんな……。うっっ、すみません……」

与田は再び駆け出して行った。

逆に僕はまた気分が良くなった。仇敵二名がやり合っている様子は爽快以外の何物でもなかった。特に威張りくさっている与田が、叱られて弱っている姿には笑いが止まらない。一時期は神も仏もない世の中のような気がしていたが、ちゃんと悪い奴には天罰が下るのだと思った。そして与田は今日も早退した。

「この部屋はどうなってるんだ！呪われているんじゃないだろうな……」

盛永王もさすがに弱気になってきて、不安そうな顔つきをしていた。

確かに与田がおかしくなったのには不審な点があった。今日はと

もかく、それまでの二日は、出勤時には具合が悪そうではなかった。それなのに、働き始めると、下痢をしたり、眠ったり、吐き気を催したりしている。盛永の言葉ではないが、働く気がなくて、自分で自分を具合悪くしているようにしか見えなかった。

翌日から、与田は心身共に調子を崩したとの理由で、休みを取り始めた。奴はその後何日かは来たが、来る度に体調不良を訴え、毎度のように早退した。しまいには、病欠状態になり、来なくなつた。

これは僕の粘りの勝利なのだろうか。奴は職場に来るだけで勝手に具合が悪くなっていた。これも僕との戦いに、奴の方から疲れてしまったという事なのか。

いや、奴はいびつていた方だ。やられていた僕の具合が悪くなるのならわかるが、まるでストレスを発散するように怒りや書類を投げ付けて来た方が、病む事などあるだろうか。ある意味、奴の精神は病気だったとしても、ストレスを感じて体調を崩すとは思えない。良心が咎めていたのでもなければ、今回の件に僕が影響した可能性は低いだろう。

では、奴に何が起こったのか。確証はないのだが、思い当たる事がなくもない。ただ、それを追求すべきかどうかは迷うところだ。正直言つて、与田の離脱自体は僕にとってプラスの要素が大きく、あえて言えば仕事量が増えたくらいしかマイナスはない。たまに仕事のやり方がわからない事はあるが、罵倒されたり書類を投げられるくらいなら、自分で調べる方が遥かにマシだと思う。

そうになると、与田の離脱の真相を探る意味があるのかどうかは甚だ疑問だった。ただ、格好をつけるようだが、『真実を探求したい』という意味では、そのままにしておけない気もした。だから僕は、頃合いを見て、この件に探りを入れようと決意した。

と、そんな事を考えながら仕事をしていたら、

「潮田君、ちょっとペースがのろいんじゃないか。ボーツとしてないで、しっかりやってくれ！」

と盛永王から叱咤激励の声が飛んできた。そうなのだ。与田の離脱で一番被害を被ったのは彼で、仕事量が半端じゃなくなるわ、このA町支店の経理部隊の存続は危ぶまれるわで、今や裸の王様に等しい状態にまで落ちぶれていた。そんなイライラが最高潮に達しているのか、僕や内藤さんはもとより、塚山さんまで八つ当たり気味に小言を言われるようになっていた。カリカリしている様子は、連敗中の力士を叱咤する親方のように、いつも以上に近寄り難い。せつかくの塚山さん効果も薄れてしまうくらい、部屋は静まり返っていた。

「潮田君、 商事の分、まだかね？」

「塚山さん、来たばかりなのはわかるがね、もう少しスピードアップ頼むよ！」

などと、仕事如山積みのところへうるさくしつこく言ってくるので、こつちもイライラしてくる。

そして夕方、事件が起こった。テンパリ気味の盛永王は、僕と塚山さんにとっても消化しきれないような無茶苦茶な業務の指示を与えると、

「内藤君、ちよつと別室で打ち合せだ。会議室へ行くぞ」

と言つて内藤さんを招き寄せて、二人でこの部屋から離れた会議室へ出て行った。

残された僕と塚山さんは仕事中のストレスもあつて愚痴をこぼし合った。

「本当に腹立つでしょ？」

「潮田さんが前に言っていた通りですね。盛永さんって意外とねちっこいんですね。同じ事を何度もしつこく言ってくるから嫌になっちゃう！」

塚山さんは本当に怒っているようだった。

「あいつを相手にする苦しみを理解してもらえて嬉しいよ」

「大変だったんですね、潮田さん」

塚山さんが心情をわかつてくれたのが嬉しくて、僕はたまった仕

事もそこそこに、盛永への文句を吐きまくった。

そして話し込んでいたら、二人になってから既に一時間が経とうとしていた。

「もう六時半！内藤さん遅いですね」

塚山さんが時計を見て言った。

「確かに……。またネチネチと個人的にやられているのかな？」

と言いながら、僕は別の事を考えていた。

「あの塚山さん、話は変わるけど、ちょっと聞きたいことがあるんだよ」

「何ですか？」

「実は……」

と僕が言い掛けた途端、ドアが勢い良く開いた。盛永王が慌てた様子で入って来たのだ。何故か息を切らして、取り組みが終わったばかりの力士のように汗を大量に掻いていた。

「今日はもう帰るよ。お先に」

と言うと、奴は荷物を掴んで部屋から出て行った。僕達が呆気に取られるくらい、瞬間的な出来事だった。

「潮田さん、さっきの話って？」

落ち着いたところで、塚山さんは尋ねてきた。

「いや、いや。また今度ゆっくり時間がある時にでも……」

僕は聞きたい事があったのだが、すぐに内藤さんが戻ってくると思い、この場で質問する事を諦めた。

「そう？何だか気になるな」

「いずれまた……ね」

と言ったものの、それから十五分も内藤さんは戻って来なかった。さすがに変だと思った僕は、塚山さんに留守番をお願いして、会議室へ向かった。

そして僕は驚愕の光景を見た。会議室内で、内藤さんは流血して倒れていたのだ。それも半尻を出したままで……

21話

倒れている内藤さんの様子は、テレビドラマで見る殺人現場のようだった。彼は意識を失っており、呼び掛けても反応はなかった。室内には血生臭い匂いと、（イカ臭い匂いと言えば大概の人はピンとくるのだろうか）精液の匂いが強烈に漂っていた。そして、あまり見たいものではないが、内藤さんの尻というか肛門の辺りにはその匂い通り、血と白濁した液体がこびり付いていた。また顔面は張り手でもくらったような形跡があり、頬が腫れ、唇から出血していた。

僕はとりあえず彼を揺り起こそうと、両肩を掴んだ。

「内藤さん！内藤さん！」

僕は彼に呼び掛け、その身体を揺さぶった。

「う……あ……」

朦朧としながらも、彼の目が薄く開いた。そして確かに僕の姿を認識したようで、

「や、やられ…… たつす……。二、二十三回……。あ、悪魔だ……」
と言に残すと、再び意識を失ってしまった。

二十三回という数字が出てきた以上、この状況は盛永によって内藤さんの純潔（この場合は純尻か？）が奪われたと考えるのが筋だろう。

いずれにしてもまずは内藤さんの身体が心配だ。僕は彼の下半身にずり落ちたズボンを履かせると、その身体を背中におぶって一度部屋へ向かった。

「まあ、潮田さん！どうしたんですか？」

部屋に入ると、塚山さんが驚いて尋ねてきた。

「説明は後でします。俺、とりあえず内藤さんをタクシーに乗せて、病院へ行きますから」

「待って！私も行きます」

塚山さんはそう言うのと、素早く後片付けを始めた。来ると言われれば拒む訳にもいかなないので、僕も自分の荷物を準備したりして彼女を待った。程なく二人共帰り支度が出来たので、僕達はタクシーを拾い、乗り込んだ。

ここで迷ったのが、どんな病院へ行けば良いかだ。肛門科のような気もしたが、それ以外の肉体的損傷もあるようなので、一概には判断出来ない。ひょっとして警察の方が良いようにも思えたが、これが本当にレイプ事件だった場合、内藤さんのプライバシーの問題（要は男に犯された事実を隠したいかもしれない事）もあるので、僕の一存では決められなかった。やはり病院の方が妥当な気がしたので、とりあえず市営の総合病院の外來に行く事にした。

病院外來に着くと、僕は発見時の状況を簡単に説明し、内藤さんを預けてきた。知り合いだと言うと面倒な事になりそうなので、偶然見つけたと話を作り、連絡先だけ教えて逃げるように病院を去った。

「大丈夫でした？一体、何があったんですか？」

入り口の前で待っていてくれた塚山さんは、心配そうな顔をしていた。

「付き合ってもらっちゃってすみません。え〜っと、いろいろと説明したいんだけど、こんな所で話すのも何なんで……。塚山さん、良かったらこの後夕飯でもどう？」

「えっ？いいですよ」

「じゃあ行こうか。一杯飲みながら、ゆっくり話しますよ」

僕達は再びタクシーを拾い、駅前へ向かった。そして十分程車に揺られた後、駅前で降りて、イタリア風の居酒屋に入った。

「一体、何があったんですか？そろそろ教えて下さい。私、気になつて……」

塚山さんは座るやいなや、酒も注文しない内に質問してきた。

「まあ慌てないで。注文くらいしない？ちよっぴり言いにくいところもあるので、一杯飲ませて下さいよ」

さすがに僕も女の子相手に酔わずに男色レイプ事件を語るのは気が引けた。

「わかりましたよ。じゃあ早く頼みましょう」

ちよつとむくれた顔をしながら、塚山さんは呼び出しボタンを押す。すぐに店員が来たので、僕はビールとシーザーサラダ、魚介類のパスタ、ピザなどを注文した。

飲料が来るまでの間、僕は会議室内を最初に見た時の様子を話した。内藤さんが流血して、意識を失って倒れていた事を強調し、半尻や精液については黙っていた。しかし、彼女とてバカじゃない。

「それって盛永さんに何かやられたって事ですか？」

と推理してきた。

「それは……」

（このままでは本題に入ってしまう）と困っていたところ、ビールがやってきた。

「まず乾杯しよう。話はそれからで」

「じゃ乾杯！」

彼女はテーブルに置かれたジョッキを無造作に掴むと、僕が手に取らない内に杯を合わせた。

「それで？どうなんですか？」

「せっかちななあ。まあいいか。俺も飲んでしまえば気にせず話すよ」

と言つて、僕はジョッキの半分くらいを一気に飲み干した。

「そう。塚山さんの言うとおり、盛永に襲われた可能性が高いんだよ」

「やっぱり！そんな気がしてました。部屋に戻ってきた時の盛永さんの様子、どこか変でしたから」

「そうだったね。凄く慌ただしい仕草を見せてたもんな」

「で、潮田さんは何をもって盛永さんが犯人だと判断したんですか？」

塚山さんの目は興味津々で僕の顔を見ていた。まるで何となくは

真実をわかっていて、あえて僕の口から言わせたいような感じだった。

「聞きたいんですか？内藤さんのプライバシーもあるからなあ……」
僕は男として、内藤さんの名誉の為にも詳しく話すべきかどうか迷っていた。もちろん、女の子にこんな話をして良いかも含めてだ。
「そんな！私も関係者じゃないですか！病院へも付いて行っただし」
「確かに。一理あるね」

僕は少し納得させられた。一緒に病院まで行きながら、事情も説明してやらないのはかわいそうな気もする。僕が逆の立場だったら、知りたくてたまらないだろう。

「わかった。話しますよ。推測は言わないので、自分の頭で判断して下さいね」

「わかりました」

「あと、絶対人に言わないように！」

「はい」

段々酔ってきたのか、塚山さんが陽気になっている気がした。

「俺が会議室に入った時、内藤さんのズボンが脱げていて、お尻が半分出ていたんだよ」

「ぶっ……」

予想以上の内容だったのか、彼女は飲んでいたビールを吹き出した。

「そして、尻の穴から出血して、周りには体液のようなものが付着してて……。なんか俺、凄く恥ずかしい事言っただけ？」

話して僕に僕は照れ臭くなってきた。

「いえ……。うふふ」

否定しながらも彼女は薄笑いを浮かべていた。

「笑ってるじゃないか！真面目に話してるんだよ、こっちは」

「ごめんなさい。でも、こんな話、聞いた事なくて、どんな顔をして聞いていいかわからないんですよ」

「そう言われるとうしろもうもないな」

確かに言う方も言う方だが、聞く方も難しい話ではある。

「気にせず続きを聞かせて下さいよ。真面目に聞きますから」

「まいったな。どうも塚山さんと話していると、そっちのペースになつてしまつんだよな」

「いいから続き！」

「はいはい。あとはね、顔に殴られたような跡があつてね。そして俺に『やられた……』って言い残して、また倒れたんだ」

二十三発の事は言わなかったが、僕は大体見たままの真実を述べた。

「それってほぼ間違いなく盛永さんにやられたって事じゃないですか！」

「証拠はない。体液とか調べればわかるだろうけど、内藤さんの名誉もあるから、勝手に俺達が告発したりも出来ないだろうね」

「そんな。ひどいですよ、それじゃ」

「とりあえず内藤さんが意識を取り戻してどういう判断を下すか、それを待つしかないよ」

「ひどい……。本当に上つてロクな人がいないんですね。盛永さんも、与田も……」

「与田？」

急に話と関係のない名前が出て、僕は反応した。

「だ、だって、潮田さんにあんなにひどい真似をしていたじゃないですか！」

「それはそうだけど……。でも今、塚山さん、何か違う事を考えて与田の名前を出したんじゃない？」

僕は、かねてからの疑問を解決するのはここしかないと思った。実は今日、彼女と飲みたかったのもこつちが本当の理由だった。

「塚山さん、実は与田と何かあつて、それを隠しているんじゃない？」

「わ、私と与田さんが……。どうしてそんな事を？」

「確証はないけど、塚山さんが来てから与田はおかしくなった。そ

れに前にも聞いたけど、朝、一度言い争っていたよね？俺の勘違いかも知れないけど、与田が変になった原因に何か関係あるんじゃないかと思っていたんだ」

これが僕がずっと気に掛かっていた事だ。与田があんな風になっ
てしまった事と、彼女がA町に来た事は無関係とは思えなかった。
しばらく彼女は無言で俯いていた。僕も黙ってそれを見ていた。

「関係ないって言っても、信じてもらえそうにないですね……」
ようやく口を開いた彼女の言葉がそれだった。その顔は真面目な
表情に変わっていた。

「そんな、信じないなんて事はないですよ」

「でも、潮田さん、完全に私の事疑ってますよね」

「それは……」

僕は言葉に窮した。いつの間にか攻守が逆転してしまったような
感じだ。しかし、彼女にそういう意図はなかったらしく、

「やっぱり潮田さん、さすがです。わかってたんですね……」

と観念したような口振りを示した。僕は若干試すようなつもりで
聞いたのだが、こんな効果が出るとは思わなかった。そして彼女は
語り始めた。

「私、与田さんに脅されていたんです。朝、言い争っていたのも、
その事だったんです。『秘密をバラされたくなければ、俺と付き合
え』と……」

「そうだったんだ……」

与田に交際を迫られていたというのは、万更嘘でもなかったのだ。
秘密とは、おそらく課長との事なのだろうが。

「『秘密』が何なのか、気になりますよね？」

「いや。言いたくないような事なら無理には聞かないよ」

知ってはいるものの、彼女の口からそれを聞くのは何となく嫌だ
った。しかし、

「私、実は本店の課長と付き合っていたんです」
彼女はすぐに自ら告白した。

「えっ！」

僕は驚いた。もちろん、話の内容ではなく、彼女があっさりと告白したからだ。

「驚いたでしょ？それがあの旅行の時に与田さんにバレてしまつて……」

これで、大体の事情がわかつてきた。旅行の時、僕がこっそりと押し入れを出て行つた後、与田は二人が寝ている姿を見つけたのだ。そういえばあの朝、僕は風呂に入った後、与田とすれ違い、挨拶をした気がする。

考えてみると、僕が押し入れに留まっていれば、部屋の鍵は開かなかったのだから、彼女が与田に脅迫される事もなかったのかもしれない。当然、彼女達の自業自得ではあるが、責任の一端を感じなくもない。

「一つ聞いていいかな？いや、こんな事を聞いていいかどうか……」僕は以前から疑問に思っていた事を聞きたかったが、一瞬躊躇した。だが、

「いいですよ。今更、隠す事もないですから」

と彼女は簡単に質問を容認した。

「じゃあ聞くけど……、どうして課長と付き合っているながら、俺の事を好きだなんて言つたの？酔っていたから？」

「それは……。私、潮田さんをいいと思ったのは嘘じゃないです！」

「でも、課長と……」

「確かに付き合つてはいたけど、私、別れたかつたんです。やつぱり五十代と世間的に認められない関係を続けるのは辛くて……。勝手だけど、もし潮田さんが付き合ってくれば、すぐに別れるつもりでした」

「そうか……」

確かに勝手だとは思つが、彼女は彼女なりに辛かつたのだらうと推察出来た。僕が相談に乗るくらいしてあげれば、もっと彼女もラクな気持ちになれたのかもしれない。もっとも僕は彼女と課長との

事を知ってしまったていたし、当時は自分の事で精一杯だったので、結局はどうにも出来なかっただろう。

「ごめんなさい。課長と別れた後ならともかく、そんな状態で告白したりして最低でした。脅迫はされているし、私、もう気が気でなくしておかしくなっていたんです」

「わかるよ。俺も辛さを理解してあげられなくて悪かったよ。ちょうど盛永や与田にやられまくっていて、そこまで気持ちの余裕がなかったなあ」

「潮田さん、優しいんですね。悪いのは私の方なのに……」

塚山さんは泣いているようだった。僕は彼女の頭を撫でてなだめた。それで落ち着いたのか、彼女は再び口を開いた。

「与田さんが体調崩したのは、私が彼の分のお茶やコーヒーに細工をしたからです……」

「細工というのは？」

何となく想像はつくものの、僕はあえて聞いた。

「例えば与田さんが居眠りした時は睡眠薬入りのお茶を出したり、お腹の調子を崩した時は下剤を混ぜたりしました」

「なるほど……」

僕は感心した。最初から与田を追い落とす為の用意周到な策略が練られていたのだ。課長の件といい、本当に度胸があつて奔放な女性だと、改めて実感した。

「でも、三日目以降は何もしてないんですよ。人間の思い込みって恐ろしいもので、与田さん自身が『職場に来ると何かが起こる』って思い込んだんじゃないかな。それから自分で勝手に具合が悪くなっているようでしたから」

それを聞いて、僕は女の恐ろしさを目の当たりにした気がした。

これは偏見かもしれないが、どちらかと言うと男よりは女の方が残酷だと思う。犯罪においても、とんでもない事をしでかすのは女性の方が多い気がするし、潜在的に性的嗜好が激しいのも女性のよくな気がする。塚山さんの言葉を聞いていて、そういった女の恐ろ

しさを感じ、僕はゾツとした。と同時に、その魔女的な残忍さに魅力を感じてしまう自分もいて、不思議な気分だった。

話し終えた彼女は、気が張っていたのか、僕の胸に顔を埋めて再び泣き崩れた。こんな姿を見せられると、僕はまた彼女の事が愛しくなってきた、いつの間にか強く抱き締めていた。そしてキス。少し酒臭かったが、甘くとろけるような感覚がした。こうなると理性はそっちのけでもう止まらない。店を出ると、どちらから誘うともなく、僕等はホテル街へ足を進めた。

22話

部屋に入り、僕達はいきなり抱き合った。興奮のままに彼女の身体をベッドに押し倒し、野獣のように襲い掛かったが、

「ちよつと待つて！シャワーくらい浴びましようよ」

と言われ、僕は手を止めた。何とも間の抜けたストップで、待ったの制裁金十万円でも貰いたくなる気分だ。

先に塚山さんがバスルームへ行った。僕はベッドの上で待たされ、酔いの回った頭で、ベッドを映す鏡をじつと見つめた。鏡の中には多少自信なさげな顔の男がいた。

後で思えばこの時間が運命の分かれ道だった。僕はこの待つている時間にいろいろと考え込んでしまった。何よりまず浮かんだのは塚山さんを抱く課長の姿だ。僕が彼女の事を考える時、必ず付随してくるイメージが課長だった。

課長を思い出すと、僕は塚山さんを抱く自信が揺らいでくる。今晩こんな状況になる事は想定していなかったし、正直言うと酔いと勢いに任せたまま電車で寄り切ってしまったかった。先程ならば無我夢中で、邪念もなく、彼女と床を共に出来たのではないかと思う。しかし時間の余裕を与えられてしまうと、どうしてもあの時の事が頭に浮かび、課長と自分を比較してしまう。高校時代、取り組み前にいろいろと考えれば考える程、実際の一番でうまくいかなかった事が思い出される。

僕は性行為中の相手の反応がどうしても気になる性分だ。よく言う「イク」「イかない」にしても、男としては女を「イかせる」事に喜びを感じるものだと思う。逆に女が「イかない」場合、自分の技量不足なのではないかと疑心暗鬼に陥ったりもする。「女はそんな事は気にしない」と、昔の彼女に言われた事もあるが、どうしてもその意識を拭えずにいた。

そんな観点で見ると、確かに課長は塚山さんを「イかせて」いた。

僕の目の前で、課長は塚山さんを快樂の虜にしていたのだ。これが僕にとってプレッシャーだった。あの様子を見せられているだけにあれ以上、いや少なくともあれと同等に彼女を満足させられるかどうか心配なのだ。いや、そんな気持ちになっただけに、自分がうまくやれるかどうかの不安も一杯なのだ。そんな気分の中、

「お待たせ」

バスローブに身を包み、塚山さんが戻って来た。その頬は上気して、赤く染まっている。

「それ、似合うね」

僕はそんな彼女に魅力を感じた。身体は自然と反応し、再び気分が高揚してきた。

「俺もシャワー浴びてくるよ」

僕はバスルームに入り、熱めのお湯を頭から被った。気持ちが良くて、酔いが醒めていく気がした。先程の塚山さんの姿に欲情したのか、下半身は屹立したままだ。何度経験しても、こんなものが女性の身体に入る事に神秘を感じ、興奮してしまう。僕は念入りに身体を、特に突出したその部分を洗い、バスルームを出た。

身体を拭くと、僕もバスローブを着て、ベッドに戻った。待っていた塚山さんは、両手をベッドについて、足を横に投げ出すような姿勢をしており、普段とは違い艶かしく見える。先程までの心配が杞憂であつたかのように、僕の下半身も元気を保っていた。もう我慢する必要はあるまい。

「塚山さん！」

と呼ぶと、僕は彼女に飛び掛った。

「きゃっ」

と叫びが揚がったが、それを無視して密着する。そして唇を合わせ、バスローブを脱がし、胸に触れた。僕は興奮して夢中になって彼女の身体を貪った。そして触れて、揉んで、つまんで、舐めて、吸って、かじって、あらん限りの経験と知恵を振り絞り、彼女を愛撫したつもりだった。相撲で言えば、知っている全ての技を駆使し

て攻めたようなものだ。

しかし僕は違和感を覚えていた。彼女の声は押し殺したような感じで、課長の時とは違い、忘我の叫びが揚がらない。さらに乳首が立たず、秘部の濡れ具合も今ひとつのように思われた。

とはいえ、こんなのは全て僕の考え過ぎなのかもしれない。だが、そう考えれば考える程、頭を支配するのは課長のいやらしい表情だった。「遊びが足りない」と説教でも受けている気分が僕を捕らえ、今まさに合体しようとしている僕側の結合部を不完全な状態に留めてしまう。

「どう……したんですか？」

塚山さんが僕の下半身の異変に気付いた。それを見て衝撃を受けたのか、目は大きく見開かれていた。

「ごめん……。どうも調子悪いみたいだ」

恥ずかしいが僕は言い訳した。しかし、次の瞬間、僕は

「あっ」

と叫んでいた。塚山さんが僕の役立たずな部分に唇を寄せたのだ。そして、それを口の中に含み、吸い付いた。気持ちが悪くて思わず声が出る。

「うつつ」

唾液を吸る音、しゃぶり付く音が室内に響き、本来なら興奮が最高潮に達するシチュエーションの筈だ。しかし僕はその音を聞くと、逆に自分が萎えていくのを感じた。この音こそ、まさに押し入れて耳にした音だ。塚山さんの裸体や行為を目にして耳にすればする程、その終着点には必ず課長が待ち構えているのだった。結局、塚山さんの魅力以上に、課長のテクニクの方が印象的だったとしか言いようがない。今や五感が捉えるもの全ては課長に直結するのだ。これが塚山さんではない女性ならば、僕も普通に出来たのかも知れない。しかし以前の懸念通り、「塚山さん」課長」という図式は拭い去る事が出来なかった。

「ごめん……なさい。私に魅力がないから……」

しまいには彼女から謝ってきた。

「そんな。俺がだらしないんだよ。本当に申し訳ない」

「いえ。潮田さんは悪くないです。こんな私に付き合ってくれてありがとうございます」

「そんな礼なんて……。俺、情けなくて、恥ずかしいよ」

僕は彼女に顔向け出来ない気分で、目を逸らしながら言った。

「本当にごめん」

「せめて……こうして一緒に寝ませんか？」

塚山さんは柔らかな裸体をピツタリとくっつけてきた。僕も異存はなく、その身体を抱き寄せて一緒に横になった。驚いた事に、五分も経たない内に彼女は早くも寝息を立てていた。いろいろとあったので疲れたのだろうか。凄く図太い神経だ。

だが、僕は眠れなかった。今日の事は下手をすると、男として今後に影響するような決定的なミスだった。自分から自信が失われるようで、ショックだった。男がインポになるのはこういう事が原因なのかもしれない。

なかなか眠れない。疲れてはいるので意識は朦朧としてくるが、神経は過敏なまでに高ぶっていた。隣でスヤスヤと眠っている塚山さんが恨めしくも思える。僕は知り合ってから、彼女に振り回されつ放した。最初は確かに好感を抱いたが、すぐに課長との行為を目撃し衝撃を受けた。その後、若手の飲み会で告白され苦悩もし、こんな結末を迎えてしまった。男性として致命的なダメージを与えられた可能性もあり、疫病神のようにも思える。悔しいやら、情けなしいやら、とても落ち着いて眠れそうにない。

だが、僕も疲れてはいた。だから、すっきりとは眠れないが、横になっている内に何度か意識が飛ぶような感じになってきた。覚めている時は今日の事が脳裏に浮かんで嫌な気分になるのだが、瞬間的に気を失い、変な夢を見てはまた目が覚める状態を何度も繰り返した。

気が付くと、僕はまわしを締めて、土俵の上にいた。そして、目の前には課長がいて、同じ格好で僕と対峙している。行司の掛け声と共に僕達はぶつかり合った。しかし相撲には自信がある筈の僕が、課長の責めに一方的にやられ、手も足も出ない。しまいには上手投げで豪快に投げ飛ばされてしまった。

「課長の勝ちいゝ！」

と声高らかに行司が言っていると、課長に抱きつく。大の字になった僕が見上げると、何と行司は塚山さんで、あろう事か土俵の上で抱き合い始めた。僕はその行為を止めようと、起き上がるうとするが、投げられたダメージが大きいのか、それとも敗北による精神的ダメージが深いのか、金縛りにでも遭ったように動けない。二人の行為はエスカレートして、ついには塚山さんが全裸になっていた。そして感じるままに大きな声を揚げている。神聖なる土俵上で何たる行為か。

「やめろっ！」

と叫んで僕は目を覚ました。当たり前だが夢だった。凄く嫌な光景を見せられて、僕は全身汗びっしょりになっていた。

気が付くと、隣にいた筈の塚山さんの姿は消えていた。早朝五時、僕は虚しい気分で一人始発に乗って帰宅した。

23話

僕は眠い目を擦って出勤したが、この日から塚山さんは職場に来なくなり、姿を消した。僕のベッドでの不手際が原因とは考えたくないが、課長との交際、与田の一件などもあり、相当思い悩んでいたのだろう。家にも不在、携帯電話に連絡しても見たが、「この番号は使われておりません」のアナウンスが流れ、全くその足取りは掴めなかった。とりあえずは会社に任せて、静観する他なさそうだ。そして、僕にとっては再び新たな地獄がやってきた。信じられない事だが、塚山さんの離脱により、部屋は盛永王と僕の二人体制になってしまったのだ。これでは内藤さんの件で奴を追及するのも難しい。内藤さん本人の証言等で立件されなければ、警察沙汰にするのも困難だろう。まして、部屋の中で二人きりなのに、

「お前がやつたんだろう！」

などと言ったところで、奴にとっては痛くも痒くもないだろう。下手をすると、逆ギレされるのがオチだ。

それどころか僕にとっては痛い所だらけだった。二人で部屋にいるだけでも息苦しいというのに、さらに八つ当たり気味・イジメ気味になじってくるので、本当にやりきれない。

「何だ、まだ終わらないのか」

「こんなに飲み込みが悪いとはなあ……」

「私語ばかりしてるからだ。部屋に人間がいた時、あんたからの私語が90%以上だった」

ネチネチとしつこく言ってくるので、張り手の一つでも食らわしてやりたくなった。今ならば誰にも気付かれずに仕返し出来なくもないので、何度雑念が頭をよぎった事か。結局、僕には何も出来なかったけれど……

だから奴がトイレに立った時が唯一、安らぐ瞬間だった。カップラーメンではないが、3分間は自由になれるので、この隙に僕はリ

フレッシュした。とはいえ何という事はない、深呼吸したり、口笛吹いたりする程度だ。しかし、奴がいないだけで、清々しい気分になるのは間違いなかった。

この状態に一日耐えるだけでも相当な精神力を消耗する。三日目くらいから、身体が拒否反応を示しているのか、何度もトイレに行きたくなってきた。僕がトイレに立つ度、

「またか？」

と言う声が聞こえたが、それを聞くだけで更に尿意が増してくるようになった。僕は居ても立ってもいられず毎回トイレに駆け込むのだった。

こんな状態が続き、自分がおかしくなってしまうのではないかとさえ思えてきた。与田が薬を盛られたとはいえ、精神的に不安定になっただけなのかわかる気がする。塚山さんが

「人間の思い込みとはおそろしいものだ」

と言っていたが、本当に人間の精神とは脆いもので、一度弱気に陥ってしまうと、どんどん下まで落ち込んでしまう事もあり得るのが、身に染みてわかった。今の僕がまさにそうで、全く良い兆しが見えない為、嫌な事ばかり考え続けて、自分で自分を追い込んでいくようだった。僕の脳裏に『休場』の二文字がちらついていた。

24話

盛永王と二人で過ごして十日間、今日も僕は嫌な気分で部屋のドアを開けた。すると、

「やあ」

と中から声が掛かった。ここはA町支店だというのに、目の前には同期で本店勤務の生河君が立っていた。

「どうしたんだい？こんな所へ」

盛永がまだ来ていなかったたので、僕は平気で「こんな所」と言った。

「そっちが壊滅状態だと言うから、助っ人に来たんだよ」

「本当かい？いつまで？」

「課長には仕事が落ち着くまでしばらくって言われたけど」

「やった！助かったっ」

僕は飛び跳ねて喜んだ。

「俺、本当に苦しかったんだぜ。盛永のクソジジイと二人きりで、精神がおかしくなりそうだったからなあ」

「大変だったみたいだね。俺で役に立つかわからないけど、何とかやっていこう」

「いや、ありがたい。本当に嬉しいよ」

僕の気分は一気に切り替わった。このままだと休場寸前だったが、生河君の出現で救われた。

「おはよう」

程なく盛永王が姿を現した。

「おう。生河君、来たか。今日からよろしくな」

「よろしく願います。少しでも役に立てるよう精一杯頑張ります」

生河君は相変わらずお世辞がうまい。その為か、
「よろしく頼むよ」

などと言つ盛永も機嫌が良さそうだった。

業務が始まった。三人になった為、比較的業務も軽減化され、ラクになった。しかも、さすがに生河君は出来がいい。かなりのペー
スでたまった仕事を処理してくれるので、盛永も一日中上機嫌だった。僕も

「さすがに生河君は誰かとは違うな」

という嫌味を聞かされる程度で済み、この十日間よりははるかにやりやすかった。

「いや、助かったよ。本当に生河君、来てくれただけで全然違うよ」

王のトイレ時間、僕は嬉々として、彼に言った。

「そうかい。しかし潮田君は大変だったんだね。あの盛永さんはうまくやるの大変だわ」

「わかるかい？」

「ああ。典型的な年功序列・ワンマンタイプだね。あれはご機嫌取るのが大変だよ。ちよつとでも気分損ねると、目を付けられそうだしね」

「まさに俺は目を付けられたんだよ」

「俺も協力するからさ、何とか乗り切つていこうぜ」

と生河君が言ってくれて、僕は嬉しかった。

そして彼のお陰で、僕は精神的にも上昇してきた。何せ、彼が嫌味等もうまく受け流してくれるので、精神的負担がかなり減った。生河君が潤滑油というかクッションのような存在になってくれたので、僕への直接攻撃が格段に減少したのだった。

こうなつてくると、反撃気分すら芽生えてくる。何とかして今までやられた分をやり返してやろうという気持ちになつてきた。

そして、早くもそのチャンスは来た。僕はある日の夕方、盛永に再び課の飲み会の幹事について言われた。

「おい、潮田君。幹事の件どうなっているのかね？また本店から

催促されたぞ」

「まだ……何も手を付けてないですが」

僕は正直に答えた。実際、与田に無理矢理押しつけられただけで、一切取り掛かっていなかったのだ。

「それじゃ困るんだよ。どうせ宿の手配もしてないんだろ？」

「宿……ってまた泊まりなんですか？」

僕は驚いた。この前、泊まり飲みに行ったばかりなのに、また同じような事をやるとは。世の中が不景気だなんていう割には、この会社はそれと逆行した流れを見せている。

「ウチの会社……というか課は春夏秋冬、四回飲み旅行するんだ。聞いてなかったのか？」

「そうですね。そういえば最初に聞きました」

僕が「聞いてないですよ！」と言い返そうとしたところ、生河君が口を挟んだ。これはいいタイミングだった。僕が言い返せば、また厄介な事になっただろう。

「そう……でしたね」

僕もせっかくの彼の好意にうまく合わせた。

「早く手配します」

「あんたの思うように企画していいんだから、とにかく早くやってくれよ」

盛永はそれだけ言うと、その日は帰って行った。

僕は盛永の言った「思うように企画していい」という言葉にピンと来た。奴に鉄槌を下すならこの時しかない。何かを「企画」して、盛永のクソジジに一泡吹かしてやろうと、本気で考えた。それこそこの晩は寝ずに熟慮した。そして、薄明るくなってきた午前四時半、ついにあるプランが頭に浮かんだ。

そして翌日、僕は飲み会の企画を盛永王に見せた。

「なかなか面白いじゃないか」

と奴も認めてくれ、本店にプランを通してくれた。

その企画は「経理課大相撲大会」。特に「元インターハイ力士・

潮田に勝つたら賞金十万円！」という触れ込みは盛永にもウケたし、旅行でデモンストレーションを見せた事もあって本店でも好評だったようだ。お陰で幹事の僕の元には次々と相撲大会への素人力士の参加表明が集まり、ついには飲み旅行当日、トーナメントが開催される事になった。負けず嫌いの盛永は

「あんたを倒して賞金もらうぞ」

と意地悪げに言い、僕の思惑通り乗ってきた。僕が土俵で、この上ない復讐劇を考えている事も気付かずに……

結局、大会には十六名が参加を表明した。十万円の賞金首となった僕は、第一シードに座り、幹事権限で「厳正な抽選の結果」と嘘を吐いて、盛永を第二シードに配置した。奴に大恥をかかせてやるのは決勝の舞台こそ相応しいと思ったからだ。

そんな間に内藤さんは意識を取り戻していたのだが、やはり何をされたのか、警察に話す気はないとの事だった。僕は彼の見舞いに行った時にこう告げた。

「俺が絶対仇を取って、奴を痛い目に遭わせますよ」

25話

そして生河君と共に働いてから、二週間が経ち、ついに運命の日を迎えた。生河君のお陰で、僕の状態はすこぶる安定してきていた。家で毎晩、シコを踏み、体調も万全、久々の真剣勝負とあって、心が沸き上がるようだった。

今回の宿泊場所は、以前、相撲部の合宿でお世話になった民宿で、練習用に立派な土俵が備え付けられていた。飲んだらまともな相撲にならないので、僕は宴会前のイベントとして、大会を設定した。「それでは皆様、これより経理課大相撲トーナメントを開始します。私、潮田を倒した方には賞金十万円を差し上げますので、頑張ってください！」

幹事として開会の挨拶をすると、土俵の周りに集まった経理課職員全員から歓声が揚がった。皆の期待が感じられて、幹事としては嬉しい限りだ。

僕は第一試合に出場する為、上半身裸になった。久しぶりにまわしをすると、下半身も引き締まり、気合いが漲ってくる。

初戦の相手は前回の旅行でも対戦した本店の出納係長。十万円目当てだけではなく、前回のリベンジのつもりか、目がギラついていた。

「潮田君、この前の借りは返すぞ」

とわざわざ皆の前で宣言する程だ。僕のせいで下半身まで露出させられたのだから当たり前か。こういう相手はあなどると危険だ。

「はっけよい、残った！」

僕は立ち合いで相手の胸に思い切りぶちかました。今日は酔っていないので自分でも驚くほど身体が動く。気合を入れてきたであろう出納係長だが、所詮敵ではなく、僕はバランスを崩した相手をそのまま寄り切った。

「勝者、潮田丸！」

僕は一回戦を突破した。

その後もまわしが似合わない力士が次々に出てきて、熱戦・珍戦を繰り広げた。そして一回戦最後の第八試合、第二シードの盛永王が登場した。シコ名も自ら『盛永王』と申請してきて、余程A町支店の王の座にこだわりのあるようだ。ただ、その身体付きは、程良く腹も出てまわしがフィットし、参加者の中で最も力士らしかった。見た目もなかなか強そう、僕を倒すと豪語するだけの事はあると思う。そしてその実力は本物だった。

奴は立ち合いでぶつかった後、素早く相手のまわしを掴むと、豪快な上手投げで土俵に投げ捨てた。勝ち名乗りを受けながら、誇らしげに腹をポンポンと叩く仕草が憎らしく、間違いなく強敵だ。

小休憩の後、二回戦が開始された。僕の相手は、あの江崎さんだ。チラツと見たが、一回戦は苦戦しながらも、逆転のうっちゃりで勝利していた。彼の後方に、応援している守田さんの姿が見える。何だか悔しくて、絶対に勝つてやろうという気になってきた。

塩を撒き、シコを踏み、僕達は睨み合う。十万円が欲しいのか、守田さんが欲しいのか、よくわからないが、江崎さんは先程の出納係長に負けず劣らず鋭い視線だ。

「はっけよい！」

なんと立ち合いで、江崎さんは予想外の左への変化を見せた。僕はバランスを崩してしまい、絶体絶命。このまま十万円も、守田さんも奪われてしまうのか……。

江崎さんが突進してくる。ここではたき込まれたりしたら、僕も一巻の終わりだったかもしれない。しかし幸運にも江崎さんはそうせずに、突っ張って押してきた。

「ふんっ！」

僕はギリギリまで押されたものの、踏ん張って、土俵際で押し留まった。こうなればそう簡単に押し切られはしない。

僕は胸を合わせると、素早く相手のまわしを掴み、一気に土俵中

央まで押し戻した。そして、しばらく硬着状態が続いたが、

「ふう……」

僕は江崎さんが一息吐いたのを見逃さなかった。この一瞬、握力90強の握りでまわしを揺さぶり、下手出し投げで相手を土俵に転がした。

予想外の強敵だった。金と女が賭かると、人はここまで強くなるのかと思い知らされた。

僕は土俵上から、守田さんの顔を見た。僕の勝利に拍手を送ってくれているようで、少し嬉しくなった。一緒にワインの一杯でも飲みたいくらいだ。全て僕の妄想なのだろうが、この一番のモチベーションになったのは間違いない。

この後二回戦も次々と消化されていき、盛永王も順当に勝利していた。

26話

そして準決勝、僕の相手は本店の課長、例の塚山さんの不倫相手だ。僕は少しばかり緊張していた。相撲ではないが、この人の夜のテクニクを見せられ、僕は自信喪失している。いや、それどころか、夢の中では一度敗れている。こんな風に、精神的に優位に立っている勝負は厄介だ。

僕が相撲をやってきて、唯一の弱みが精神面だった。大一番になると、「負けたらどうしよう……」という弱気が頭に浮かんできて、結局勝てない事が多かった。この勝負、そんな事を思い出してしまい、嫌な予感がした。しかし時間は待つてくれない。僕は覚悟して土俵に上がった。

そして立ち合い、課長はまともにぶつかってきた。これなら負けるような僕ではない。そう思っていた。しかし、課長は本物のテクニシャンだった。

「あははははっ」

僕は思わず笑い声を揚げた。課長は見えない死角から微妙な指使いをして、腋の下をくすぐってきたのだ。

僕の力が抜けたところを、課長が突っ張ってくる。何たる姑息な人だ。いや、バレないように触るあたり、凄い技術を持っていると言った方が正しいかもしれない。卑怯だがうまいのだ。さらに

「新人君、遊びが足りないんじゃないか？」

課長は組み合ってきながらボソツと呟くと、まわしを取る振りをしつつ、しきりに僕の下半身を撫で回すような手付きを示した。

「あうっ」

僕の口から思わず声が漏れる。何と真剣勝負の最中、課長は僕の下半身へ愛撫にも等しい触り方をしてきていた。まわしで見えないのが幸いだ、こんな時、こんな相手にもかかわらず、僕の下半身は反応していた。それだけ課長のテクニクは素晴らしい。これこ

そが塚山さんを始めとして対戦相手を快樂の虜にし、骨抜きになったところで倒す彼の殺法のようなだ。

しかしこれは相撲だ。仮にも『新潟の千代の富士』が相撲のテクニクで負ける訳にはいかない。僕も勃起はしたが、精神まで快樂には囚われなかった。それは何故か。

僕が相撲においては真剣そのものだという事もあるだろうが、やはり生で一度見ていた事が大きかったと思う。達人たる者、一度敗れるような事があっても、二度同じ手は食らわないものだ。僕が達人か否かはどうでも良いとして、一度現実にテクニクを目の当たりにした上、イメージの世界でも敗北を喫していた為、課長の技に免疫が出来ていたものと思われる。その証拠に、勃起もすぐに治まった。

いや、勃起に関してはまた別の理由が考えられる。この状況においてのみ都合な事に、課長の姿が出てくると僕の下半身は萎縮してしまうのだ。それは塚山さんの裸体を相手に実証済みだ。さらに僕にはその時の恨みもあり、快樂どころではなかった。この時点で課長は勝負に勝って相撲に負けていたのだ。

正気を保った僕は姑息な動きを見せる課長の腕を払い、自分の腕を絡めると、小手投げで土俵に叩きつけた。

「バカな……。俺より……。遊んでいたというのか……」

何を勘違いしているのか、訳の分からないセリフを残して、変態力士は土俵に沈んだ。

これで決勝進出を決めた僕は、次の一番を土俵下から見守った。予想どおり、盛永王は勝った。

休憩の後、ついに千秋楽結びの一番とも言うべき決勝戦を迎えた。僕は盛永王に先んじて、土俵に上がった。そして胡坐からゆっくりと立ち上がろうとする奴を睨み付ける。その時、

「ちよつと待ったあ！」

土俵外から野太い声が揚がった。僕だけでなく観衆までもが皆、

声のした方角を見た。地響きでもしそうな重量感のある足取りで土俵へ向かって来たのは……

27話

「与田！」

体調を崩して職場を去って行つたオカマ野郎だった。たるみきつた上半身に、まわしを締めた姿で土俵に向かつてくる与田を見て、観衆がざわめく。

「潮田あ！調子に乗ってんじゃないぞ！盛永さんの前に、俺がお前をぶっ倒してやる」

奴は盛永王を制して土俵に上がった。

「お言葉ですが、参加を申し込んでないのに今更土俵に上がられても……」

僕はしらけた表情で言つた。調子に乗っているのはお前の方じゃないかとも思う。今頃のこのこと出て来て、いちゃもんを付けるなんて、どうしようもない奴だ。

「確かに申し込んでない。だが、お前仮にも『新潟の千代の富士』なんだよなあ？こんなデブの挑戦から逃げるのか？」

奴は腹を突き出すような格好で、僕を挑発する。

「お前に勝つたつて十万円なんていらねえ。ただ、盛永さんと戦いたかったら、その前に俺を倒してみろ」

「面白いぞ、やれ〜！」

「潮田〜っ、挑戦受ける！」

野次にも等しい声が次々に飛ぶ。観衆の大半は、僕と与田の一番を見たがっているようだ。こうなれば逃げる訳にはいかない。

「わかりました。やりますよ」

僕が返答すると、四方から歓声が揚がった。ある意味、復讐の前哨戦としてはもってこいかもしれない。僕はこの与田にも酷い目に遭つてきた。塚山さんの毒盛りでの離脱は、消化不良気味でもあったので、この場で鉄槌を下してやるのも悪くない。

大豚のような与田が僕の前で仕切っている。その巨体は、確かに

一端の力士のようだ。奴はまだロクに動いてもいないのに大汗を掻いていた。その様子は往年のハワイ力士を連想させ、格好だけなら強そうな巨漢力士に見えなくもない。だが、仕事ならいざ知らず、土俵でこんな奴に圧倒される僕ではない。僕は自信を持って、シコを踏み、塩を撒いた。奴も僕も互いを睨み、目を切らない。

ついに時間が来た。行司が仕切って僕達は立ち合った。

「おらっっ」

身体ごと与田がぶつかってきた。100kg超の重みがまともに突進してきたので、さすがの僕もぐらついた。与田は己れの身体を肉弾として何度も当たってくる。僕も何とかその瞬間にまわしを掴もうと試みるのだが、それなりに勢いがあるのと、奴の身体が異様に滑るので、うまくいかなかった。

（こいつ、油でも塗っているんじゃないか？）と思ったが、よく見るとそうではないようで、仕切りの時と同様、奴の身体からはとめどなく汗が流れ落ちていたのだった。

「どうだ？俺の汗は滑るだろう？」

与田は得意気な顔で言う。そういえば、以前に酔って絡まれた時、この男の身体はぬめっていた記憶がある。どうやら自分の身体の特性について、よく理解しているようだ。確かに奴の言うとおり、身体、そして汗の染み付いたまわしまでもが、ぬるぬるとして滑り、容易に組んだり掴まえたり出来ないのだ。仕方がないので、突っ張りや張り手を駆使して攻めようとするが、これも当たった後、つると奴の肌が滑り、下手をすると僕の方がバランスを崩しかねない。攻めようがなく、これは参った。

逆に奴は身体ごと当たってくる。攻め手を欠く僕は、それをかわすのに精一杯だった。ついには、

「潮田、だらしねえぞ！」

「逃げるな」

と、野次が飛び交い始めた。何も知らない奴等は勝手な事を言うと思ったが、確かに「自分を負かしたら十万円」などと大見栄切っ

ている以上、逃げ回る姿が無様に捉えられても無理はない。

僕は意を決して戦法を変更した。動き回り、相手の背後を取ろうとする。奴もそうはさせじと身体を捻り、動かす。僕は奴に接触する度に、ローキックでも放つように足を刈りにいく。そしてヒットアンドアウェイしながら、また動き回る。さすがに巨体は揺るがないうが、奴の汗の量が更に増し、息が荒くなり、足も青く腫れてきているのが見えた。

「くそつ。お前っ……」

与田は苦しそうな表情で恨み言を吐く。僕は意に介せず、動いてローキックを連発した。姑息な手段ではあるのだが、小兵力士が巨漢を相手に動き回って何とかしようとしているように見えるのか、

「潮田、頑張れ！」

「いいぞ、動き回れ」

と観衆が僕を後押しする雰囲気になってきた。こちらとしては苦肉の策で、動き回って奴を疲弊させるしかないという意図なのだが、予想外の効果だった。

「はあっ……はあ……おのれっ……、お前が来てから……俺の人生、おかしくなったんだあ！ま、負けねえぞっ」

玉の如き汗で全身を濡らし、息切れしながらも、奴は最後の力を振り絞るかのように襲い掛かってきた。まさか、自分の転落人生を僕のせいに行っているとは思わなかった。塚山さんの仕業であるとは全く気付いていないらしい。

「何っ？」

驚く事に、与田は僕に組み掛かって来た。これなら僕の思う壺ではないか。さらに、なぜかさっきまでの滑りは全くなかった。そして、

「潮田敗れたり！」

奴は宮本武蔵のようなセリフを吐く。

「もう離れられねえぞ」

「こ、これは？」

確かに与田の言うとおり、奴の身体がまるで粘着テープみたいに僕の肌にくっついて、離れない。さっきまで異様な滑りを持っていた奴の汗が、今度は接着剤のように驚異的な粘着力を発揮しているのだった。

「このまま寄り切りで俺の勝ちだ。十万円払わなくて良かったなあ」
「くそっ……」

奴の嫌味に腹を立てるが、どうにもならない。重みとパワーでは奴の方が上だ。身体がベタベタくっついたまま（しかもやはりオヤジ臭い体臭が鼻を突く）、奴の巨体がブルドーザーのように僕の身体を土俵際まで運んでいく。ついに徳俵に足が掛かった。

「死ねえ、潮田あ」

奴は真上から押し潰すように全身で圧力を掛けてくる。僕の身体は反り返りそうになり、腰が折れてしまいそうだ。

「うおりやゝっ」

僕は意を決してうつちやりを仕掛けた。勝てる確信はないが、このままでは腰を砕かれて、なす術もなく負けてしまう。僕はありったけの腕力で奴のまわしを持ち上げ、右半身を倒すように身体を土俵外に投げ出した。

「うおおあゝ」

与田がうめき声を揚げ、僕と共に土俵下に転落した。物凄い衝撃音が響いたが、落下時、ちょうど奴の身体が下になり、クッション代わりになってくれたので、僕は無傷で済んだ。ついでに落下の衝撃でくっついていた身体も離れた。そして勝負の結果も、

「潮田丸の勝ちいゝ！」

僕の勝利だった。最後に繰り出したうつちやりが、与田の身体を先に土俵外へ投げ飛ばしていたのだ。観衆が大きな声を揚げ、拍手を鳴らして、僕の勝利を讃えている。

「うつ……うつっ」

与田はしばらく土俵下に大の字になったまま起き上がれず、悔しそうな表情で中空を見つめていた。しかし、誰も敗者には同情しな

い。自ら飛び入りで挑戦して、自ら招いた結果だ。奴は自分の巨体をゆつくりと持ち上げると、俯いて、一人花道を去って行った。

腹心とも言うべき与田を仕留め、いよいよ盛永王との決戦に臨めるので、僕は身も引き締まる思いだった。ところが、

「ちよ、ちよっと待ったあ！」

土俵外から、か細い声が揚がった。僕だけでなく観衆までもが皆声のした方角を見た。顔も身体もタコのようにくにかくにやとくねらせながら土俵へ向かって来たのは、

「曲瀬！」

鬱病になった振りをして職場を逃げ去って行ったサボリ野郎だった。皺々に筋張った貧弱な上半身にまわしを締めた姿で土俵に向かってくる曲瀬を見て、観衆が嘲笑しざわめく。

「盛永あ！調子に乗ってんじゃないぞ！潮田と戦う前に、俺がお前をぶっ倒してやる」

奴は僕を制して土俵に上がった。先程の与田の二番煎じで、やっている事まで似ている。ただ、奴の標的は僕ではなく、盛永王だった。

「おい、何言つてんだ曲瀬ちゃんよ。あんた、鬱病で休んでいたんじゃないんか？参加を申し込んでもないのに寝惚けた事を言いなさんな」

盛永はしらけた表情で相手をけなすように言った。

「お前がいなきや、俺も鬱病になんかならなかったんだ。ここでその恨みを晴らしてやる」

「言うに事欠いてそんな言葉が出てくるとはな。仕事サボっておいで、何を言う」

と憤って、盛永は周囲を見渡す。観衆は、

「曲瀬ふざけんな。やられてしまえ！」

「盛永さん、やっちまえ。叩き潰せ！」

といった叫びを揚げており、この二番目の飛び入り者の挑戦を概

ね歓迎しているようだった。それを見て、

「わかった。いいよ、ここでお仕置きしてやるさ」

と盛永王は対戦を受諾した。

「お前に勝って、その後潮田に勝ったら十万円は貰えるんだよな？」

ここで曲瀬はセコい事を言い出した。潔いセリフを吐いていた与田とは雲泥の差だ。見ていた観衆からはブーイングが揚がる。これでは収拾が付かないと見たのか、盛永王が口を開いた。

「こっちは異論ない。負ける訳がないからな。仮に俺が負けたとしたら、潮田君はどうだ？」

「いいですよ。誰が僕に勝とうが十万円は差し上げます。まあ、さすがにこれ以上の飛び入りは勘弁して欲しいですが」

と僕は答えると、一度、土俵下に降りて、この対戦を見守る事になった。

立ち合い、珍しく両者共にその場を動かなかった。さすがの盛永王も、曲瀬のクネクネとした奇妙な動きに警戒心を抱いたようだ。

「盛永さんよ、来ないのか？ だったらこっちから行くぞ」

ノーガード状態でふらふらと揺れながら、曲瀬が歩を進める。

「なめるな！」

盛永王は挑発にムツとしたようで、張り手を繰り出す。強烈な音が響いて、盛永の右手が曲瀬の左頬を叩き付けた。何とその威力は、相手の頬を陥没させていた。しかし、

「へっへへへ」

奇妙な事に、曲瀬の奴は顔が潰れてしまっているというのに、笑みを浮かべるのみで、全く痛みを感じていないようだ。

「この野郎っ」

盛永王は挑発的に顔を突き出してくる相手に腹を立てたようで、連続してビンタを食らわせた。曲瀬の顔が見る見る内に変形していく。だが、奴は痛い様子を微塵も感じさせず、えへらえへらと笑っている。

「盛永さんよ。俺はなあ、痛覚がないんだよ。しかも、顔の皮膚も

この通り……」

と言いながら曲瀬は自分の顔を引っ張った。すると、頬つぺたの皮がゴムのように長く伸びた。そして、洗顔するような仕草を見せると、何と顔面が元に戻ったのだ。

「伸びたり縮んだりするから、いくら打たれようが全く問題ない。名付けて『秘技・くしゃ面魂』」

「ふん。直る割にはさっぱり美男子にならんのだ。まさに『くしゃ面』だ」

盛永王が呆れ顔で呟くと、場内は大爆笑に包まれた。

「バ、バカにしゃがつて！俺の技は『くしゃ面魂』だけじゃない！」
と言うと、曲瀬は盛永王に組み付いた。

「ふん。大した力もないのに組み付いて……」

「『どうする気だ？』と言いたいのかな？盛永君」

曲瀬は得意気な表情で言う。見ると、奴の腕や足がタコの触手のようになって、盛永王の身体に巻き付いていた。信じ難いが、奴の身体は軟体動物のようだ。

「フッフ、これぞ『秘技・タコ入道』だ。こう巻き付けば、剥がす事は出来んぞ」

「むっ」

盛永王の顔色が変わる。曲瀬の手足が絡みついて離れないらしい。

「何だあれ？」

「気持ち悪い」

「おっ、盛永王ピンチか？」

などと、観衆も予想外の曲瀬の体技に驚きの様子を示し始めた。

「どうだ？どうにかしてみろ」

曲瀬は勝ち誇って汚い顔を歪ませる。しかし、

「いいんか？」

盛永王は巻き付かれた当初は動揺していたが、すぐに平然とした表情に戻っていた。いつも近くにいる僕からすると、今はむしろ自信に満ち溢れた顔に見える。

「な、何強がつているんだ！この状態から勝てると思ってんのか」
「思ってるよ」

「へ、へらず口を」

盛永王の強気に、曲瀬の方が動揺しているようだった。

「そろそろ勝っていいんか？」

「や、やってみる。出来るもんならな」

「じゃあ勝つぞ。よいしょつと」

と言うと、盛永は自ら前のめりに倒れ込んだ。土俵が地響きを立てて揺れる。曲瀬は車に轢かれたカエルのように盛永王に押し潰された。

この手があった。巻き付いた事が逆に曲瀬の仇となった。盛永も動けないが、曲瀬自身の身体も固定されてしまったのだ。しかも体重・パワー共に盛永王の方が圧倒的に上だ。奴にしてみれば、前に倒れ込むだけで押し倒し、いや押し潰しで簡単に勝利を手にする事が出来たのだった。

曲瀬は押し花のように平らになり、ひらひらと風に揺られながら花道を去って行く。やはり敗者に声を掛ける者はない。特に曲瀬の場合は誰が見ても自業自得だった。

28話

土俵上、勝ち名乗りを受けた盛永王が胸と腹を張る。そして、

「茶番は終わりだ。さあ、やるぞ潮田君」

と叫んで、僕を指差した。これを聞いて、観衆も沸き立つ。

「取り組みが終わったばかりなのに、休憩しなくていいんですか？」

僕は立ち上がりながら盛永王、そして観衆に尋ねる。

「そんなもんいるか！今すぐ、あんたを土俵にねじ伏せてやる」

「そうですか。じゃあこつちも遠慮なくいきますよ」

僕は自分の頬を張り、気合を入れると土俵に上がった。土俵を囲む経理課職員の大歓声が脳天にまで響く。そして僕の正面に立っているのは仇敵・盛永王。復讐への最高の舞台は整った。

思えば、僕の苦労は前回の飲み旅行での奴の説教から始まったのだ。その後の与田からの迫害、職員の連続離脱等を経て、この相撲大会で幾つかの清算は済んだ。そして生き残った僕と奴とが今、最後の決戦を迎えようとしていた。

もちろん、奴にはそんな意識は微塵もないかもしれない。しかし僕はこの戦いで何としても奴に鉄槌を下してやるつもりだった。

ここで盛永王が挑発的な行動に出た。

「おっと、すまん」

などと言いながら、塩を僕に投げ付けてきたのだ。

「いえ……」

口内にしょっぱい感覚を覚えながらも、僕は耐えた。この後、散々借りを返してやるのだ。ここで怒るのは得策ではない。

仕切りながら、僕達は互いに睨み合う。普段の仕事ならば、すぐに目を逸らしたくなるところだが、今は真剣勝負の場だ。僕は奴の面を逃がすまいと、見据え続けた。この様子に、周囲は本物の大相撲のように、

「うおっっ！」

と盛り上がった。

「待ったなし！」

行司役の本店副課長が声を張り上げる。僕と盛永王は再び睨み合い、中腰になる。そして左拳を土俵につき、右拳もつけようとした刹那、行司が叫んだ。

「はつけよい、残った〜っ！」

僕達は共に頭からぶつかりあった。激突の衝撃で、両者とも後方に弾かれ、少々空間が出来た。

「ぬおお〜っ！」

そこを盛永王は突っ張ってきた。腕を振り回して、連続で張り手を繰り出してくる。僕はそれを掻い潜ってまわしを取ろうと試みた。
「痛っ……」

しかし奴の回転の良い強烈な張り手が頬に当たった。これでカーツとなった僕は、お返しとばかりに張り返した。

乾いたような音が響き、奴の左頬に僕の張り手が決まった。音といい、感触といい、最高に気持ちがいい。普通に仕事をしていたらこんな事は絶対に出来ないからなおさらだ。とはいえ、こんな程度で済ますつもりも毛頭なかった。

僕は張り手でのけぞった奴に組み掛かり、ついにまわしを掴んだ。これでようやく作戦遂行の第一段階に入る事が出来た。

「ふんぬ〜っ！」

盛永王はうめくような声を揚げて、体勢を整えようとするが、僕がそれを許さない。万力の如き握力で、まわしを握り締め、離さない。それどころか、こちらからまわしを引つ張り回して前後左右に揺さ振り、相手のバランスを崩そうと試みる。

力の入った攻防に、観衆も歓声、悲鳴、驚き、様々な声を揚げる。この盛り上がりも僕の思う壺だった。

盛永王は全身真っ赤になって、まるで牛か馬みたいに大暴れした。僕はその動きを利用して、まわしを引きちぎらんばかりに引つ張る。皆の目には、与田との一番同様、小兵が大型力士のバランスを崩そ

うと、必死に仕掛けてるように映ったであろう。

そして段々と奴のまわしが緩んできた。僕は、ここぞとばかりに投げを打つような仕草をしながら、思い切りまわしを引き抜いた。

「キャーッ！」

女性職員の悲鳴のような、喜びのような声が響いた。ついに盛永王のまわしが取れてしまったのだ。

これこそ僕の考えていた屈辱的な復讐だった。決まり手は『モロ出し』。まわしの取れた力士は負けである。僕は勝利を確信して、自分に酔い痴れていた。周囲が大騒ぎする中、盛永王の立派な印は露出し、行司も戸惑っているようだった。確かにデカい。単なる大きさ比べなら、僕の明らかな負けだ。でも、相撲には僕が勝った。ついでに恥も搔かせてやった。

しかし、ここでもんでもない事が起きた。奴は下半身露出をものともせず、反撃とばかりに突き押ししてきたのだ。

そういえば、前に聞いた事があった。盛永王は平然とフリチン状態で卓球をした事があると。ブラブラと揺れ動くのも気にせず、強烈なスマッシュを決めていたらしい。奴にとっては『モロ出し』くらいは屁でもないのかもしれない。

「ちよつと待った！モロ出し……、モロ出しは負けでしょ！」

僕はルールを主張するが、行司の本店副課長は言っている事がわからないような顔をして受け入れない。僕はもう一回言う。

「まわしが取れたら負けですよ！」

行司は困惑しているが、盛永王が戦意むき出しで攻勢を見せているので、止められないようだった。したがって、

「残った、残ったっつ！」

と、僕達を煽り始めた。しかも、

「なんだ、潮田君、逃げるのか？だったら十万円よこせ！」

全裸の盛永王は僕を挑発してくる。観客も再び歓声を揚げているし、どうやらこのまま勝ち逃げは出来ないようだ（実際は逃げでもなく、僕の勝ちの筈なんだが）。

悪い事は重なり、勝ったと思つて油断していた僕は劣勢だった。

まわしがないので掴む所もなく、巨体相手に突き押しするしかない。しかも信じられないが、盛永王は第三の脚を隆起させ、棒のようにして本当の突き押しをしてくる。衛生面で汚いという精神的プレッシャーもある上、本物の力強さを兼ね備えており、なす術がない。

「十万円、もらった〜！」

奴は勢いづいて、上半身・下半身共に突いて、押してくる。ありえない攻撃に、茫然とする僕。ついに足が、土俵際、徳俵にまで掛かった。

（もうダメだ……、完璧な計画だったのに……）僕は観念した。

もう一押しされたら、土俵を割ってしまいそうだった。やはり絶対王政に屈するしかないのか。

しかしここで奇跡が起こった。溺れる者はわらをも掴むではないが、まわしもない以上、他に掴む所もない。僕は押されながら、無意識の内に奴の象徴を掴んでいた。

「むおっ……」

奴が思わず声を揚げる。ルール上、許される事かどうかはよくわからないが、ここまで来れば、もはやルールなどないようなものだった。強力な僕の握力で握られた奴は、一瞬にして力が抜けたように、僕は土俵中央まで押し戻した。

「うっうっ……」

と言いながら、痛いのか恍惚なのかよくわからぬ表情を浮かべる盛永王。僕は握った物を引っこ抜くような手つきで、右手を動かして、奴の体勢を崩そうと試みた。しばらくそんな状態が続くと、

「うお〜っ！」

突然、盛永王が断末魔の如き叫びを揚げた。すると、白い液体が大量に噴出し、僕の身体にまで雪のように降り注いだ。その時、僕に握られている部分は、心なしか二十三回くらい痙攣したような気がした。まるでいつまで続くのかわからない花火の連発打ち上げのようだったが、最後の一発が飛び散ると、僕は奴の身体がグツタリ

とするのを感じた。この勝機を見逃す術はない。僕は奴の象徴を掴んだまま、その巨体を土俵下まで投げ飛ばした。

「わっっ！」

次の瞬間、物凄い歓声と拍手が沸き起こった。皆、性器が露出したとか、汁が出たとか、そんな事を超越した男と男の勝負に感動して見入っているようだった。公然わいせつ罪などという言葉は皆の頭から完全に消えていた。

僕は勝利した。十万円も、力士としての誇りも、守り通したのだ。そして、ついにつくき盛永王に一矢報いる事が出来たのだった。僕に土俵下まで投げ飛ばされた盛永は、意識はあるものの、二重の意味で立つ事が出来ず、すぐに救急車で病院へ運ばれた。

奴も上に立つ者としてさすがに気を遣ったのか、
「俺に構わず、宴会始めてくれい。う、潮田君、マイツたよ……」
と言いついて、救急車に乗って行った。

その後はまさに僕の祝勝会だった。皆が僕の勝利を讃え、酒を注いできた。ビールをかけられ、一升瓶を飲ませられ、無茶苦茶酔っ払ってしまった。しかし心地良い酔いだ。

ついに盛永の露出も笑い話になり、酒の肴となっていた。

「いい気味だったよな」

「すつきりしたぜ」

などのセリフも飛び交っていて、盛永を嫌っている人も結構いたんだと実感した。僕も、

「してやったりですよ。ハハハ」

なんて言つて、得意顔になっていた。

いずれにしても、僕は心から爽快な気分を味わっていた。仇敵を倒した達成感は格別だった。たとえ奴が入院しようが、同情する気はまるでない。今までやられた事、そして内藤さんにした事を考えれば、自業自得としか思えなかった。そんな訳で、今の酒は安物の発泡酒でも、格別な勝利の美酒だった。

僕は終始良い気分でこの飲み旅行を終えた。幹事としても、女性

陣はともかく男性職員にはおおむね好評で、苦勞が報われた気がした。

最終話

さて日曜日、僕は一応ケガをさせた当事者として、盛永王の見舞いに行った。ただ、一人で行くのは嫌だったので、生河君に付いて来てもらった。病室に案内されて、僕は自分の目を疑った。

「おお〜っ……、う、潮田君。見舞いに……来てくれたの……か」

盛永王にはあのパンパンと肉が詰まり、エネルギーだった面影は全くなかった。むしろ、枯れ木のように、今にも朽ちてしまいそうな様子だった。この男が一晩で二十三発の偉業を成し遂げたなど、誰が思うだろう。髪の毛は乱れ、目はうつろ、涎を垂らしそうに口を半開きにし、手足を震えさせている様は、生気のかけらも感じられなかった。そんな奴を見て、僕は何と言っていいものやら挨拶の言葉も出なかった。

「盛永さん、大丈夫ですか？」

声を掛けたのは生河君の方だった。

「大丈夫……。迷惑を掛けてすまないね……」

盛永はらしくない弱気なセリフを吐いた。

「治り次第……、すぐに復帰するから、よろしく……頼む……よ」

「はい。待ってます」

などと生河君は応えたが、どう見てもすぐに復帰してきそうには思えなかった。

「潮田君、負けたよ……。あんたの勝ちだ……」

奴は意識も朦朧としている感じで、うわごとのように呟く。ここに僕達がいる事すら、よく認識出来ていないようだ。

「くそっ……、十万円……。もう十年若ければ……。負けなかった筈……」

「お疲れのようだし、そろそろ行くか」

僕は居心地が悪くなってきて、生河君を促した。二人で深々と頭を下げて、病室を出た。

帰り際に医者に聞いたところ、奴の生殖機能は完全に破壊され、精神的にも弱っているとの事だった。あの攻防での僕の握りが、奴の狂暴な下半身を破壊して、最後の花火を打ち上げさせてしまったのだ。

僕はあんなに弱々しい盛永王を見たのは初めてだったので、正直動揺した。そしてその原因を作ったのは僕自身だという事を認識して、後ろめたさすら覚えた。

「いや、当然の天罰だ！」

「あそこまでやる必要はなかった！」

という二つの考えが頭に渦巻いてきて、しばらく嫌な気分だった。悪党が相手だったとはいえ、やり過ぎな感は否めなかった。しかし、「勝負だったんだから気にする事ないさ。負けたら潮田君があの状態だったかもしれないぜ。さすがに性的不能にまではならなかったかもしれないけどな。ハハハ」

と生河君が言ってくれて、ようやく気分が落ち着いた。

確かにその通りだ。あの土俵は「やらなければやられる」世界だった。盛永が手を抜く筈もなく、僕があそこまで徹底して勝負にこだわらなければ、入院くらいはさせられていたかもしれない。そうなった場合、十万円は取られる、ケガはする、敗戦のショックを引きずる、と良い事は全くない。やはり僕は間違っていた。それがわかって、すっきりした気分ですべてを出る事が出来た。

そしてこの日の深夜、本店の経理係長から電話があり、

「明日は本店に出勤するように」

との事だった。詳しい事は言われなかったが、王なき今、A町支店経理課の存続は危ぶまれており、僕と生河君が二人で出勤しても仕方がないので、そのような措置が取られたようだ。

この夜、僕は入社してから今までの出来事を思い浮かべながら眠った。いろいろあったが、一つの歴史に終止符が打たれようとしていた。

これも全て、僕がA町支店に配属された為なのだろうか？僕がいなければ、このような事態にはならなかっただろうか？そうとは思いたくないが、全く関係ないとも思えなかった。もちろん、僕は盛永や与田からの攻撃に対して正当な防衛をしたつもりだ。だが、こんな結末になるとは思いもしなかった。何処か寂しさや虚しさを感じる自分もいて、結構A町支店が好きだった事がよくわかった。

「ふあゝっ」

不意にあくびが出る。これ以上は考えてもよくわからず、僕は眠りに就いた。

翌朝、本店に出勤すると、経理係長から説明があった。

「盛永さんはいつ復帰出来るかもわからないので、このままA町支店で業務を行うのは不可能である。したがってA町支店の経理業務もまとめて本店で行う」

との事だった。僕は本店付けとなり、生河君と共にA町支店業務を担当しろと指示を受けた。これによって仕事内容はともかく、A町支店経理課は事実上崩壊したのであった。

さて、これにて僕の物語は一区切りを迎えた。最後にここまで関連した人物達がどうなったのか、分かる範囲で語ろうと思う。

まず南川係長は手術が成功したと連絡があった。半年後には、職場復帰してくるとの事だ。

与田は相撲で僕に負けたショックで失踪してしまったらしい。当分戻ってくる気配はないようで、僕としてはホッとしている。噂によると、男として生きていく自信をなくし、オカマの聖地新宿二丁目へ行ってしまったとか何とか……。

曲瀬も盛永王に敗退以来、姿を消してしまったという。何処かの町の大風揚げ大会で、奴の顔に似た気持ちの悪い薄っぺらな風が揚がっていたとか、いないとか……。

吉見さんは子供さんの経過が良いようで、すぐに復帰してきた。

復帰後は、僕同様本店でA町支店の残務を処理している。盛永王の

見舞いにも行つたようだが、その変わりように驚いていたし、

「その潮田さんとの大一番、見たかったなあ」

と笑顔で何度も言われた。やっぱりこの人は下ネタ好きだ。

内藤さんは肉体・精神共に傷が深かつたらしく、肛門科に移されて痔の手術をした後、精神科にも通っている。僕の勝利を一番喜んでくれたのが彼で、せめてもの慰みになったのは幸いだ。

びっくりしたのが、塚山さんが復帰してきた事だ。仕事を捨てていなくなったので、普通なら厳罰ものだが、課長の手が回っているのか、特にお咎めもなく、本店業務に復帰していた。ベッドでヘマした僕は話し掛けるのも恥ずかしく、未だに口を利いていない。誰かが課長とキスしているところを見たとか見ないとか……。

その課長は何を考えているのか、本店に来た僕をよく飲み連れに行ってくれる。大抵二次会はキャバクラへ行き、若者のように一緒に騒いで、全額奢ってくれるのだった。どうやら相撲での対決を通して、僕を気に入ってくれたようだ。ちなみに最近の僕は普通に朝勃ちもするようになった。まだ女性を相手に試していないので、何とも言えないけれど、課長シヨックの後遺症はなさそうである。

そしてもう一つ驚いたのが、僕が本店に行つて三日も経った頃、守田さんが婚約を発表した事だ。相手は職場外の人らしく、江崎さんなど寝耳に水の話だったようで、啞然とした表情を見せていた。「彼氏いません」なんてセリフは、真っ赤な嘘だったのだ。女というのは恐ろしいと、改めて実感させられた。

以上で僕の物語は終わる。本店に来て、まだまだこれからいろいろな事が起こるのだろうが、その話はまた仕切り直して別の機会としよう。今はライバルを休場に追い込み、初優勝を遂げた力士のよくな爽快感に浸りたい。

最終話（後書き）

一応、落選した時の評価シートとやらが来たので、簡単に内容を書いておくと（公表するなどあったので簡潔に書きます）、

「あまりに馬鹿馬鹿しい展開にニヤニヤしつつ読んだ」

「主人公のキャラが一定せず、展開もバラバラでプロットの段階で破綻しているように思う」

「もっと読者を意識してアイデアを練りましょう」
などといった感じでした。

まあ、評価する方が書いている通りなんだと思います。ただ、個人的には「馬鹿馬鹿しい展開にニヤニヤ」は嬉しかったです。まさにそれこそ狙いの一つだったので。

何人くらい読まれているのかわかりませんが、皆様も思うところがあれば、是非、書き残して頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9935f/>

大相撲ショック（職）場所

2010年10月8日15時54分発行